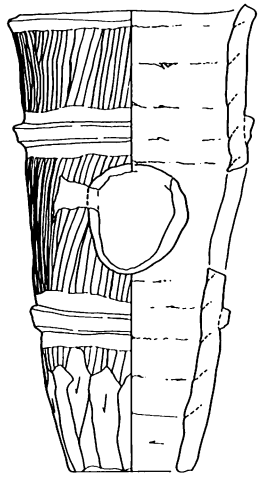
地田栗III遺跡



M-1号墳出土円筒埴輪

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1　赤城山と地田栗Ⅲ遺跡

2　地田栗Ⅲ遺跡出土の土器群

序

関東平野の北西に位置する前橋市は、人口28万余人を有する群馬県の県都です。利根川の水や赤城山南麓の豊かな自然に恵まれた市域には、今から２万年以上も前の旧石器時代から現代に至るまで、人々が連綿として暮らし続けてきた証としての多くの埋蔵文化財が残されています。

特に、地田栗III遺跡が所在する西大室地区は、市の東部の農耕地域に位置し、昔から遺跡の密集地として広く知られており、国・県・市の指定となっている史跡も数多く分布しています。

地田栗III遺跡は、この西大室地区を南北に貫く、前橋市が計画した市道246号線改良工事に先立つ発掘調査です。調査は、道路部分の全長400m、面積5,600m²の区域を実施しました。

調査の結果、古墳３基、古墳時代～平安時代の住居址23軒、溝址16条、井戸址４基等の遺構と円筒埴輪や住居址に伴う土器等の遺物を検出しました。

特筆されるのは、近世の遺構と比定される溝址から江戸時代中頃に使用されたと思われる陶磁器が多量に出土したことです。このことは、純農村地区としては大変特異のことで、今後の地域史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が広く埋蔵文化財の保護普及に役立つと共に、調査より得られた資料が研究資料として活用されれば幸いです。

最後になりましたが、このたびの調査が円滑に進捗するよう御尽力いただいた前橋市土木部土木課の皆様はじめ、関係各位に衷心より感謝申し上げ、序といたします。

平成６年３月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　有坂　　淳

例　　言

1．本報告書は、前橋市市道２４６号線改良工事に係る地田栗Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2．遺跡は、群馬県前橋市西大室町1454-4外に所在する。
3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　有坂　淳が施工者　藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。
　調査担当者および調査期間は以下の通りである。
　　発掘・整理担当者　狩野吉弘・新井真典(前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係)
　　発掘調査期間　平成５年５月10日～平成５年10月８日
　　整理・報告書作成期間　平成５年10日12日～平成６年３月25日
4．本書の原稿執筆・編集は狩野・新井が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部シゲ子・桐谷秀子・鈴木民江・田口桂子・多田啓子・塚本富江・堀越晴子・柳井晶子の協力があった。
5．石器石材の鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会員)、陶磁器の鑑定は大西雅広氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)、埴輪の鑑定は南雲芳昭氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)の手をわずらわせた。
6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。
2．挿図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図(宇都宮)と1/2.5万地形図(大胡)を使用した。
3．各遺跡の略称は５Ｅ29である。
4．各遺構の略称は次の通りである。
　　M…古墳、H…土師器使用の住居址、D…土坑址、W…溝址・水路、O…落ち込み址、
　　Ｉ…井戸址
5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
　　遺構　　古墳…1/200、1/120　住居址…1/60　住居址竈…1/30　土坑址・溝址・井戸址
　　・落ち込み址…1/60　全体図…1/800
　　遺物　　土器…1/3、1/4　埴輪…1/5
　　石器・石製品・その他の金属製品…2/3、1/2、1/3、1/6
6．スクリーントーンの使用は次の通りである。
　遺構平面図　　焼土…点
　遺物実測図　　石器使用痕…線、石器摩滅痕…淡点、須恵器断面…黒塗

目　　次

序

I　調査に至る経緯……1

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地……1

2　歴史的環境……3

III　調 査 の 経 過

1　調 査 方 針……5

2　調 査 経 過……5

IV　層　　序……7

V　遺 構 と 遺 物……10

VI　ま　と　め……20

付　　編

1．地田栗III遺跡の地質調査　<㈲古環境研究所>……21

2．地田栗III遺跡M－1号、M－2号墳の円筒埴輪観察表のまとめ……27

<群馬県埋蔵文化財調査事業団　南雲芳昭>

図　版

口絵　1　赤城山と地田栗III遺跡

ＰＬ．1　地田栗III遺跡Ａ区全景
3　Ｍ－２号墳
5　Ｂ区住居址
7　Ｃ区住居址・遺物
9　近世の陶磁器類
11　古墳～奈良・平安時代の土器
13　古墳～奈良・平安時代の土器
15　古墳時代の埴輪
17　近世の陶磁器類

口絵　2　地田栗III遺跡出土の土器群

ＰＬ．2　Ｍ－１号墳
4　Ｂ区住居址
6　Ｃ区住居址・遺物
8　近世の陶磁器類
10　古墳～奈良・平安時代の土器
12　古墳～奈良・平安時代の土器
14　古墳～奈良・平安時代の土器
16　古墳時代の埴輪
18　石器・金属製品、墨書土器

挿　図

頁

Fig. 1　地田栗III遺跡の位置……vi
3　グリッド設定図……4
5　地田栗III遺跡標準土層図……7
7　Ｂ・Ｃ区全体図……9
9　Ｍ－２号墳墳丘図……33
11　Ｈ－１～２号住居址……35
13　Ｈ－５～６号住居址……37
15　Ｈ－９～10号住居址……39
17　Ｈ－12～14号住居址……41
19　Ｈ－15号住居址……43
21　Ｈ－17号住居址……45
23　Ｈ－20～21号住居址……47
25　I-1～4号井戸址0-1号落ち込み址……49
27　Ｄ－13～21号土坑……51
29　W-1～4・6・7・10～12・14～16号溝址…53
31　古墳～奈良・平安時代の土器(2)……55
33　古墳～奈良・平安時代の土器(4)……57

頁

Fig. 2　地田栗III遺跡周辺遺跡図……2
4　発掘調査経過図……6
6　Ａ区全体図……8
8　Ｍ－１号墳墳丘図……31・32
10　M-3号墳全体図・H-1号住居址……34
12　Ｈ－３～４号住居址……36
14　Ｈ－７～８号住居址……38
16　Ｈ－11～12号住居址……40
18　Ｈ－14～15号住居址……42
20　Ｈ－16号住居址……44
22　Ｈ－18～19号住居址……46
24　Ｈ－22～23号住居址……48
26　Ｄ－１～12号土坑……50
28　Ｄ－22～31号土坑……52
30　古墳～奈良・平安時代の土器(1)……54
32　古墳～奈良・平安時代の土器(3)……56
34　古墳～奈良・平安時代の土器(5)……58

35　古墳～奈良・平安時代の土器(6)……59
36　古墳～奈良・平安時代の土器(7)……60
37　古墳～奈良・平安時代の土器(8)……61
38　古墳～奈良・平安時代の土器(9)……62
39　古墳～奈良・平安時代の土器(10)……63
40　古墳時代の埴輪(1)……64
41　古墳時代の埴輪(2)……65
42　石器・特殊遺物(1)……66
43　石器・特殊遺物(2)……67
44　石器・特殊遺物(3)……68

表

頁

Tab. 1　古墳、奈良・平安時代遺物観察表…23・24
Tab. 2　陶磁器類観察表……24・25
Tab. 3　埴輪観察表……26・27
Tab. 4　石器・特殊遺物観察表……30

調査参加者　青木英夫　阿部こう　阿部シゲ子　飯島民弥　大野京子　落合高男　北浦寛一　木村かね子　喜楽トヨ　桐谷秀子　久保田海一郎　小沼豊子　小沼はつ　小峰　篤　鈴木民江　鈴木智明　須藤か津ゑ　多田啓子　都丸主女作　都丸大雅　富沢彰之　長岡徳治　中村新太郎　原島なか　福島逸司　堀越晴子　松倉りつ　村山ふで　柳井晶子

調査協力　群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　飯島静男　大西雅広　早田勉　杉山秀宏　大工原豊　南雲芳昭　三浦茂三郎　茂木雅男　山下歳信　㈲イズミトレス　井上測量設計株式会社　㈲古環境研究所　サノヤ産業株式会社　篠原設備工業株式会社　㈱シン技術コンサル　鈴木電設　㈲青高館　たつみ写真スタジオ　㈱前橋大気堂　㈱宮下工業

（五十音順敬称略）

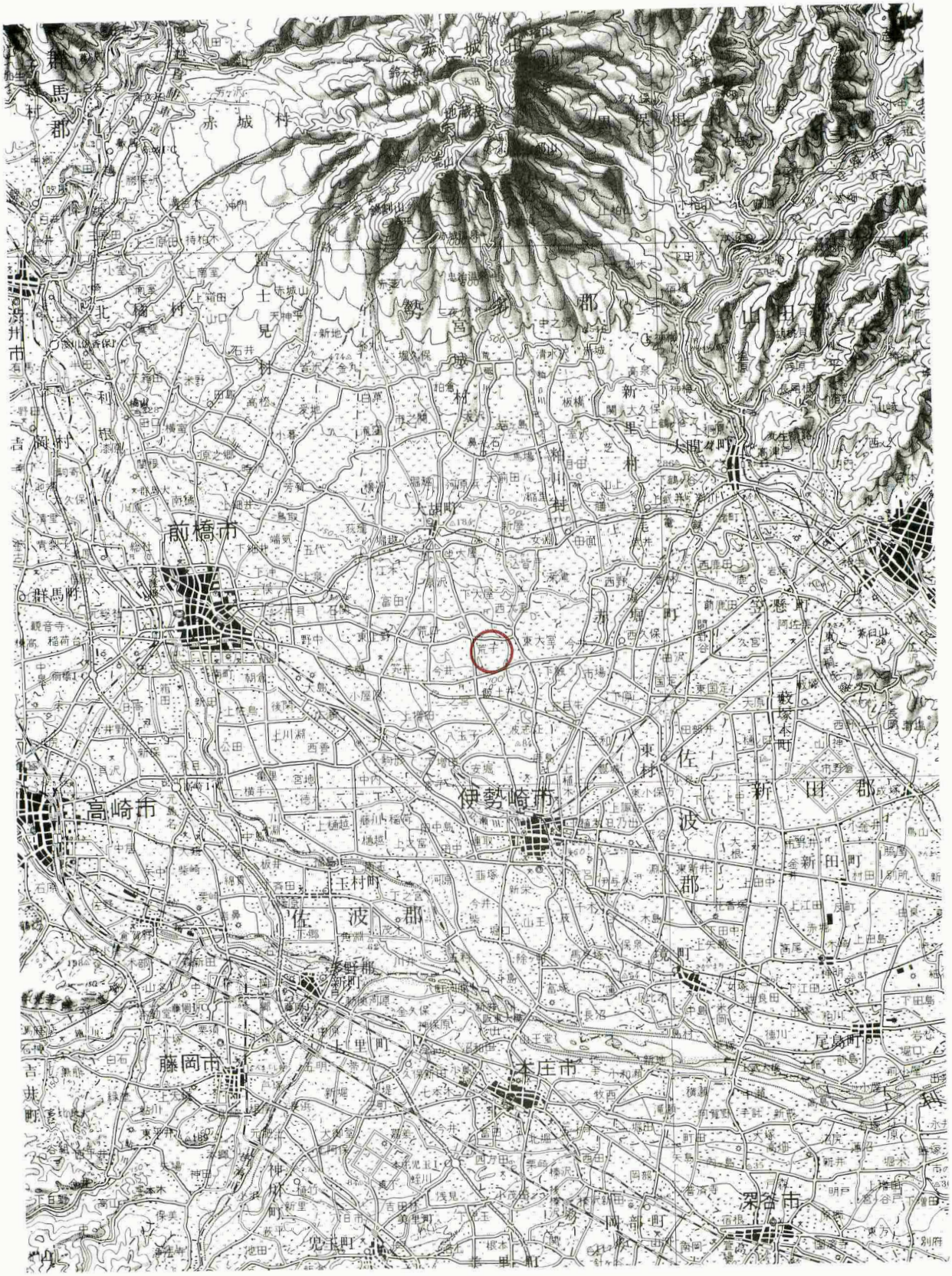


Fig. 1　地田栗III遺跡の位置

I　調査に至る経緯

本発掘調査に関しては、平成５年３月12日付けで土木課より西大室町地内の市道246号線改良工事に係わる埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、同年３月16・17日教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで、調査結果を回答するとともに遺跡の現状保存についても考慮願いたい旨を土木課へ伝達した。その後、土木課と協議・調整を行った結果、工事が回避できないこと等から工事に先立つ埋蔵文化財記録保存のための発掘調査を実施することが確認された。これに基づき同年３月29日、前橋市長より前橋市教育委員会あて本発掘調査の依頼がなされ、教育委員会の内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団がこれを受諾することとし、同年４月27日両者の間で本発掘調査の委託契約が締結された。そして、同年５月10日、現地での発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称の『地田栗III遺跡』は、群馬県教育委員会が平成元年度に荒砥北部ほ場整備事業に伴う発掘調査を実施した際の遺跡の名称『地田栗Ｉ遺跡』および『地田栗II遺跡』を踏まえたものである。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

地田栗III遺跡が所在する西大室町は、前橋市街地(県庁付近)から東へ約11㎞のところにある。今回の発掘調査は幅14m、総延長約400mの市道246号線の改良工事に伴うもので、ほぼ北西から南東に延びる発掘箇所の南端は、国道50号線と神沢川が交差する所から北へ約１㎞の地点で、その北端は県道伊勢崎・深津線と市道10号線の交差点から西へ500mの地点にある。調査の原因である市道246号線は今回の調査箇所を含め、将来的には南は国道50号線から、北は新たに国道353号線に昇格した大間々・赤城・子持線にぬける計画である。完成の暁にはほぼ、赤城山の南斜面を裾野から中腹へ駆け登るルートとなる。この赤城山南麓の地形は関東ローム層を基盤とする洪積台地が発達し、一般に高燥な畑作地が広がっている。その台地は山麓を南下する中小の河川によって樹枝状に開析が進み、複雑な谷地が形成され、そこに狭隘ながら水田が開かれている。本遺跡地は赤城山南麓の最末端部に位置しており、また平成元年度に県営ほ場整備事業が終了しているため、上記のような起伏に富んだ複雑な地形は見られない。周囲は桑畑や水田が広がり、一見ほぼ平坦な地形を呈しているが実際には北から南へ傾斜するゆるやかな斜面上に本遺跡地は位置し、地田栗の集落を中心とした台地上から神沢川の形成した低地にかかる部分(標高113m～107m)に立地している。

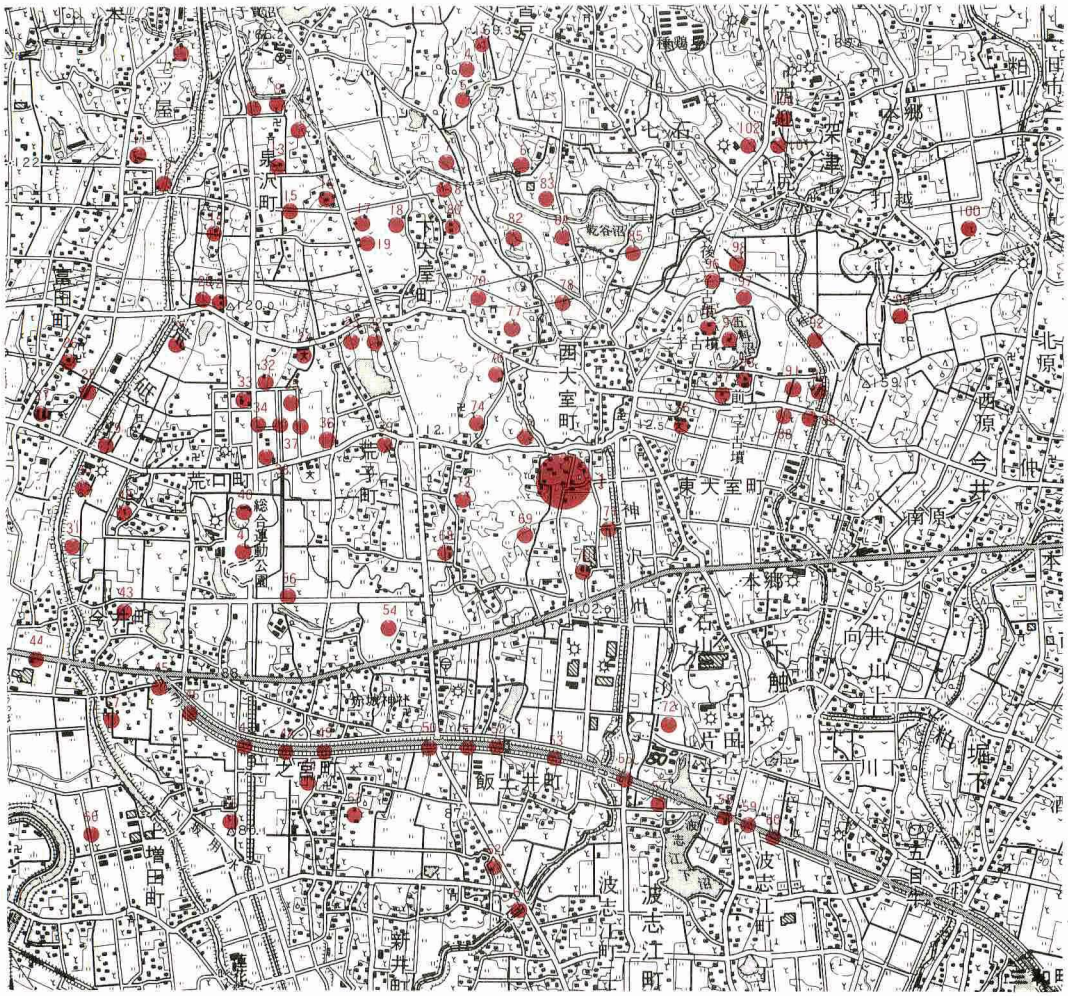


Fig. 2　地田栗Ⅲ遺跡周辺遺跡図(周辺遺跡一覧)

1.地田栗Ⅲ遺跡　2.上ノ山・茂木遺跡　3.熊の穴遺跡　4.熊の穴Ⅱ遺跡　5.上横俵遺跡　6.大久保遺跡　7.大道遺跡　8.山崎遺跡　9.谷津遺跡　10.寺東遺跡　11.三屋遺跡　12.荒砥355号墳　13.寺前遺跡　14.丸山遺跡　15.東前田北遺跡　16.東原西遺跡　17.東原Ｂ遺跡　18.中山Ａ・Ｂ遺跡　19.村主遺跡　20.御殿山古墳　21.北原遺跡　22.堤東遺跡　23.川篭皆戸遺跡　24.荒子小学校校庭遺跡　25.荒砥諏訪遺跡　26.東原古墳群　27.宮下遺跡　28.東原遺跡　29.荒砥宮田遺跡　30.荒砥前田遺跡　31.荒砥北原遺跡　32.柳久保遺跡　33.諏訪遺跡　34.柳久保遺跡　35.中鶴谷遺跡　36.頭無遺跡　37.柳久保水田址遺跡　38.下鶴谷遺跡　39.荒砥中屋遺跡　40.荒砥大日塚遺跡　41.鶴谷遺跡　42.荒口前原遺跡　43.荒砥北三木堂遺跡　44.今井白山遺跡　45.今井道上道下遺跡　46.二之宮谷地遺跡　47.二之宮洗橋遺跡　48.二之宮千足遺跡　49.二之宮宮下西遺跡　50.二之宮宮東遺跡　51.飯土井上組遺跡　52.飯土井中央遺跡　53.飯土井日本松遺跡　54.荒砥上ノ坊遺跡　55.波志江今宮遺跡　56.荒砥大日塚遺跡　57.宮見戸古墳群　58.波志江天神山遺跡　59.波志江六反田遺跡　60.波志江中峰遺跡　61.赤石城址遺跡　62.宿畑古墳　63.青柳遺跡　64.荒砥天の宮遺跡　65.宮原遺跡　66.中原遺跡　67.今井神社古墳群　68.荒砥荒子遺跡　69.立野古墳群　70.丸山古墳群　71.荒砥東原遺跡　72.牛伏遺跡　73.舞台遺跡　74.下境Ｉ遺跡　75.富士山Ｉ遺跡　76.阿久山古墳群　77.伊勢山遺跡　78.中島遺跡　79.明神山遺跡　80.山王遺跡　81.大道遺跡　82.水口山遺跡　83.小稲荷遺跡　84.大稲荷遺跡　85.北山遺跡　86.大室小学校校庭遺跡　87.荒砥上諏訪遺跡　88.荒砥五反田遺跡　89.荒砥五反田遺跡　90.荒砥上川久保遺跡　91.梅木遺跡　92.久保皆戸遺跡　93.前二子古墳　94.中二子古墳　95.後二子古墳　96.上縄引遺跡　97.内堀遺跡　98.下縄引遺跡　99.茶臼山古墳　100.稲荷山遺跡　101.三ケ尻遺跡　102.西原遺跡　103.西迎遺跡

2　歴史的環境

地田栗III遺跡がある赤城山南麓に位置するこの地区は、古墳が多い群馬県下でも最も密な分布がみられる地域の一つとなっている。近年では土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急激にかつ広範囲にわたって行われ、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡が今現在も爆発的に増え続けている。

歴史的な環境の説明として、まず旧石器時代では、周辺では柳久保遺跡群頭無遺跡(36)で細石刃やナイフ形石器等を伴う3枚の文化層が検出され、他に、尖頭器を中心に出土した北三木堂遺跡(43)、牛伏遺跡(72)、熊の穴II遺跡(4)等があげられるが、今後の調査によって遺跡の数はさらに増えるであろう。

縄文時代では、草創期から後期まで検出されている。草創期では、荒砥北原遺跡(31)、北三木堂遺跡(43)があげられる。早期は、荒砥北原遺跡(31)、柳久保遺跡(34)、前期は、鶴谷遺跡(41)、荒砥諏訪遺跡(25)、荒砥上ノ坊遺跡(54)、宮田遺跡(29)、東原遺跡(28)などがあり、中期では、荒砥諏訪遺跡(33)、荒砥北原遺跡(31)、二本松遺跡(53)、後期になると大道遺跡(7)がある。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、荒口前原遺跡(42)で中期末の住居址が調査されている。その他の中期の遺跡として、柳久保遺跡群頭無遺跡(36)があり、また、乾谷沼、五料沼周辺で、北山遺跡(85)、下縄引遺跡(98)、久保皆戸遺跡(92)、西原遺跡(102)、宮下遺跡(27)で後期の住居址が密集し検出されている。

古墳時代になると、この地域は古墳の宝庫とも言われるほどの県下有数の古墳密集地となる。代表的なものとして、国指定史跡となっている西大室の3二子古墳(93・94・95)をはじめ、数多くの古墳が築造されている。6世紀初頭の箱式棺状石室を持つ上ノ山・茂木古墳(2)、その他として、熊の穴遺跡(3)、上横俵遺跡(5)、御殿山古墳(20)、東原古墳群(26)、宮見戸古墳群(57)、宿畑古墳(62)、今井神社古墳群(67)、立野古墳群(69)、丸山古墳群(70)、舞台遺跡(73)、阿久山古墳群(76)、伊勢山古墳群(77)、中島古墳群(78)、水口山遺跡(82)、小稲荷遺跡(83)、大稲荷遺跡(84)など枚挙にいとまがないほどの数である。一方、集落は急激な増加がみられる。前期のものは内堀遺跡群(97)、荒砥宮田遺跡(29)、荒砥東原遺跡(28)、大室小学校校庭遺跡(86)等で、中期は集落址のほかに荒砥荒子遺跡(68)、梅木遺跡(91)、丸山遺跡(14)で豪族居館址が発見されている。続く後期では、北山遺跡(85)で集落址が検出されている。

奈良・平安時代に至ると、近隣した台地上に多数の集落が出現する。集落跡は、中鶴谷遺跡(35)、頭無遺跡(36)、北山遺跡(85)、西迎遺跡(103)がそれにあたる。浅間B軽石によって埋没した水田跡としては、柳久保水田址(37)が知られ、818年(弘仁9年)の地震の際に埋没した水田址として中原遺跡(66)があげられる。

今回の調査は、古墳時代の古墳、住居址から奈良・平安時代の住居址そして中世・近世の溝、井戸などが調査の時代範囲であるが、本調査では江戸時代以降の陶磁器類が多数出土しており、その研究は今後に貴重な影響を及ぼすと思われる。

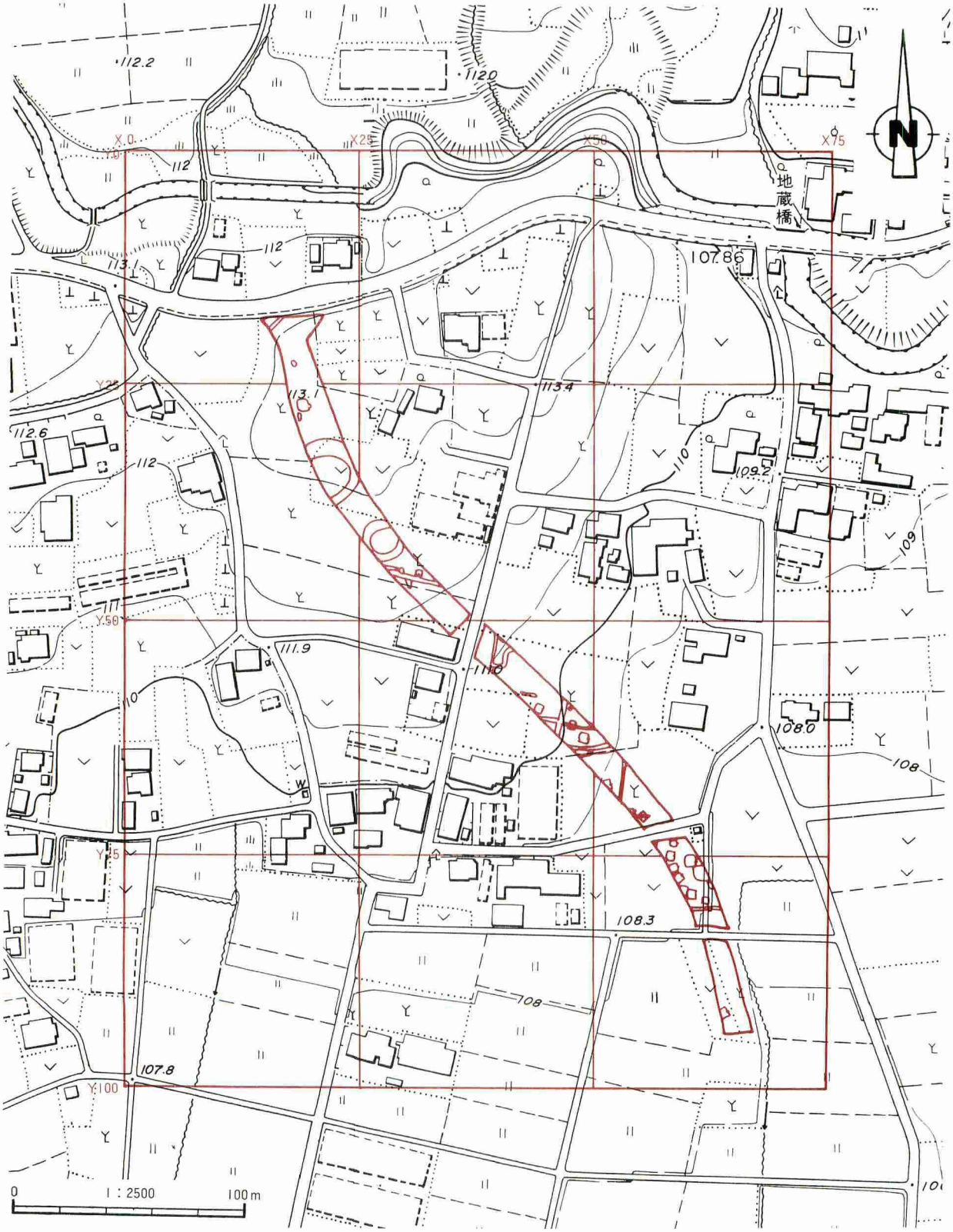


Fig. 3　グリッド設定図

III　調査の経過

1　調査方針

委託された調査箇所は幅14m、総延長約400mの市道改良工事予定地にあたり調査面積は5,600㎡である。調査範囲の形状から全体をA区、B区、C区の3調査区に区分した。調査実施に際しては、発掘調査範囲の全域をカバーする4mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。

各グリッドの呼称方法は南北方向をY軸とし、北から南へY1、Y2、Y3……、東西方向をX軸とし西から東へX1、X2、X3……で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

1．土層観察は遺構中央部で交差するセクションンベルトを設けて行う。
2．10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。
3．カマドは原則として縮尺1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。
　なお、測量の基準点はX25、Y40グリッドで公共座標は第IX系（X＝＋42,140m、Y＝－58,000m）である。

2　調査経過

地田栗III遺跡の発掘調査は5月10日から始まった。まずA区から、重機（バックフォー0.7m³）を投入しての表土掘削が開始されたが、古墳時代から奈良・平安時代、近世にかけての遺構がほぼ均一に広がっていた。2基の円墳はその中心であり、特にM－1号古墳からは、円筒埴輪の破片が数にして3千数百出土し、5月はその遺物上げに大半を費やした。また、この月最初の住居址が検出された。

6月に入り、A区での最大級の遺構であるM－1号・M－2号古墳の掘り下げと遺物上げにかなりの時間がかかり、当初の進行計画にしだい、しだい警笛を鳴らすようになった。残念ながら両古墳から石室を検出することはできなかった。古墳のほかに、いくつかの中・近世の溝から内耳土器・摺鉢・石臼・香炉・茶碗が数多く検出されたのだが、取り上げた時点では昨日まで使っていたのではないかと思われる程、現在使用しているものと似ていた。しかし、後日精査したところ、江戸時代中頃の「遺物」であることが判明した。

今年もまた異常気象か、調査が始まってから〝青空〟の日が数えるほどしかないままに、7月となる。どうしても中旬までにはA区の全体撮影をやり終えなければならない。天気予報とにらめっこした日々の中、明け切らぬ梅雨を恨めしく思いながら、祈るような気持ちで7月16日、撮影当日を待つ。どうにか成功。前日までの清掃を含めた復旧作業の労が癒された。A区の調査の

全てを終了させた後、直ちに埋め戻し、引き続きB・C区の表土剝ぎ(効率を考慮してB・C区は同時進行の計画を立てた。)となった。

8月はC区の調査が中心となった。ここは、付近を流れる神沢川の旧河道が調査区を縦断しており、部分的にローム以外の河川堆積物が地山を形成している。10数軒の住居址が検出されたが、多くが重複をなしており、床面・壁面を決定づけるのは今回の調査の中でも難しく苦労した。住居址は、4世紀から奈良・平安に至るまでの時代幅があったが、石田川式・鬼高式土器、煙道先端部に穴あきの甕を使用した竈や二重竈を持つ住居址など、調査の直前までトウモロコシ畑だったその下わずか数10センチの所にさほど損傷を受けていない歴史が静かに眠り続けていたことに少なからず感銘を抱く。

そして9月の声を聞く。舞台主役はB区へと移った。数軒の住居址と数条の溝の精査をする。今年の夏は、暑さに悩むことはなかったが、雨には悩まされた。せっかく仕上げた遺構も一夜の雨で水浸しとなり、それを掻き出す繰り返しとなった。が、9月28日、調査区上空をヘリコプターが飛んだ。撮影成功。こうして5カ月に及んだ発掘調査は、3基の古墳、23軒の住居址、16条の溝、4基の井戸、30基の土坑等の遺構を検出し、無事終了することができた。

そして10月8日には器材・出土品の運搬を行い、その後の整理作業と報告書の作成は10月12日から平成6年3月25日まで文化財保護課整理棟で行い、すべての作業を完成させる運びとなった。

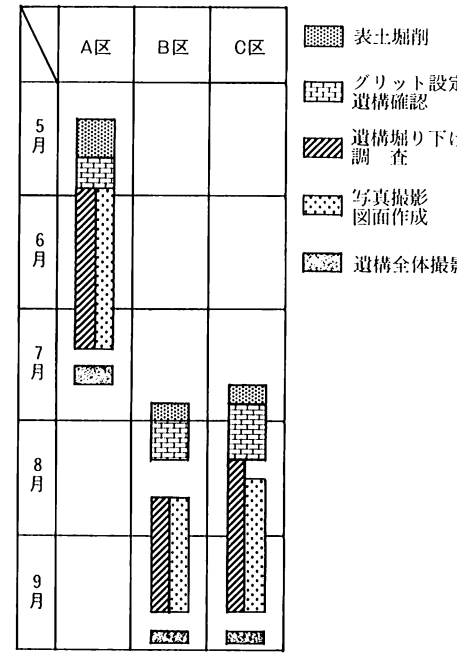


Fig. 4　発掘調査経過図

IV 層　　序

本遺跡は、赤城山南麓の荒砥川から神沢川にかけて広がる扇状地の先端部に位置している。この扇状地は、赤城山の新期成層火山の開析に伴って生産された岩屑や、大胡火砕流に伴って噴出したテフラが後の洪水などによって形成されたもので、その時期は更新世後期(約10万年～４万年前)の頃と思われる。その後、本遺跡地周辺では、この基盤上に完新世(約１万年)以降、新たに形成された小規模な扇状地が広がり、基本的に南北に緩やかに傾斜する地形を形成している。

しかし、遺跡地のほぼ中央部には神沢川の氾濫原と思われる粘土層や礫層の広がる部分があり、ここでは、ローム層の堆積はほとんど見られない。

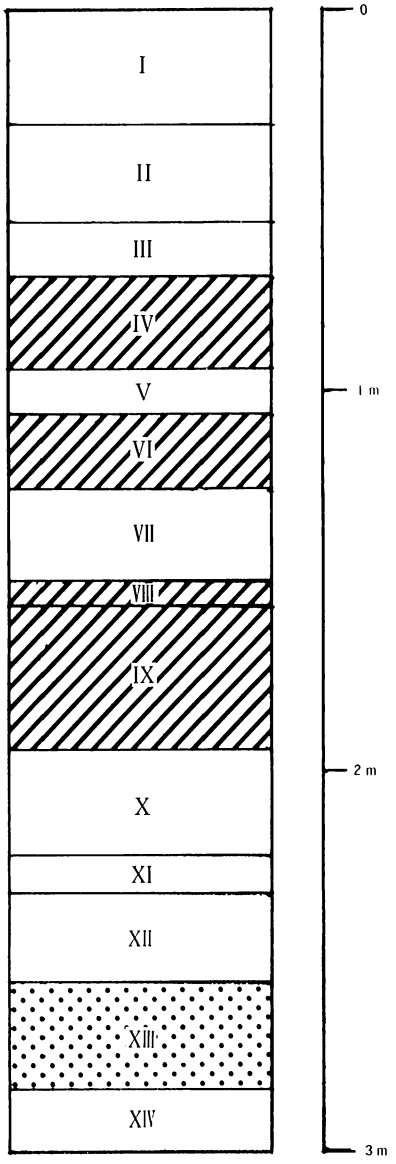


Fig. 5　地田栗III遺跡標準土層図

I　層：黒褐色粗砂層。一次堆積のAs-B(浅間Bテフラ；1108年)を若干含む。粘性、締りともに無し。現在の耕作土層。

II　層：暗褐色細砂層。径10㎜のHr-FP(二ツ岳軽石；６世紀中葉)、As-C(浅間Cテフラ；４世紀中頃)を若干含む。粘性なし、締りややあり。

III　層：暗灰黄褐色細砂層。粘性を少し有し、締りあり。

IV　層：暗褐色硬質ローム層。As-YP(約1.3～1.4万年前)、As-SP(約1.5万年前)をブロック状に５～10%含む。粘性があり堅くしまる。

V　層：褐色硬質ローム層。粘性があり、堅く締まる。

VI　層：黄褐色硬質ローム層。下部にAs-BP(1.8～2.1万年前)をブロック状に20～30%含む。粘性があり、堅く締まる。

VII　層：暗褐色粘土層。薄い暗色帯。AT(2.1～2.4万年前)を含む。粘性が強く、締りが弱い。

VIII　層：灰黄褐色粘土層。薄い暗色帯。ATを含む。

IX　層：灰褐色粘土層。顕著な暗色帯。上部にHr－HA(榛名－八崎火山灰；約2.8万年前)を含む。

X　層：黄褐色硬質ローム層。粘性があり、堅くしまる。

XI　層：明黄褐色硬質ローム層。粘性があり、堅くしまる。

XII　層：灰黄褐色硬質ローム層。粘性があり、堅くしまる。

XIII　層：黄白色軽石層。Hr－HP(榛名－八崎軽石層；4.1万年前)を主体とする。軽石の最大径13㎜。

XIV　層：暗褐色粘土。水成堆積で非常に粘性が強い。

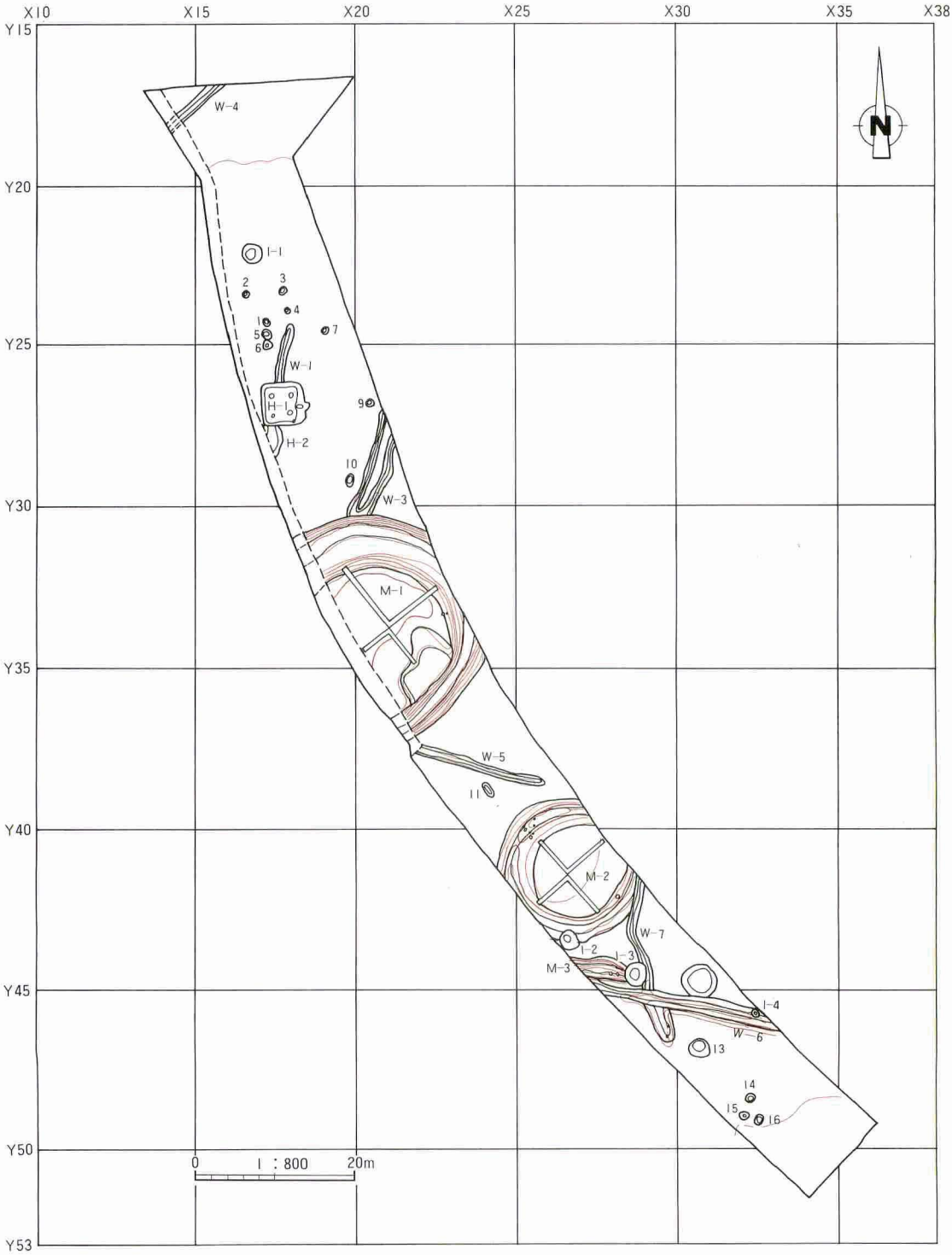

X10
X15
X20
X25
X30
X35
X38
Y15
Y20
Y25
Y30
Y35
Y40
Y45
Y50
Y53
N
W-4
I-1
2
3
4
1
5
6
7
W-1
H-1
H-2
9
10
W-3
M-1
W-5
11
M-2
W-7
I-2
I-3
M-3
I-4
W-6
13
14
15
16
0
1 : 800
20m

Fig. 6　A区全体図

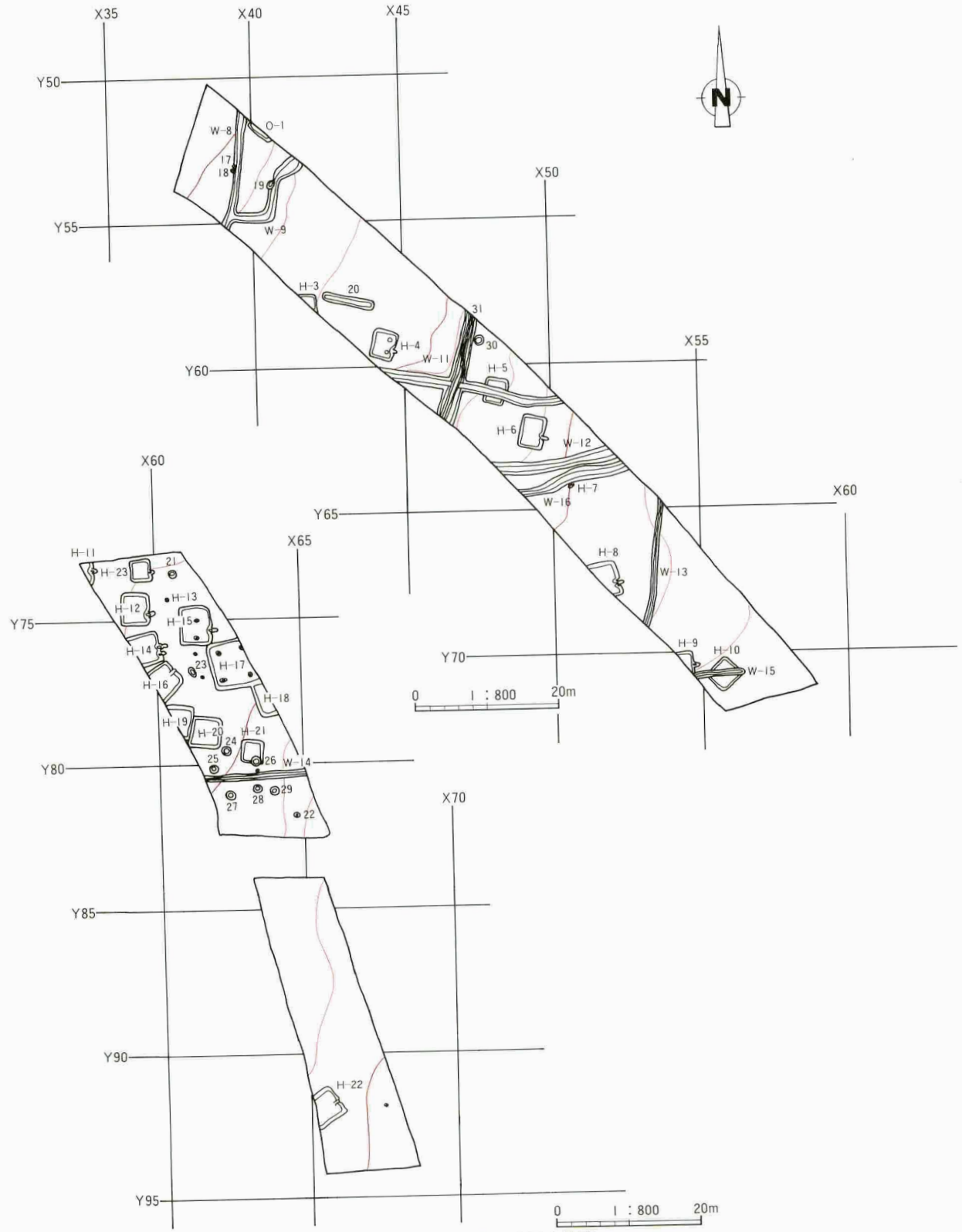

X35
X40
X45
X50
X55
X60
X65
X70
Y50
Y55
Y60
Y65
Y70
Y75
Y80
Y85
Y90
Y95
N
W-8
O-1
17
18
19
W-9
H-3
20
31
H-4
W-11
30
H-5
H-6
W-12
H-7
W-16
H-8
W-13
H-9
H-10
W-15
H-11
H-23
21
H-13
H-12
H-15
H-14
23
H-17
H-16
H-18
H-19
H-20
24
H-21
25
26
W-14
27
28
29
22
H-22
0
1 : 800
20m

Fig. 7　B・C区全体図

V　遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は古墳３基、竪穴住居址23軒、井戸址４基、土坑30基、落ち込み１基、溝址16条である。これらの遺構は、ほとんどが表土下0.7～１mの基本層序の第Ⅳ層を掘りこむ形で容易に検出できた。３基の円墳のうち墳丘を伴うものはM－１、M－２号墳でM－３号墳は周堀のみである。竪穴住居址23軒の時代別内訳は古墳時代の石田川式土器を伴う住居址４軒、鬼高式土器を伴う住居址３軒、奈良・平安時代の住居址16軒である。また遺物では、M－１、M－２号墳から総計3400点あまりの埴輪片が検出されたほか、W－６号溝址を中心に約1000点あまりの陶磁器類が出土した。これらの陶磁器類はほとんどが18～19世紀前半の江戸時代のもので、器種も陶磁器をはじめ、摺鉢、焙烙、土鍋、香炉、砥石、石臼、煙管など多岐にわたっている。なお、３基の古墳については、群馬県教育委員会が平成元年度に実施した荒砥北部遺跡群発掘調査(報告書名：「下境・天神」)で本遺跡と隣接する地田栗Ⅰ遺跡から３基の古墳が検出されているが、平面図および公共座標の照合などから、地田栗Ⅰ遺跡１号墳は本遺跡のM－３号墳と、地田栗Ⅰ遺跡２号墳はM－１号墳とそれぞれ接続する同一の古墳である可能性が高い。

１　古　　墳

M－１号墳　(Fig. ８、ＰＬ．２)

◎位置　Ｘ18～24、Ｙ30～37グリッド　標高113.0m　◎墳丘　墳丘長東西(13.6m)、南北17.9m。周堀を含めた総長東西(14.4m)m、南北23.60mの円墳と考えられる。全体に攪乱が著しいが南東部が窪んでおり、前庭部分と思われる。◎主体部　攪乱がひどく規模、形状とも不明。◎遺物　総数は3500点を超えるが、うち90パーセント以上を埴輪が占める。図示できたものは朝顔型埴輪(埴輪No.１・２)、円筒埴輪(埴輪No.３～10)、須恵器甕(１)、須恵器坏蓋(２)、須恵器高坏(３)、須恵器坏(４)があるが、同時期の遺物は埴輪以外は皆無で流れ込みの可能性が高い。◎備考　地田栗Ⅰ遺跡２号墳と周堀が接続する。

M－２号墳　(Fig. ９、ＰＬ．３)

◎位置　Ｘ24～28、Ｙ39～43グリッド　標高　112.4m　◎墳丘　墳丘長東西(11.90m)、南北12.10m。総長東西(12.98m)、南北18.16mの円墳と考えられる。◎主体部　攪乱がひどく規模、形状とも不明。◎遺物　総数は埴輪を中心に327点を数えるが、図示できた遺物は円筒埴輪(埴輪No.11～16)６点である。

M－３号墳　(Fig. 10、ＰＬ．３)

◎位置　Ｘ27～30、Ｙ44～46グリッド　◎備考　周堀の一部のみ調査。墳丘、主体部とも調査区外のため規模・形状とも不明であるが、隣接する地田栗Ⅰ遺跡１号墳と周堀が接続する。また、

本遺構は近世陶磁器類が大量に検出されたW－６号溝址およびＩ－３号井戸址と重複するためか、埴輪類の出土は皆無だった。

２　住居址

Ｈ－１号住居址　(Fig. 10・11、ＰＬ．１)

◎位置　Ｘ17・18、Ｙ26・27グリッド　◎面積　24.8㎡　◎方位　Ｎ－86°－Ｅ　◎形状　東西5.12m、南北5.22mのほぼ正方形を呈する。東壁のやや南よりに竈を有する。◎床面　ほぼ、平坦な床面をもち、竈を中心に堅緻面が検出された。壁高は49.3cmを測る。周溝は竈部分を除き全周する。◎竈　全長181cm、全幅98cm、焚口部幅57cmを測り、燃焼部はほぼ壁面ラインにあったと思われる。◎重複　Ｈ－２→本遺構→W－１の順で重複する。◎遺物　遺物総数は2155点を数えるが、小破片が多くを占め、図示できたものは土師器甕(５・９)、土師器台付甕(６)、須恵器椀(７)、須恵器坏(８)の５点である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－２号住居址　(Fig. 11、ＰＬ．１)

◎位置　Ｘ17・18、Ｙ28・29グリッド　◎面積　(5.0)㎡　◎方位　Ｎ－63°－Ｅ　◎形状　西側部分が調査区外に延びるため、完掘はできなかったが、東西(1.78)m、南北(3.62)mのやや崩れた方形プランを呈する。壁高は39.7cmを測る。◎床面　よく踏み固められた平坦な床面が広がっており、竈付近は焼土面が見られる。◎竈　全長98cm、全幅109cm、焚口部幅29cmを測る。燃焼部はほぼ壁面ラインに設置されていたと思われる。◎重複　Ｈ－１と重複し、本遺構が先行する。◎遺物　出土総数は582点で、うち図示できたものは須恵器高台皿(10)、須恵器高台椀(11・13)、須恵器高台椀(12)、須恵器椀(14)、土師器坏(15・16)の７点である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－３号住居址　(Fig. 12)

◎位置　Ｘ41、Ｙ57・58グリッド　◎面積　(2.5)㎡　◎方位　Ｎ－89°－Ｅ　◎形状　中心部が調査区外に延びるため完掘はできなかったが、東西(2.06)m、南北2.04mの方形プランを呈するものと思われる。壁高は12.8cmを測る。◎床面　よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。◎遺物　総数は10点で、図示できたものは須恵器高台椀(17)の１点のみである。◎備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－４号住居址　(Fig. 12、ＰＬ．４)

◎位置　Ｘ43・44、Ｙ58・59グリッド　◎面積　12.3㎡　◎方位　Ｎ－20°－Ｅ　◎形状　東西3.38m、南北3.84mのほぼ正方形。壁高は30.2cmを測る。◎床面　やや凹凸ぎみのよく踏み固められた床面が全面に広がっており、２本の柱穴は中心線よりやや東側に偏在する。また周溝はほ

ぼ全周する。◎竈　全長87cm、全幅93cm、焚口部幅25cmを測り、燃焼部は壁外に設置されている。◎遺物　総数は153点を数えるが、図示できたものは須恵器高台椀(18)の１点のみである。◎備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－５号住居址　(Fig. 13)

◎位置　Ｘ47・48、Ｙ60・61グリッド　◎面積　9.6m²　◎方位　Ｎ－76°－Ｅ　◎形状　東西2.94m、南北3.44mの方形。壁高は8.2cmを測る。◎床面　部分的に堅緻面が存在する。◎重複　近世の溝址Ｗ－10と重複。◎遺物　総数は102点を数えるが、流れ込みが多く図示できたものは床面上より検出された緑釉高台椀(19)の１点のみである。◎備考　竈施設は重複するＷ－10号溝址に切られているためか、検出できなかった。出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－６号住居址　(Fig. 13、ＰＬ. ４)

◎位置　Ｘ48・49、Ｙ61～63グリッド　◎面積　14.3m²　◎方位　Ｎ－10°－Ｅ　◎形状　東西2.94m、南北4.66m。壁高は41.9cmを測る。◎床面　よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。周溝は竈部分を除き全周する。２個のピット(P_1・P_2)を検出したがいずれも柱穴とは断定できなかった。◎竈　全長218cm、全幅50cm、焚口部幅80cmを測り、燃焼部は壁外に設置されている。◎遺物　総数は142点を数えるが、埋土の小破片が多く復元に至る遺物はなかった。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－７号住居址　(Fig. 14)

◎位置　Ｘ50、Ｙ64グリッド　◎方位　Ｎ－89°－Ｅ　◎形状　竈のみ検出。住居址の東壁に付設された竈と推定できるが、遺存状態は極めて悪い。全長76cm、全幅44cm、深さ7.5cmを測る。

Ｈ－８号住居址　(Fig. 14、ＰＬ. ４)

◎位置　Ｘ51・52、Ｙ66・67グリッド　◎面積　(16.9)m²　◎方位　Ｎ－69°－Ｅ　◎形状　東西(3.06)m、南北5.06mのほぼ方形。壁高は55cmを測る。◎床面　よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。◎竈　全長98cm、全幅133cm、焚口部幅27cmを測る。燃焼部は東壁ライン上に位置している。遺存状況が良好である。◎遺物　総数は361点を数え、図示できた遺物は土師器長胴甕(20・21・23・24)、土師器甕(22)の５点である。竈周辺からの出土が多い。備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

Ｈ－９号住居址　(Fig. 15、ＰＬ. ５)

◎位置　Ｘ54、Ｙ69・70グリッド　◎面積　(4.1)m²　◎方位　Ｎ－79°－Ｅ　◎形状　一部調査区外のため未確定ではあるが東西(2.24)m、南北(３.16)mのほぼ方形プランを呈する。壁高は

26.7cmを測る。◎床面　竈を中心に、よく踏み固められた平坦な床面が検出された。◎竈　全長94cm、全幅78cm、焚口部幅18cmを測り、燃焼部は壁外に出ている。◎遺物　総数は土師器、須恵器の小破片6点のみであり、復元には至らなかった。◎備考　出土遺物、住居の形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H－10号住居址　(Fig. 15)

◎位置　X55・56、Y70・71グリッド　◎面積　12.1m²　◎方位　N－40°－E　◎形状　東西3.78m、南北3.60mのほぼ正方形のプランを呈する。壁高は15.4cmを測る。◎床面　よく踏み固められたやや凹凸ぎみの床面が広がっている。◎重複　近世溝址W－15と重複し、竈は検出できなかった。◎遺物　総数は137点を数えるが、埋土遺物や流れ込みのものが多い。図示できた遺物は瓦塔(25)、カワラケ(26)の2点である。◎備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H－11号住居址　(Fig. 16、PL. 5)

◎位置　X57、Y73グリッド　◎面積　(3.8)m²　◎方位　N－90°－E　◎形状　東西(2.16)m、南北(2.76)mの方形。壁高は25.1cmを測る。◎床面　旧神沢川の氾濫原に位置するため、基本層序には見られない粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。◎竈　全長112cm、全幅39cm、焚口部幅24cmで、燃焼部は東壁ライン上に位置している。◎遺物　遺物総数は116点を数え、図示できたものは須恵器坏(27)、須恵器甕(28・29・30)の4点である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。なお須恵器坏(27)は貯蔵穴からの出土である。

H－12号住居址　(Fig. 16・17、PL. 5)

◎位置　X58・59、Y74・75グリッド　◎面積　17.7m²　◎方位　N－90°－E　◎形状　東西4.08m、南北4.74mの正方形。壁高は43.6cm。◎床面　H－11号住居址と同様粘性の強い極暗赤褐色のシルト層を掘り込み床面を形成している。　◎竈　全長118cm、全幅112cm、焚口部幅は19.5cmを測る。燃焼部は東壁ライン上に設置されている。◎遺物　総数は164点であるが、小破片が多く図示できたものは土師器坏(31)、須恵器坏(32)の2点である。◎備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H－13号住居址　(Fig. 17)

◎位置　X60、Y75グリッド　◎方位　N－48°－W　◎形状　本遺構は竈のみの検出である。◎竈　全長154cm、全幅50cm、深さ38cmを測る。

H－14号住居址　(Fig. 17・18、PL. 6)

◎位置　X58～60、Y75・76グリッド　◎面積　(14.4)m²　◎方位　N－71°－W　◎形状　一部調査区外に延びるが、東西(3.92)m、南北4.58mの方形。壁高は27.6cm。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。やや凹凸の目立つ床面である。◎竈　2つの竈を有する。全長174cm、全幅61cm、焚口部幅30cm(No.1)、全長143cm、全幅71cm、焚口部幅31cm(No.2)。いずれも壁外に燃焼部を持ち、煙道部分には土師器甕を利用している。新旧関係は不明。◎遺物　遺物総数は2372点を数え、図示できたものは土師器高台椀(33)、土師器甕(34・35・36・37)の5点である。(34)は竈No.2の、(36)は竈No.1の煙道部分に利用されていた。◎備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H－15号住居址　(Fig. 18・19、PL. 6)

◎位置　X60・61、Y74・75グリッド　◎面積　23.3m²　◎方位　N－89°－E　◎形状　東西4.72m、南北5.46mの長方形。壁高は51.4cm。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。住居址中央のほぼ南北ライン上に2基の柱穴を持つ。◎竈　全長133cm、全幅123cm、焚口部幅35cmで、燃焼部は東壁ラインに設置されている。◎遺物　遺物総数4689点で、図示できたものは土師器坏(38)、須恵器坏蓋(39)、須恵器坏(40・41・42・43・44・45)の8点である。◎備考　出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H－16号住居址　(Fig. 20、PL. 6・7)

◎位置　X59・60、Y76・77グリッド　◎面積　(14.8)m²　◎方位　N－42°－E　◎形状　東西4.72m、南北(4.22m)の長方形。壁高は36.1cm。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。竈を中心に堅緻面が広がっている。やや凹凸が目立つ。◎竈　全長100cm、全幅82cm、焚口部幅54cmで両袖が張り出し燃焼部は、壁内にある。竈支柱として土師器高坏(51)を倒立して利用している。◎貯蔵穴　長軸70cm、短軸54cm、深さ46cmを測る。◎遺物総数は288点で、図示できた遺物は土師器甕(46・47・49・50)、土師器小鉢(48)、土師器高坏(51)土師器坏(52・53・54・55・56)の11点である。なお(48)(52)(53)は貯蔵穴内の出土である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は鬼高@式土器を伴う6世紀前半の住居址と考えられる。

H－17号住居址　(Fig. 21、PL. 7)

◎位置　X61～63、Y75～77グリッド　◎面積　(35.0)m²　◎方位　N－76°－E　◎形状　東西(6.92)m、南北7.16mの正方形。壁高は27.1cmを測る。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。竈を中心に堅緻面が広がっている。やや凹凸が目立つ。◎炉址　2個検出。長径87cm、短径58cm、深さ12cm(F_1)、長径44cm、短径36cm、深さ6cm(F_2)でいずれも地床炉。◎貯蔵穴　長軸70cm、短軸62cm、深さ51cmを測る。◎重複　本遺構→H－18号住居址の順に構築。◎遺物　総数は201点で、図示できたものは土師器高坏(57)、土師器小鉢

(58)、土師器甕(59)、土師器台付甕(60)、土師器小甕(61)の５点である。なお(58)は貯蔵穴内の出土である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は石田川式土器を伴う４世紀後半の住居址と考えられる。

Ｈ－18号住居址　(Fig. 22)

◎位置　Ｘ63・64、Ｙ76～78グリッド　◎面積　(8.6)m²　◎方位　Ｎ－63°－Ｅ　◎形状　中心部が調査区外に延びるが、東西(1.84)ｍ、南北5.70ｍの方形プランを呈する。壁高は16.6cmを測る。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。特に堅緻面等は見られない。◎重複　Ｈ－17→本遺構の順で重複。◎遺物　総数は66点を数え、図示できたものは土師器甑(62)、勾玉(石器・特殊遺物：番号25)の２点である。◎備考　出土遺物から本遺構は鬼高Ｉ式土器を伴う６世紀前半の住居址と考えられる。

Ｈ－19号住居址　(Fig. 22)

◎位置　Ｘ60・61、Ｙ78・79グリッド　◎面積　(10.1)m²　◎方位　Ｎ－90°－Ｅ　◎形状　一部調査区外に延びるが、東西(3.40)ｍ、南北４.50ｍの方形。壁高は15.7cmを測る。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。特に堅緻面等は見られない。◎炉址　検出できなかった。◎貯蔵穴　長軸86cm、短軸66cm、深さ48cmを測る。◎重複　本遺構→Ｈ－20の順に構築　◎遺物　総数は46点であるが、土師器小破片が多く、重複するＨ－20号住居址と接合できた遺物も含まれていた。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は石田川式土器を伴う４世紀後半の住居址と考えられる。

Ｈ－20号住居址　(Fig. 23、ＰＬ. ７)

◎位置　Ｘ61・62、Ｙ78・79グリッド　◎面積　16.3m²　◎方位　Ｎ－90°－Ｅ　◎形状　東西4.28ｍ、南北4.10ｍの正方形。壁高は12.3cmを測る。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。特に堅緻面等は見られない。◎炉址　検出できなかった。◎重複　Ｈ－19→本遺構の順に構築。◎遺物　遺物総数は88点で、図示できた遺物は土師器高坏(63)、土師器壺(64)、土師器小甕(65)、土師器台付甕(66)の４点である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は石田川式土器を伴う４世紀後半の住居址と考えられる。

Ｈ－21号住居址　(Fig. 23)

◎位置　Ｘ62・63、Ｙ79グリッド　◎面積　8.8m²　◎方位　Ｎ－3°－Ｅ　◎形状　東西3.03ｍ、南北3.14ｍの正方形。壁高は3.8cmと浅い。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。住居址中央部に若干堅緻面が残る。◎炉址　１個検出。長径72cm、短径68cm、深さ６cmで地床炉。◎重複　Ｄ－26と重複。本遺構が先行する。◎遺物　総数は11点であるが、土師器小破片が多く、復元には至らなかった。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構

は石田川式土器を伴う4世紀後半の住居址と考えられる。

Ｈ－22号住居址　(Fig. 24、ＰＬ. 7)

◎位置　Ｘ65・66、Ｙ91・92グリッド　◎面積　(11.4)m²　◎方位　Ｎ－54°－Ｅ　◎形状　一部調査区外に延びるが、東西3.70m、南北4.26mのほぼ長方形。壁高は8.5cmと浅い。◎床面　旧神沢川の氾濫原に位置するため、粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成している。◎竈　全長68cm、全幅66cm、焚口部幅14cmを測る。燃焼部は完全に住居内にある。竈支柱として土師器高坏(68)を倒立させ利用している。◎遺物　総数は10点で、図示できたものは土師器甑(67・70)、土師器高坏(68)土師器小甕(69)、土師器甕(71)、勾玉(石器・特殊遺物：№26)の6点である。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は鬼高Ｉ式土器を伴う6世紀前半の住居址と考えられる。

Ｈ－23号住居址　(Fig. 24、ＰＬ. 7)

◎位置　Ｘ58～60、Ｙ72・73グリッド　◎面積　8.2m²　◎方位　Ｎ－80°－Ｅ　◎形状　東西2.88m、南北3.06mの長方形。壁高は22.7cmを測る。◎床面　粘性の強い極暗赤褐色の微砂層を掘り込み床面を形成し、凹凸の目立つ堅緻面がほぼ全面に広がっている。◎竈　全長76cm、全幅70cm、焚口部幅22cmを測る。燃焼部は壁外に設置されている。◎遺物　総数は143点であるが、小破片が多く図示できたものは土師器台付甕(72)の1点のみである。◎備考　出土遺物、住居形態から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

3　井戸址

Ｉ－1号井戸址　(Fig. 25)

◎位置　Ｘ16・17、Ｙ22グリッド　◎形状　長軸2.26m、短軸2.16m、深さ(2.98)mの摺鉢状。◎遺物　総点数6点。図示できたものは石臼(石器・特殊遺物№47・48)、肥磁陶器(陶磁器№48・49)の4点である。◎備考　出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

Ｉ－2号井戸址　(Fig. 25)

◎位置　Ｘ26、Ｙ43グリッド　◎形状　長軸2.08m、短軸1.64m、深さ(2.77)mの不定形。◎遺物　なし。◎重複　Ｍ－2号墳→本遺構の順で重複。◎備考　近世以降の所産と考えられる。

Ｉ－3号井戸址　(Fig. 25)

◎位置　Ｘ29、Ｙ44グリッド　◎形状　長軸3.06m、短軸2.68m、深さ(1.92)mの摺鉢状。◎遺物　総数は13点で、図示できたものは板碑(石器・特殊遺物№23)、瀬戸美濃陶器(陶磁器№50)の2点である。◎重複　Ｍ－3号墳→本遺構→Ｗ－7号溝址の順で重複する。◎備考　出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

Ｉ－４号井戸址　(Fig. 25)

◎位置　Ｘ33、Ｙ45グリッド　◎形状　長軸0.76m、短軸0.62m、深さ(1.92)mの円筒状。◎重複　Ｗ－６と重複。新旧関係は断定できない。◎遺物　総数６点でいずれも陶磁器の破片であり、図示するに至らなかった。◎備考　出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

4　落 込 み

Ｏ－１号落込み　(Fig. 25)

◎位置　Ｘ39・40、Ｙ51・52グリッド　◎形状　ほとんど調査区外に延びるが、東西(0.64)m、南北(2.7)m、面積(2.1)m²の隅丸方形。◎遺物　なし。◎備考　床面に当たる部分まで、なだらかに掘り込んでおり、住居址とは断定できなかった。

5　土　　坑

本遺跡から検出された土坑は総数30基である。Ｄ－８号土坑は欠番。

土 坑 名	Fig.	位置(グリッド)	形状等(長径×短径×深さ)cm	重　複	備　　考
Ｄ－１号土坑	26	Ｘ17、Ｙ24	138× 94× 31　楕 円 形	－	土師器、陶磁器の破片６点が出土。
Ｄ－２号土坑	26	Ｘ16、Ｙ23	74× 58× 30　楕 円 形	－	土師器、陶磁器の破片５点が出土。
Ｄ－３号土坑	26	Ｘ17・18、Ｙ23	92× 62× 22　楕 円 形	－	土師器の破片３点が出土。
Ｄ－４号土坑	26	Ｘ18、Ｙ24	51× 46× 28　円　　形	－	遺物なし。
Ｄ－５号土坑	26	Ｘ17、Ｙ24	96× 78× 10　円　　形	－	土師器の破片３点が出土。
Ｄ－６号土坑	26	Ｘ17、Ｙ25	102× 94× 31　円　　形	－	遺物なし。
Ｄ－７号土坑	26	Ｘ19、Ｙ24	71× 62× 24　円　　形	－	遺物なし。
Ｄ－９号土坑	26	Ｘ20、Ｙ26・27	86× 68× 43　楕 円 形	－	土師器、須恵器の破片10点が出土。
Ｄ－10号土坑	26	Ｘ20、Ｙ29	124× 86× 22　楕 円 形	－	土師器、須恵器の破片７点が出土。
Ｄ－11号土坑	26	Ｘ24、Ｙ38・39	186× 90× 31　隅丸長方形	－	遺物なし。
Ｄ－12号土坑	26	Ｘ31・32、Ｙ44・45	416×388× 32　円　　形	Ｗ－６が後続	土師器、須恵器の破片など中ポリ袋１袋が出土。遺物は須恵器高台椀など奈良・平安時代の特徴を示している。
Ｄ－13号地下式土坑	27	Ｘ31、Ｙ46・47	272×234×217　楕 円 形	－	内部は壁面を北東方向に２m近く掘り進み、ドーム状の空間を形成している。床面は極端な楕円形を呈し、やや凹凸が目立つ。遺物総数24点で、ほとんどが陶磁器類の破片であり、天井部崩落後の流れ込みと思われる。図示できたものは肥前陶器(陶磁器№51)、磨石(石器・特殊遺物№13)の２点である。
Ｄ－14号土坑	27	Ｘ33、Ｙ48	102× 92× 12　円　　形	－	煙管(石器・特殊遺物№39) １点の出土があった。
Ｄ－15号土坑	27	Ｘ32・33、Ｙ48・49	104× 98× 41　不 整 形	－	陶磁器片２点が出土。
Ｄ－16号土坑	27	Ｘ33、Ｙ48・49	104× 92× 26　円　　形	－	流れ込みの石鏃(石器・特殊遺物№４) １点が出土。
Ｄ－17号土坑	27	Ｘ39、Ｙ53	54× 39× 34　楕 円 形	Ｗ－８が先行	遺物なし。
Ｄ－18号土坑	27	Ｘ39、Ｙ53	54× 39× 28　楕 円 形	Ｗ－８が先行	遺物なし。
Ｄ－19号土坑	27	Ｘ40、Ｙ53	88× 64× 27　楕 円 形	Ｗ－９が先行	遺物なし。
Ｄ－20号土坑	27	Ｘ42・43、Ｙ57・58	690× 84× 28　長 方 形	－	陶磁器破片ほか計３点出土。
Ｄ－21号土坑	27	Ｘ60、Ｙ73	95× 87× 16　円　　形	－	奈良・平安時代の土師器、須恵器の破片ほか計６点が出土。
Ｄ－22号土坑	28	Ｘ64、Ｙ82	56× 52× 24　円　　形	－	遺物なし。
Ｄ－23号土坑	28	Ｘ61、Ｙ76	124× 84× 16　楕 円 形	－	奈良・平安時代の土師器、須恵器の破片ほか計22点が出土。
Ｄ－24号土坑	28	Ｘ62、Ｙ79	106×102× 6　円　　形	－	遺物なし。
Ｄ－25号土坑	28	Ｘ62、Ｙ80	98× 90× 14　円　　形	－	遺物なし。
Ｄ－26号土坑	28	Ｘ63、Ｙ79	122×112× 17　円　　形	Ｈ－21が先行	遺物なし。
Ｄ－27号土坑	28	Ｘ62、Ｙ80・81	116×102× 24　円　　形	－	土師器破片２点が出土。
Ｄ－28号土坑	28	Ｘ63、Ｙ80	110× 98× 16　円　　形	－	土師器破片など21点が出土。
Ｄ－29号土坑	28	Ｘ63・64、Ｙ80	100× 94× 20　円　　形	－	土師器破片など42点が出土。
Ｄ－30号土坑	28	Ｘ47、Ｙ59	131×114× 30　円　　形	－	土師器破片など７点が出土。
Ｄ－31号土坑	28	Ｘ47、Ｙ58	132×126× 52　円　　形	－	遺物なし。

6　溝　　址

W－1号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X17・18、Y24～27グリッド　◎形状　総延長(13.82)m、幅78～104cm、深さ30～36cm。断面は緩やかなV字形。◎重複　H－1を切る。◎遺物　総数180点。瀬戸・美濃陶器(陶磁器No.2)、敲石(石器・特殊遺物No.16)の2点を図示。◎備考　出土遺物から平安時代以降の所産。

W－2号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X20・21、Y27～30グリッド　◎形状　総延長(14.02)m、幅42～94cm、深さ9～16cm。断面はU字形。◎重複　W－3と合流し、M－1を切る。◎遺物　総数はW－3と合わせて284点。土師、須恵と陶磁器類が混在。図示できたものは、肥前陶器(陶磁器No.3)の1点である。

W－3号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X19～21、Y28～32グリッド　◎形状　総延長(19.18)m、幅64～254cm、深さ12～25cm。断面はU字形。◎重複　W－2と合流し、M－1を切る。◎遺物　W－2と合わせて284点。

W－4号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X14・15、Y17・18グリッド　◎形状　総延長(6.68)m、幅110～132cm、深さ109～115cmを測る。断面は深い逆台形。◎遺物　総数は土師破片1点のみ。

W－5号溝址

◎位置　X22～26、Y37・38グリッド　◎形状　総延長は(16.54)m、幅68～134cm、深さは17～37cmを測る。断面は浅い逆台形。◎遺物　総数60点で陶磁器類が大半を占める。堺・明石陶器(陶磁器No.4)が図示できた。◎備考　出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

W－6号溝址　(Fig. 29、PL. 2)

◎位置　X28～33、Y44～46グリッド　◎形状　総延長(24.98)m、幅46～202cm、深さ31～66cmを測る。断面は緩やかな逆台形。◎重複　M－3とW－7を切る。◎遺物　総数599点中、陶磁器類が大半を占める。遺物は完形に近いものも多く、出土状況から一括に投棄された可能性もある。◎備考　出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

W－7号溝址　(Fig. 29、PL. 3)

◎位置　X29・30、Y41～45グリッド　◎形状　総延長(14.36)m、幅58～102m、深さは42～59cm。断面はV字形。◎重複　M－2、M－3を切り、I－3、W－6に切られる。◎遺物　出土遺物19点全てを陶磁器類が占める。瀬戸・美濃陶器(陶磁器No.43)、肥前陶器(陶磁器No.44)、焙烙(陶磁器No.45)の3点が図示できた。◎備考　出土遺物から江戸時代の所産と考えられる。

W－8号溝址

◎位置　X38・39、Y51～55グリッド　◎形状　総延長(16.06)m、幅36～135cm、深さ25～34cm。断面は浅い逆台形。◎重複　W－9と合流。D－17、D－18が先行。◎遺物　土師片18点が出土。

W－9号溝址

◎位置　X39～41、Y52～55グリッド　◎形状　総延長(14.28)m、幅77～205cm、深さ10～32cm。断面は浅い逆台形。◎重複　W－8と合流。D－19が先行。◎遺物　総数24点で土師片が多い。

W－10号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X44～48、Y60・61グリッド　◎形状　総延長(24.08)m、幅66～157cm、深さ20～58cm。断面はU字形。◎重複　H－5を切り、W－11に切られる。◎遺物　総数107点で土師片が多い。

W－11号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X45～47、Y58～62グリッド　◎形状　総延長(14.56)m、幅156～276cm、深さ48～102cm。断面は壁が楕円を半分に切った形ですぼまり、底部で狭いU字状の溝を刻む。◎重複　W－10→本遺構→D－31の順に重複。◎遺物　総数549点で土師、須恵の破片が大半を占める。

W－12号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X47～52、Y62・63グリッド　◎形状　総延長(15.68)m、幅148～202cm、深さ21～47cm。断面は緩やかなV字形。◎遺物　土師、須恵の破片等97点が出土。

W－13号溝址

◎位置　X53、Y64～69グリッド　◎形状　総延長(16.42)m、幅42～76cm、深さは29～49cm。断面はU字形。◎遺物　土師片等20点が出土。

W－14号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X61～64、Y80グリッド　◎形状　総延長(13.62)m、幅16～39cm、深さ7～23cmを測る。断面は逆台形。◎遺物　土師片等23点が出土。

W－15号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X54～56、Y69～71グリッド　◎形状　総延長(3.6)mで、幅58～82cm、深さ19～33cmを測る。断面はU字形。◎重複　H－9、H－10を切る。◎遺物　土師片等7点が出土。

W－16号溝址　(Fig. 29)

◎位置　X49～511、Y63・64グリッド　◎形状　総延長(9.94)m、幅66～162cm、深さ25～34cmを測る。断面はV字形。◎遺物　土師、須恵の破片等25点が出土。

7　グリッド出土遺物

縄文時代

縄文時代の遺構は検出できなかった。グリッド出土遺物も極少量で、古墳周溝や溝址などからわずかに石器類が出土したのみであった。

石　器　(Fig. 42・43、PL. 18)

石器総点数32点の器種別内訳は石鏃5点、打製石斧4点、削器2点、磨石8点、敲石13点である。敲石や磨石は古墳時代や奈良・平安時代の住居址からの出土もあり、縄文石器を再利用したことも当然考えられる。

Ⅵ まとめ

西大室、荒砥地区においては、すでに数多くの遺跡が確認され調査が行われており、その結果しだいに周辺の歴史が解明されつつある。その中で、本遺跡は道路部分という限られた範囲の調査ではあったが、この地で生活を営んできた先人の足跡を知るうえで貴重な資料が得られた。以下、若干の所見を述べ本報告書のまとめとしたい。

◎古墳の所産時期について

本遺跡からは計３基の古墳が検出されたが、このうち、Ｍ－１号墳とＭ－２号墳は調査区内に墳丘部をもつ円墳であり、規模はＭ－１で周溝を含む全長が約24m、Ｍ－２で約18mを測る。残念ながら墳丘部分は過去の耕作による削平や破壊を受けたようで、石室などの主体部はどちらの古墳からも検出できなかった。しかし、円筒埴輪を中心とする遺物は両古墳とも墳丘部分から多数出土し、遺存状態も良好なものが多い。所産時期は両古墳とも墳丘下の地山部分にＡs-Ｃ（浅間山起源；４世紀中頃）とHr-ＦＡ（榛名山起源；６世紀初頭）およびのHr-ＦＰ（榛名山起源；６世紀中頃）などの火山噴出物がほぼ純層で認められることから基本的には６世紀後半の時期と思われる。また両古墳の構築順については、埴輪の大量生産と省略化を物語る篦削りによる底部調整がＭ－１出土円筒埴輪に多く見受けられるのに対して、Ｍ－２の円筒埴輪からはほとんど見られないことなどから、Ｍ－２→Ｍ－１の構築順序が推定できる。なお両古墳出土の円筒埴輪の詳細な分析についてはTab．３を参照されたい。また、主体部が調査区外にあり周堀の一部のみの調査となったＭ－３号墳については、県教委調査の地田栗Ｉ遺跡「１号墳」と周堀が接続することが判明し、同一の古墳と推定できる。「１号墳」では全長4.4mの両袖型横穴式石室を持つ主体部が検出されているが、埴輪類は出土していない。本遺跡Ｍ－３も同様に埴輪類の出土がなかったことと考え合わせると、Ｍ－３の所産時期は埴輪消滅後の７世紀前半代と考えられる。

◎近世陶磁器類について（　）内の数字はTab．２およびＰＬ．8～10・17の陶磁器№を示す。

今回の調査ではＡ、Ｂ区から陶磁器類を中心とした近世（江戸時代）の遺物が数多く出土し、破片も含め総数は約1000点に達した。おもな遺物は碗、皿、猪口、灯明皿、鉢、すり鉢、火鉢、香炉、土鍋、焙烙、硯、砥石、石臼等で、金属製品では古銭、煙管などがある。そのうち陶磁器は約650点に達するが、これらの生産地は磁器が肥前系、陶器が瀬戸・美濃系に大別され、他に堺・明石系陶器（36）がわずかに見受けられる。肥前系の磁器は江戸時代中期（18世紀）以降大量生産されるようになった厚手粗製の「くらわんか手」と呼ばれる碗（34）、コンニャク印判で装飾を施した碗（28～31）、見込み中央に五弁花の施文がある碗（35・51）などが中心である。瀬戸・美濃系陶器は18～19世紀初頭頃のものが大半を占め、外面を灰釉と鉄釉で掛け分けた腰錆碗（９～11・51別名「こふく茶碗」）や灰釉の地に梅文を染付けた碗（７・８）のほか御深井摺絵皿（15・16）、香炉（18・19）、すり鉢など器種が多様なことも本遺跡の特色である。なお、堺・明石系すり鉢（36）は比較的硬質であるところから、それまで主流であった瀬戸・美濃系すり鉢に代わって18世紀後半以降販路を拡大していったものと思われる。

付編．1　地田栗III遺跡の地質調査

古環境研究所

1．はじめに

地田栗III遺跡の発掘調査では、火山灰土の良好な土層断面が作成された。そこで地質調査を行い、テフラ層序に関する調査を行った。

2．地質層序

地質層序の対象とした地点は深掘りトレンチである。ここでは、下位より風化の進んだ暗褐色粘土質ローム層(14層、層厚12cm以上)、風化した黄白色軽石層(13層、層厚28cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径4mm)、褐色ローム層(12層、層厚24cm)、赤褐色スコリア混じり褐色ローム層(11層、層厚10cm、スコリアの最大径2mm)、褐色ローム層(10層、層厚28cm)、灰褐色暗色帯(9層下部、層厚10cm)、灰色岩片混じりで顕著な暗色帯(9層上部、層厚28cm、石質岩片の最大径12mm)、灰褐色暗色帯(8層、層厚)、暗褐色ローム層(7層、層厚25cm)、黒色粗粒火山灰混じり橙色粗粒火山灰層(6'層、層厚6cm、軽石の最大径4mm)、黄褐色砂質ローム層(6層、層厚19cm)、暗褐色ローム層(5層、層厚11cm)、白色軽石混じり褐色ローム層(4層、層厚26cm)、褐色土(3層、層厚15cm)、暗褐色土(2層、層厚27cm)、表土(1層、層厚29cm)の連続が認められる(図1)。

これらの土層のうち、13層および6'層は層相から各々約4.1－4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名－八崎軽石層(Hr-HP、新井,1962、鈴木、1976、大島、1986)および約1.8－2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間－板鼻褐色軽石群(As-BP　Group、新井、1962、早田、1991)のうちの1層に同定される。9層上部に含まれる灰色岩片は、その層位や岩相などから約2.8万年前に榛名火山から噴出した榛名－八崎火山灰(Hr-HA、早田、1990)に由来すると考えられる。4層中に混在する白色の軽石は、層位などから約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間－白糸軽石(As-Sr、町田・新井、1992、早田、未公表資料)または約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間－大窪沢第1軽石(As-OP1、中沢ほか、1984、町田・新井、1992、早田、未公表資料)に由来する可能性が考えられる。なおHr-HPの上位にある11層中のスコリアの詳細については不明な点が多い。その岩相や層位などから浅間火山起源の可能性が多いと考えられるが、今後の調査を必要としている。

従来の研究ではAs-BPGropの下位に約2.1－2.5万年前に南九州姶良カルデラから噴出した広域テフラ姶良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976)の層位のあることが知られている。地田栗III遺跡では、土層の層相から8層あるいは7層基底付近にATの降灰層準のあら可能性が大きいと推定される。降灰層準をより明確に把握するためには、火山ガラス比分析などを行う必要がある。

3．まとめ

地田栗III遺跡深掘トレンチの土層断面を対象に地質調査を行った結果、ローム層中に下位より榛名－八崎軽石層(Hr-HP、約4.1－4.4万年前)、給源不明の赤褐色スコリア、榛名－八崎火山灰(Hr-HP、約2.8万年前)、浅間－板鼻褐色軽石群(As-BPGroup,約1.8－2.1万年前)のうちの1層、浅間－白糸軽石(As-Sr、約1.8万年前)または浅間－大窪沢第1軽石(As-OP1、約1.7万年前)に由来する軽石などのテフラを認めることができた。

文　献

新井房夫(1962)　関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編、10、p.1-79.

町田　洋・新井房夫(1992)　火山灰アトラス、東京大学出版会、1992.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山、黒斑～前掛期のテフラ層序．
日本第四紀学会講演要旨集、№14、p.69-70.

大島　治(1986)榛名火山．日本の地質『関東地方』編集委員会編「関東地方」、p.222-224

早田　勉(1990)　群馬県の自然と風土．群馬県史通史編、1、p.35-129.

早田　勉(1991)　浅間火山の生い立ち．佐久考古通信、no.53,p.2-7.

鈴木政男(1976)FissionTrack年代測定法の人類遺跡への2、3の応用例．日本第四紀学会講演　要旨集,№5.

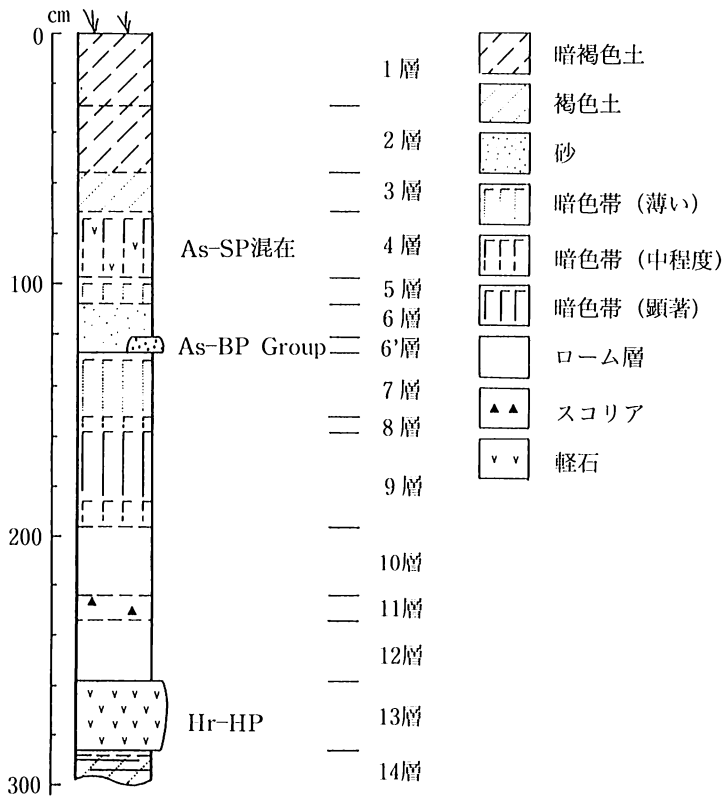


図1　地田栗III遺跡深掘トレンチの地質柱状図

Tab. 1　古墳、奈良・平安時代　土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 Fig
1	M－1	須恵甕	－	－	①細粒②良好③灰④胴部断片	外面斜め方向の緻密で平行な叩き目。内面擦り消し。			30
2	M－1	須恵坏蓋	－	[4.2]	①細粒②極良③灰白④1/2	口唇部欠損。天井部回転篦削り。			30
3	M－1	須恵高坏	－	[9.0]	①細粒②良好③灰④坏部欠損。	脚柱状部から裾部へ緩やかに外反。回転ナデ調整。			30
4	M－1	須恵椀	(11.8)	3.9	①細粒②良好③灰白④1/2弱	体部下部にゆるやかな稜を有す。右回転糸切り痕。			30
5	H－1	土師甕	19.7	26.8	①細粒②良好③橙④2/3	「コ」の字状口縁。篦削り。	平底。	胴部上位に最大径を有す。	30
6	H－1	土師台付甕	－	[10.9]	①細粒②良好③にぶい橙④胴部～台部	縦方向の篦削り。台部接合部横ナデ。		胴部内面の剝離が顕著。	30
7	H－1	須恵椀	12.9	3.9	①中粒②良好③灰白④ほぼ完形	わずかに外反。回転横ナデ。	右回転糸切り痕。	全面に砂粒を含む。	30
8	H－1	須恵坏	12.5	3.6	①細粒②良好③灰④ほぼ完形	外傾。回転横ナデ。	右回転糸切り痕。		30
9	H－1	土師甕	21.1	[22.3]	①細粒②良好③にぶい赤褐④2/3	「コ」の字状口縁。篦削り。	欠損。	胴部上位に最大径を有す。	30
10	H－2	須恵高台皿	12.6	2.3	①細粒②良好③灰④4/5	口唇部外反。回転横ナデ。	回転糸切り痕。高台部欠損。	高台後付け。	31
11	H－2	須恵高台椀	13.4	4.2	①細粒②良好③灰白④3/4	体部から直線的に外傾。	右回転糸切り痕。	高台後付け。	31
12	H－2	須恵高台椀	－	[3.5]	①細粒②良好③オリーブ黒④底部のみ	口縁部欠損。轆轤。	回転糸切り後調整。	高台後付け。	31
13	H－2	須恵高台椀	14.4	4.9	①細粒②良好③浅黄④4/5	端部外反。回転横ナデ。	右回転糸切り痕。	高台後付け。	31
14	H－2	須恵椀	12.6	4.5	①細粒②良好③灰オリーブ④2/3	端部外反。回転横ナデ。	右回転糸切り痕。	全面に白色の礫を含む。	31
15	H－2	土師坏	12.6	3.5	①細粒②不良③にぶい橙④ほぼ完形	外傾、横ナデ。ナデ。	篦削り。	わずかに稜を有す。	31
16	H－2	土師坏	(12.6)	4.0	①細粒②良好③赤灰④2/3	やや内湾ぎみに立ち上がる。	篦削り。	底部内面、篦磨き。	31
17	H－3	須恵高台椀	(13.4)	6.1	①細粒②良好③灰④1/5	端部わずかに外反。轆轤。	底部欠損。	内面に「レ」？の墨書。	31
18	H－4	須恵高台椀	14.0	5.0	①細粒②良好③灰④ほぼ完形	直線的に外傾。轆轤。	回転糸切り痕。	内外面に「七」の墨書。	31
19	H－5	緑釉高台椀	(19.8)	6.1	①細粒②極良③灰オリーブ④1/3	外稜を有す。内面では凹線を境に底部を形成。		内外面とも全面緑釉。	31
20	H－8	土師甕	25.8	[34.5]	①細粒②良好③橙④底部欠損	大きく外反。縦方向篦削り。長胴形。		口縁部に最大径をもつ。	31
21	H－8	土師甕	－	[28.0]	①中粒②良好③橙④口縁部欠損	縦方向篦削り。長胴形。	底部かすかに平底。	竈支柱として再利用。	32
22	H－8	土師甕	(21.7)	26.5	①細粒②良好③浅黄橙④4/5	「く」の字状口縁。篦削り。	丸底。		32
23	H－8	土師甕	23.3	[29.4]	①細粒②良好③橙④底部欠損	鋭く外反。縦方向篦削り。	長胴形。	口縁部に最大径を有す。	32
24	H－8竈	土師甕	22.9	34.3	①細粒②良好③橙③/4	外反。縦方向篦削り。長胴形。篦削り。		口縁部に最大径を有す。	32
25	H－10	瓦塔	－	－	①細粒②極良③灰④屋根の断片	表面瓦葺きの状態を表す（軒先から３枚の瓦）。裏面垂木部分を赤色塗彩。			33
26	H－10	カワラケ	8.3	1.8	①中粒②不良③にぶい黄橙④完形	外傾、口唇部外反。轆轤。	右回転糸切り痕。	白色鉱物混入。	33
27	H－11	須恵坏	12.4	3.4	①細粒②良好③灰黄④完形	外傾、口唇部外反。轆轤。	右回転糸切り痕。	貯蔵穴から出土。	33
28	H－11	土師甕	(20.9)	[24.2]	①細粒②良好③橙④約1/2	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。	厚みがない。	33
29	H－11	土師甕	(19.8)	[22.2]	①細粒②良好③にぶい橙④約1/3	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。		33
30	H－11	土師甕	(19.6)	[20.3]	①細粒②良好③橙④口縁～胴部	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。	厚みがない。	33
31	H－12	土師坏	10.6	4.2	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	口縁先端が直立する。	篦削り。内面ナデ。		33
32	H－12	須恵坏	(11.8)	3.8	①細粒②不良③灰④1/2	直線的に外傾。轆轤。	内面、轆轤整形。	外面の剝離が目立つ。	33
33	H－14	土師高台椀	(16.6)	4.5	①細粒②極良③にぶい黄橙④1/4	端部わずかに外反。	内面黒色処理。		34
34	H－14	土師甕	20.1	[20.3]	①細粒②良好③にぶい橙④底部欠損	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。№２竈の煙道先端部に利用。		34
35	H－14竈	土師甕	(19.0)	[17.3]	①細粒②良好③橙④1/3	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。	胴部上位に最大径を有す。	34
36	H－14	土師甕	19.4	[24.2]	①細粒②良好③橙④2/3	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。	№１竈の煙道部に利用。	34
37	H－14竈	土師甕	18.7	[15.0]	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	「コ」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。	胴部上位に最大径を有す。	34
38	H－15	土師坏	12.0	3.2	①細粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	外傾。指押さえ。	内外面指圧痕。		34
39	H－15	須恵坏蓋	15.9	4.0	①細粒②不良③灰白④2/3	端部やや外反。天井部を中央から1/2の範囲で回転篦削り。			34
40	H－15	須恵坏	12.2	3.5	①細粒②良好③灰④2/3	外傾、回転横ナデ。	右回転糸切り痕。	全体に歪みが目立つ。	34
41	H－15	須恵坏	13.3	4.0	①細粒②良好③灰黄④4/5	外傾、回転横ナデ。	右回転糸切り痕。		35
42	H－15	須恵坏	12.3	3.7	①細粒②良好③暗灰④4/5	外傾、回転横ナデ。	右回転糸切り痕。		35
43	H－15	須恵坏	(13.1)	2.9	①細粒②良好③灰④1/4	外傾、回転横ナデ。	回転糸切り痕。		35
44	H－15	須恵坏	12.9	3.5	①細粒②良好③褐灰④4/5	外傾、回転横ナデ。	右回転糸切り痕。		35
45	H－15	須恵坏	(12.6)	3.3	①細粒②良好③灰④1/2	外傾、回転横ナデ。ハケメ後ナデ。右回転糸切り痕。			35
46	H－16竈	土師甕	16.0	29.0	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	「く」の字状口縁。篦削り、ハケメ。胴部上位に最大径を有す。丸胴甕。			35
47	H－16	土師甕	16.5	27.8	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	「く」の字状口縁。ハケメ後ナデ。胴部中央に最大径を有す。丸胴甕。			35
48	H－16	土師小鉢	9.4	6.3	①細粒②良好③浅黄④ほぼ完形	全体に半球形状。口縁部、横ナデ。底部～体部篦削り。貯蔵穴内出土。			36
49	H－16	土師甕	24.3	35.8	①細粒②良好③明赤褐④完形	内湾ぎみ。篦削り、篦磨き。	篦磨き。胴部中央に最大径を有す。丸胴甕。		36
50	H－16竈	土師甕	(16.6)	[13.5]	①細粒②良好③にぶい橙④1/5	「く」の字状口縁。篦削り。	底部欠損。		36

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 Fig
51	H－16	土師高坏	15.7	12.0	①細粒②良好③明赤褐④4/5	坏部、内湾ぎみ。坏部～柱状部ハケメ、以下篦削り。竈支柱に利用。			36
52	H－16	土師坏	13.8	5.5	①細粒②良好③明赤褐④完形	内斜口縁。	篦削り、篦磨き。放射状暗紋。貯蔵穴内出土。		36
53	H－16	土師坏	12.4	5.5	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	素縁口縁。	篦削り、篦磨き。放射状暗紋。貯蔵穴内出土。		36
54	H－16	土師坏	15.5	5.5	①細粒②良好③橙④4/5	外稜を有する口縁。	不定方向篦磨き。	内面放射状暗紋。	36
55	H－16	土師坏	14.2	6.3	①細粒②極良③暗赤褐④ほぼ完形	内斜口縁。横ナデ。	不定方向篦磨き。	内面放射状暗紋。	36
56	H－16	土師坏	15.9	7.3	①細粒②良好③極暗赤褐④3/4	内斜口縁。横ナデ。	不定方向篦削り。	内面放射状暗紋。	36
57	H－17	土師高坏	－	[6.6]	①細粒②良好③にぶい黄橙④坏部欠損	裾部はラッパ状に開く。	外面縦方向篦磨き。	透孔4単位2段。	36
58	H－17	土師小鉢	(10.8)	4.1	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	口唇部わずかに直立。	体部横方向篦磨き。	放射状暗紋。貯蔵穴内出土。	36
59	H－17	土師甕	15.5	23.0	①細粒②良好③にぶい褐④ほぼ完形	頸部から胴部刷毛目後ナデ。内面口縁部～底部にかけて横方向刷毛目。			37
60	H－17	土師台付甕	(17.6)	[11.5]	①細粒②良好③褐④口縁～胴部	S字状口縁。頸部～胴部刷毛目。			37
61	H－17	土師小甕	(15.5)	(14.4)	①細粒②良好③にぶい赤橙④1/4	外面刷毛後ナデ。	底部欠損。	外面の剝離が目立つ。	37
62	H－18	土師甑	－	[23.2]	①細粒②良好③にぶい橙④胴部のみ	胴部縦方向篦削り。		把手がつく。	37
63	H－20	土師高坏	11.5	[9.0]	①細粒②極良③明赤褐④脚部欠損	坏部は半球形ぎみに立ち上がり、内外面篦磨き。脚部、縦方向篦磨き。			37
64	H－20	土師壺	－	[8.6]	①細粒②良好③橙④胴部～底部	胴部下位から底部にかけて極端にすぼまる。		外面、篦磨き。	37
65	H－20	土師小甕	(12.2)	11.4	①細粒②不良③淡黄④1/2	鋭く外傾。胴部、篦削り。	底部平底。		38
66	H－20	土師台付甕	－	[16.0]	①細粒②良好③にぶい褐④胴部～台部	外面斜め方向刷毛目。			38
67	H－22	土師甑	21.8	26.8	①細粒②良好③にぶい赤橙④ほぼ完形	折り返し口縁の縁をナデと削りで整形。			38
68	H－22	土師高坏	17.4	12.3	①細粒②良好③明赤褐④脚部1/2欠。	内斜口縁。坏部に沈線。脚部、縦方向篦削り。放射状暗紋。竈支柱に利用。			38
69	H－22	土師小甕	(12.8)	12.1	①細粒②良好③褐灰④1/2	外傾。篦削り。	平底に近い丸底。		38
70	H－22	土師甑	(23.5)	21.7	①細粒②良好③赤褐④1/2	短く外反。篦削り。		胴部上位に最大径をもつ。	38
71	H－22	土師甕	16.6	28.3	①細粒②良好③にぶい橙④5/6	外反。胴部外面縦方向篦削り、底部付近で刷毛目。内面刷毛目。			39
72	H－23	土師台付甕	－	[12.3]	①細粒②良好③にぶい褐④胴部基部	外面縦方向篦削り。内面横方向篦削り。		底部内面ヘラナデ。	39

註1、胎土は細粒(0.9㎜以下)、中粒(1.0～1.9㎜)、粗粒(2.0㎜以上)とした。
2、焼成は極良・良好・不良の3段階評価。
3、色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。
4、大きさ、重さの単位はそれぞれcm、gであり、現存値を[ ]、復元値を( )で示した。

Tab. 12 陶磁器類観察表

番号	出土位置	種別	器種	大きさ 口径	大きさ 器高	特徴	備考	写真 PL
1	H－4	製作地不詳陶器	不詳	－	[0.8]	内面灰釉。外面「ロムヌ」墨書。	江戸～明治時代。	17
2	W－1	瀬戸・美濃陶器	碗	(10.0)	[5.3]	飴釉。口縁部のみワラ灰釉。外面体部下位無釉。尾呂茶碗。	18C後。	17
3	W-2・3	肥前陶器	鉢	－	[4.0]	体部下位片。内外部白土刷毛塗り。内面透明釉。	不詳・唐津系。	17
4	W－5	堺・明石陶器	すり鉢	－	[4.7]	底部片。体部外面ヘラ削り。	18C後～19C前。	17
5	W－6	瀬戸・美濃陶器	灰釉小碗	6.5	3.8	高台脇以下無釉。外面口縁部以下ヘラ削り。	18C後。	8
6	W－6	瀬戸・美濃陶器	灰釉碗	(9.4)	5.3	貫入あり。口縁は内湾し、高台は小さい。高台脇以下無釉。	18C後～19C前。	8
7	W－6	瀬戸・美濃陶器	梅文碗	(8.9)	5.8	高台脇まで貫入の入った灰釉。外面2個の染付梅文。	18C後。	8
8	W－6	瀬戸・美濃陶器	梅文碗	(9.6)	5.8	高台脇まで貫入の入った灰釉。外面2個の染付梅文。	18C後。	8
9	W－6	瀬戸・美濃陶器	腰錆碗	(10.4)	6.8	沈線上2カ所を凹ませる。沈線は浅い。体部下方から高台内錆釉、その他灰釉。	18C前。	8
10	W－6	瀬戸・美濃陶器	腰錆碗	(10.0)	6.3	体部外面沈線。外面口縁部下鉄釉。その他灰釉。	18C中～後。	8
11	W－6	瀬戸・美濃陶器	腰錆碗	(9.2)	5.9	体部外面沈線。外面口縁部下光沢のある鉄釉。その他灰釉。	18C後～19C初。	8
12	W－6	瀬戸・美濃陶器	鎧茶碗	－	[2.3]	美濃窯に多く認められる筒形の鎧茶碗。外面灰釉。内面鉄釉。	18C後～19前。	8
13	W－6	瀬戸・美濃陶器	柳茶碗	－	5.8	高台脇以下を除き灰釉。残存部に鉄絵が一部残る。	18C末～19C初。	8
14	W－6	瀬戸・美濃陶器	灰釉皿	(16.4)	3.9	口縁部と見込みに施釉。器形、胎土共に灰釉陶器に似る。美濃窯か。不明墨書あり。	18C後。	8
15	W－6	瀬戸・美濃陶器	摺絵皿	(12.6)	2.9	口縁部外面から内面灰釉。内底鉄絵具による型紙摺。御深井。内面目痕3カ所。	18C。	8
16	W－6	瀬戸・美濃陶器	摺絵皿	－	[1.4]	内面灰釉。内底鉄絵具による型紙摺。御深井。	18C。	17
17	W－6	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	(11.4)	2.9	錆釉を施した後。底部外面の釉を拭う。	18C後～19C前。	8
18	W－6	瀬戸・美濃陶器	香炉	(9.2)	6.0	口縁部から体部外面灰釉。外面に丸ノミによる幅広の半菊文。	18C中。	8
19	W－6	瀬戸・美濃陶器	香炉	(6.6)	4.0	輪高台の小香炉。口縁部内面から体部外面まで灰釉。	18C～19C前。	8
20	W－6	瀬戸・美濃陶器	蓋	7.7	2.0	落とし蓋。天井部のみ貫入の入る灰釉。	不詳 18後～19C？	17

番号	出土位置	種別	器種	大きさ 口径	大きさ 器高	特徴	備考	写真 PL
21	W－6	瀬戸・美濃陶器	徳利	－	[7.9]	外面飴釉。体部上位ワラ灰釉。	18C後～19C前。	17
22	W－6	瀬戸・美濃陶器	三耳壺	(12.4)	[16.1]	口縁内面から外面鉄釉。口縁端部丸く肥厚。	18C。	8
23	W－6	瀬戸・美濃陶器	すり鉢	－	[6.0]	全面錆釉。底部外面釉を拭わない。外面体部下端から底部にかけて目痕4カ所。	18C後。	17
24	W－6	肥前陶器	碗	－	[2.9]	呉器手碗。	17C末～18C前。	8
25	W－6	肥前磁器	染付筒形碗	(6.9)	5.5	貫入多い。外面井桁状の文様。見込み簡略化した五弁花。	18C後～19C初頭	8
26	W－6	肥前磁器	染付筒形碗	－	5.5	外面井桁状の文様。見込みやや簡略化した昆虫文。	18C後～19C初頭	8
27	W－6	肥前磁器	染付筒形碗	(8.0)	5.8	31・34に比べ呉須の発色良し。高台部と脇の圏線は2条。内外面共に輪宝繋文。	18C後～19C初頭	8
28	W－6	肥前磁器	染付碗	－	5.4	内面は口縁端部に圏線。外面は蔦と家紋風の文様をコンニャク印判で施し、後者のみ混みを入れる。高台内渦福。波佐見系。	18C中～後。	8
29	W－6	肥前磁器	染付碗	(9.2)	5.5	内面は口縁端部に圏線。外面は蔦と家紋風の文様をコンニャク印判で施し、後者のみ混みを入れる。高台内渦福。波佐見系。	18C中～後。	9
30	W－6	肥前磁器	染付碗	(9.7)	5.3	外面にコンニャク印判による蔦と筆による折松葉文を交互に施す。波佐見系。	18C中～後。	9
31	W－6	肥前磁器	染付碗	(12.2)	6.3	内面は口縁端部と底部に圏線。外面筆描き文と円文中にコンニャク印判による蔦文。波佐見系。	17C末～18C中。	9
32	W－6	肥前磁器	染付碗	(9.3)	4.6	外面に雑な梅状の文様。波佐見系。	18C中～後。	9
33	W－6	肥前磁器	染付碗	(8.4)	4.0	外面に雑な井桁と十文。波佐見系。	18C中～後。	9
34	W－6	肥前磁器	染付碗	(10.5)	5.3	外面雪輪梅樹文。高台内不明銘。波佐見系。	17C末～18C中。	9
35	W－6	肥前磁器	染付皿	(14.2)	3.6	内面花唐草文。底部蛇の目釉剝ぎ。見込み五弁花コンニャク印判。波佐見系。	18C中～後。	9
36	W－6	堺・明石陶器	すり鉢	(34.2)	[8.1]	口縁部内面鋭い沈線。外面口縁部下ヘラ削り。	18C末～19C前。	17
37	W－6	在地	かわらけ	(8.4)	1.6	浅黄橙(10YR8/4)ロクロを使用しない。口縁部から内底ヨコナデ。	江戸時代。	9
38	W－6	在地	焙烙	－	5.6	口縁部外方に屈曲。器壁厚い。耳の形と貼り付けは雑。	江戸時代。	9
39	W－6	在地	鍋	(38.2)	[13.1]	鉢を呈する。器高低く、器壁厚い。外面全面に煤付着。	江戸時代。	10
40	W－6	在地	火鉢	29.3	16.2	浅黄橙(10YR8/4)。体部～口縁部内湾。口縁部外面に型押しの菊花文1つ残存。貼り付け高台に一対の円形透し。外面体部位浅い沈線。	江戸時代。	10
41	W－6	在地	甕	27.2	[21.5]	平安時代の土師器甕に似た器形。体部外面浅い沈線。胎土色調は57に似る。	江戸時代。	10
42	W－6		不詳	－	[5.3]	にぶい橙(5YR7/4)。ロクロ左回転。外底糸切り無調整。口縁部欠損。外面器表剝離。底部中央と体部下位4方焼成後に穿孔。体部下位の1方のみ貫通している。	時期不詳。	9
43	W－7	瀬戸・美濃陶器	菊皿	－	[1.9]	灰釉。口縁部銅緑釉。高台脇以下無釉。	17C。	17
44	W－7	肥前陶器	青緑釉皿	－	[2.9]	見込み蛇の目釉剝ぎ。内之山窯。	17C後～18C前。	17
45	W－7	在地	焙烙	(37.0)	5.6	口縁部わずかに内湾。体部外面煤付着。	江戸時代。	9
46	W－9	在地	手焙り	－	[6.3]	表面黒色。胎土浅黄橙。体部外面には形押しの文様。	江戸時代。	17
47	W－16	肥前陶器	鉢	(33.0)	[4.2]	三島手。陰刻押印上に刷毛で白土を塗る。唐津系。	17C末～18C後。	17
48	I－1	肥前磁器	筒形碗	(8.0)	[4.6]	口縁～体部下位片。	18C後～19C初。	17
49	I－1	肥前磁器	碗	(9.2)	4.9	外面草文。	18C。	9
50	I－3	瀬戸・美濃陶器	灰釉碗	(12.4)	8.1	灰釉。高台脇無釉。	18C前～中。	9
51	D－13	肥前磁器	筒形碗	(7.6)	5.6	見込み雑な五弁花。	18C後～19C初。	9
52	X16Y19	製作地不詳	おろし皿	－	1.5	内面黒褐色の鉄釉。胎土は密で青灰色。	19C。	17
53	X27Y34	瀬戸・美濃陶器	片口鉢	(16.6)	8.8	高台脇以下を除き灰釉。内底目痕3カ所。	19C前～中。	9
54	X29Y44	在地	焙烙	(36.0)	5.1	体部直線的に外傾。外面煤付着。	江戸時代。	9
55	X32Y46	瀬戸・美濃系	灰釉皿	(14.0)	2.9	削り出し高台。全面施釉。底部内外面目痕各3カ所。	17C。	9
56	A区埋土	瀬戸・美濃陶器	菊皿	－	[1.2]	高台脇以下を除き灰釉。口縁部に銅緑釉。	17C。	17
57	A区埋土	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	(9.4)	2.1	錆釉。底部外面釉を拭い取る。見込み重ね焼痕。	18C後～19C前。	9
58	A区埋土	肥前磁器	小丸碗	－	5.4	半菊文。	18C後～19C初。	9
59	B区埋土	瀬戸・美濃陶器	腰錆碗	(9.4)	5.3	高台径小さく器高低い。	19C前。	10

註）表の記載で大きさの単位はcmで、復元値は（　）、現存値は［　］で示した。

Tab. 3 埴輪観察表

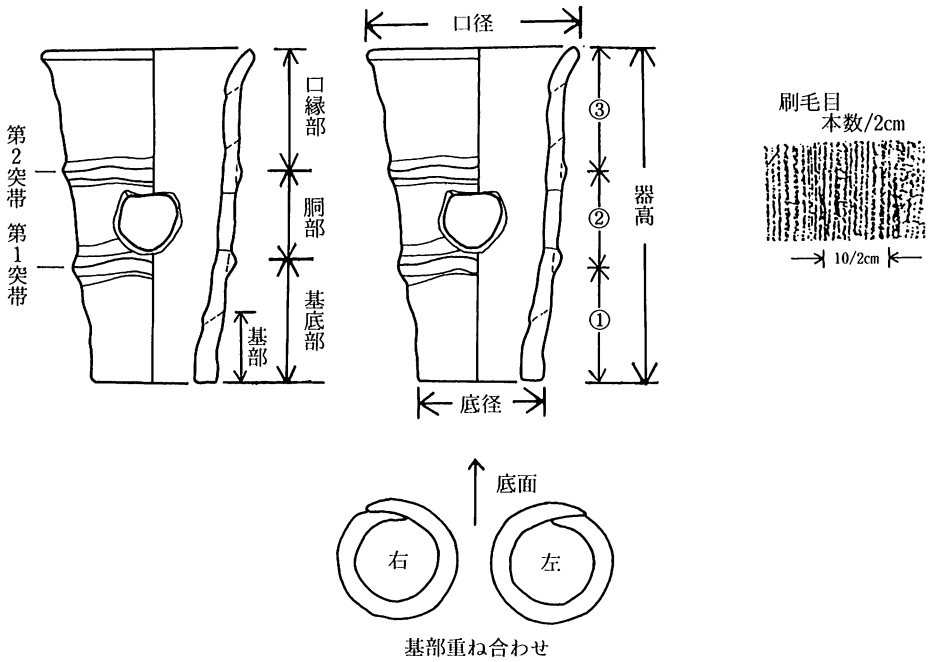
No	形態	法量 (cm)	突帯 形状	透孔 形状	透孔 タテ×ヨコ	胎土・焼成 色調	ハケメ	成形・整形の特徴	備考 (出土古墳)
1	A	高[12.1] 口 33.8 底 −	− ① − ② − ③ −	−	− × −	胎 C 焼 良好 色 橙	10	約1/3成形し疑口縁製作→上部成形→疑口縁部に突帯貼付。 外 下半部縦指ナデ→上半部斜めハケ→口縁部横ナデ。 内 下半部ナデ→全体斜めハケ・横ハケ→口縁部横ナデ。	1/3残存。突帯剝離 (M−1)
2	A	高[14.0] 口 30.5 底 −	− ① − ② −	−	− × −	胎 B 焼 良好 色 橙	11	約1/3成形し疑口縁製作→上半部成形→疑口縁部に突帯貼付。 外 下半部縦指ナデ→上半部斜めハケ→口縁部横ナデ。 内 下半部ナデ→全体斜めハケ・横ハケ→口縁端部横ハケ。	1/2残存。突帯剝離 (M−1)
3	B	高[22.7] 口 17.2 底 −	A ① − ② 12.0 ③ 6.5	半円形	(5.0)×(5.8)	胎 A 焼 良好 色 にぶい橙	4	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部ケズリ。 内 弱い指ナデ→口縁端部横ナデ。粘土紐接合痕残る。	基底部の一部〜胴部片側〜口縁部残存。底部調整(M−1)
4	B	高 32.6 口 16.3 底 8.3	A ① 12.0 ② 12.7 ③ 7.9	半円形 円 形	5.1 × 6.3	胎 A 焼 良好 色 橙	3 〜 4	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部縦ケズリ。 内 透孔中央まで縦指ナデ→透孔から上部横ナデ。基底部下端に横ケズリ。粘土紐接合痕残る。透孔位置に顕著な接合痕。	完形。底部調整。 (M−1)
5	B	高[29.0] 口 21.6 底 −	B ① − ② 11.2 ③ 10.5	円 形	6.7 × 7.6	胎 A 焼 良好 色 明赤褐	10 〜 12	外 縦ハケ→突帯貼付。 内 縦ハケ→口縁部上半横ハケ→口縁端部横ナデ(外面まで及ばない。)	基底部下半欠損。(M−1)
6	B	高 29.4 口 17.3 底 8.6	A ① 9.6 ② 13.1 ③ 6.7	円 形	(6.1)×(6.3)	胎 A 焼 良好 色 にぶい橙	3	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部ケズリ。 内 ナデ→口縁部横ナデ。基底部横ケズリ。口縁端部横ナデ。	基底部上半〜口縁部片側残存。底部調整 (M−1)
7	B	高 30.6 口 18.3 底 8.2	A ① 10.1 ② 12.2 ③ 8.3	半円形 円 形	7.2 × 6.5	胎 A 焼 良好 色 橙	3	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部ケズリ。 内 縦指ナデ→透孔上端から一部横ハケ後弱い横ヘラナデ→口縁端部横ナデ。基底部下端横ケズリ。	一部欠損。底部調整 (M−1)
8	B	高 29.9 口 18.0 底 8.4	A ① 12.1 ② 10.6 ③ 7.2	円 形	(5.8)×(5.7)	胎 A 焼 良好 色 にぶい橙	3	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部ケズリ。 内 ナデ→基底部下端横ケズリ。口縁端部横ナデ。	基底部〜口縁部1/2欠損。底部調整。 (M−1)
9	B	高 30.0 口 16.4 底(8.0)	A ① 10.8 ② 12.1 ③ 7.1	円 形	(5.6)× 5.7	胎 A 焼 良好 色 にぶい橙	3 〜 4	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部縦ケズリ。 内 ナデ→口縁部一部横ハケ後ナデ→口縁端部横ナデ。基底部下端横ケズリ。	基底部1/2、胴部1/3欠損。底部調整。(M−1)
10	B	高 30.4 口(17.0) 底 8.2	A ① 12.7 ② 10.4 ③ 7.3	円 形	6.0 ×(6.0)	胎 A 焼 良好 色 赤褐	3	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部ケズリ。 内 指ナデ→口縁端部横ナデ。基底部下端横ケズリ。	胴部〜口縁部1/3欠損。底部調整。 (M−1)
11	B	高 27.9 口 15.6 底 9.0	A ① 10.2 ② 10.9 ③ 6.8	円 形	5.7 × 5.6	胎 A 焼 良好 色 にぶい橙	3 〜 4	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部縦ケズリ。 内 ナデ→口縁部横ナデ。口縁端部強い横ナデ。基底部下端ケズリ。	口縁部1/3欠損。器肉厚い。底部調整。 (M−1)
12	B	高 27.0 口(15.9) 底 7.6	A ① 9.1 ② 10.8 ③ 7.1	円 形	5.7 × 6.2	胎 A 焼 良好 色 明赤褐	3 〜 4	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。基底部縦ケズリ。 内 ナデ→口縁部強い横ナデ。基底部下端横ケズリ。	口縁部〜胴部1/2欠損。器肉厚い。底部調整。(M−1)
13	B	高[29.3] 口 20.1 底 −	A ① − ② 10.1 ③ 8.7	円 形	(6.5)× 5.5	胎 B* 焼 良好 色 明赤褐	10 〜 14	外 縦ハケ→突帯粗く継続ナデ後全体に横ナデ。口縁端部横ナデ。 内 縦ハケ→口縁端部横ナデ。	基底部下端欠損。内面ヘラ記号。 (M−2)
14	B	高 33.6 口(19.5) 底 11.1	B ① 12.1 ② 13.0 ③ 8.5	円 形	(6.5)×(5.3)	胎 B 焼 良好 色 にぶい橙	9 〜 10	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。 内 透孔上部まで縦ハケ→口縁部斜めハケ・横ハケ→口縁部横ナデ 突帯幅少なくきゃしゃ。	口縁部〜胴部1/2欠損。基部重ね合わせ右。(M−2)
15	B	高 35.2 口 19.6 底 11.6	A ① 14.0 ② 10.3 ③ 10.9	円 形	5.7 ×(5.5)	胎 B 焼 良好 色 橙	10 〜 12	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ハケ。 内 縦ハケ→口縁端部横ハケ。	胴部1/2欠損。内面ヘラ記号。基部重ね合わせ・右。(M−2)
16	B	高 34.1 口 19.2 底 13.1	B ① 11.0 ② 12.6 ③ 10.5	半円形 円 形	6.7 × 7.1	胎 B 焼 良好 色 明赤褐	8 〜 9	外 縦ハケ→突帯貼付。口縁端部横ナデ。 内 縦ナデ→透孔まで縦ハケ。透孔より上ナデ、一部斜めハケ・横ハケ→口縁端部横ナデ。	基底部、口縁部一部欠損。基部重ね合わせ・右。(M−2)

註) 1. 大きさの単位はcmで表し、現存値を[ ]、復元値を( )で示した。
2. No 1 〜 8 はFig.40、No 9 〜16はFig.41に図示。

埴輪観察表凡例

No	形態	法量 (cm)	突帯 形状	透孔 形状	透孔 タテ×ヨコ	胎土・焼成 色調	ハケメ
1	A	高[12.1] 口 33.8 底 −	A ① − ② − ③ −	−	− × −	胎 C 焼 良好 色 橙	10

形態　A－朝顔形円筒埴輪　　B－普通円筒埴輪
突帯　A－上稜がやや突出する断面弱いM字形
　　B－上稜がやや突出する断面台形
胎土　A－チャート粒・軽石を多く含み、石英を含む。
　　B－チャート粒・軽石を少量含む。　C－チャート粒・砂粒を含む。
ハケメ　2cm間の窪んだ条線(工具の木目)の本数



付編. 2　地田栗III遺跡M－1号墳、M－2号墳の円筒埴輪観察表のまとめ

筆者に与えられた地田栗III遺跡M－1号墳、M－2号墳の円筒埴輪16個体の観察表作成の結果以下の事項が認められた。

M－1号墳　円筒埴輪は次のように大別することができる。

①a．No.3、4、6、7、8、9、10

　b．No.11、12

　c．写真Ⅰ、Ⅱ

②No.5

③No.1

④No. 2

①類はM－１号墳出土埴輪の大多数を占める資料で、非常に規格性が強い埴輪である。器高もほぼ同一であり、基底部長に対して胴部長が同等あるいはやや長く、口縁部長がそれらの1/2強という割合が看取される。他例よりも小さいために①ｂに小分類したNo.11、12もこの原則を守っている。

突帯は上稜が下稜よりも突出する断面「M」字型であり、幅広に作られている。透孔は基本的には円形でNo. 3に代表されるような上部が直線的な例がごく少数存在する。上部が明確な直線を描かず半円形とするに躊躇する例が認められ、多くの資料についてはすでに半円形透孔の意識は失われていたと思われる。ハケメ工具は他類と異なりすべての個体でスギ等の針葉樹材(1)を用いている。内面調整も類似しているが、口縁部にハケメを用いた後ナデを施している例などがあり、さらに細分が可能である。胎土、焼成についてはすべて同様でありわずかに白色軽石の粗密がみられる程度である。また、①ａ、①ｂ類すべてに底部調整(2)が施されている。外面縦ケズリ、内面横ケズリである。特に外面の痕跡からは刀子のような鋭利な工具が想定される。

①ｃ類は写真Ｉ、IIである。口縁部まで残っている資料はないが突帯形状とハケメの類似性、規格性から①類に含めたものである。①ａ、①ｂ類と異なり底部調整は施されないが、基底部下端の歪みが著しく底部調整の必要性が実感される。

②類は胴部と口縁部の長さがほぼ等しく、基底部の残存部分からは底部調整の痕跡は認められない資料である。胎土は①類と似通っているが、作りはむしろM－２号墳に類似する。内面にハケメを施している。

③類は緻密な胎土でにぶい橙色(5YR7/4)を呈する資料である。④類も緻密な胎土で橙色(5YR7/6)を呈する。ヘラナデで仕上げている資料もみられる(写真III)。

形象埴輪は未実測資料中に小破片ながら確認できる。下場幅４cmの突帯がつく板状で端部が屈曲すると思われる破片や先細りで太い方は中空の部分がある棒状の破片などがある。前者は家の可能性が、後者は人物に附属する大刀の可能性も考えられる。他には幅４～５cmほど帯状に肥厚する資料、縦に直線的に切り込まれている破片がある。

M－２号墳　埴輪はNo.13、14、15、16である。基底部下半を欠損するNo.13を除くすべての底部に基部の重ね合わせの痕跡がみられる。底部調整は認められない。M－１号墳①ｃ類と比較すると基底部下端の歪みはないに等しく、明らかに成形技法の相違が認められる。他にも突帯形態、ハケメ、胎土、色調などM－１号墳①類とは大きく異なっている。透孔は円形のほか上辺が直線で明確な角をなす例があり、半円形の存在が推定される。

突帯については、No.13にみられる断続ナデ技法Ａ(3)の存在が特筆される。突帯粘土を粗くナデつけたのち横ナデを施しているが、最初の跳ね上げるようなナデの痕跡が看取できるものである。第１、第２突帯両方に認められる。

これらの埴輪はNo.13、15が内面において縦ハケの多用と横方向一直線に伸びるヘラ記号を有する点で類似するほかはそれぞれ個々の特徴を持っている。No.15は残存状態が悪く断続ナデ技法の

存在を判断できなった。未実測資料では内面にハケメを多用する例が多く見受けられる。

形象埴輪は一片のみであるが未実測資料中に認められる。内外面ハケメで板状を呈する資料で、突帯が横方向に位置するが剝落している。家の可能性が考えられる。

結　M－1号墳資料を特徴づけるのは底部調整であろう。上野地域では底部調整の明確な出現はTK10併行の須恵器を出土した富岡5号墳である[4]。また、半円形透孔が6世紀前半で消滅するという研究成果[5]を援用すればM－1号墳の半円形のかなり崩れたような形は半円形透孔が消滅した直後の時期が考えられる。したがってM－1号墳の埴輪は6世紀中～後半の早い時期があたえられよう。M－2号墳の埴輪には前述のように底部調整が全く認められない。また、M－1号墳①類とは成形方法において相異がみられ、基部を形づくって工程を踏んでいく方法と推定できる。透孔ではM－2号墳の方に明確な半円形がみられ、M－1号墳には崩れた形が認められる程度であった。M－1号墳とM－2号墳の資料は同一古墳群中であり同一系統の埴輪制作集団であると仮定すれば、これらの要素からM－2号墳の方が先行する可能性が大きいと考えられる。半円形透孔の消滅以前で底部調整導入以前という時期であり、ここでは6世紀前半～中葉という時期を与えておきたい。M－2号墳にみられる断続ナデ技法はTK23～TK47の時期には古市古墳群中に出現したとされている技法である。現段階では畿内周辺に多く分布し、関東では茨城県馬渡埴輪制作址に例がある[6]。上野地域における類例は、管見では藤岡市七興山古墳出土円筒埴輪[7]の「斜線による凸帯割り付け痕」とされるものが本例と同様と思われる。断続ナデ技法Aは地域性や伝播の問題において重要な位置を占めることになろう。この技法の存在が持野地域でも認識されたことで、今後類例の増加は必至と思われる。その上で再論したい。

（文責　群馬県埋蔵文化財調査事業団　南雲芳昭）

註

(1) 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号　1978　九州文化史研究施設

(2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号　1978・1979
『古墳時代政治史序説』　1988　塙書房に再録

(3) 鐘方正樹・中島和彦・安井宣也「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』　1991　奈良市教育委員会

(4) a 富岡市教育委員会『富岡5号古墳』　1972
b 宥勝寺北裏遺跡調査会『宥勝寺北裏遺跡』　1980

(5) 加部二生「IV　成果と問題点」『塩ノ久保遺跡』　1991　安中市教育委員会

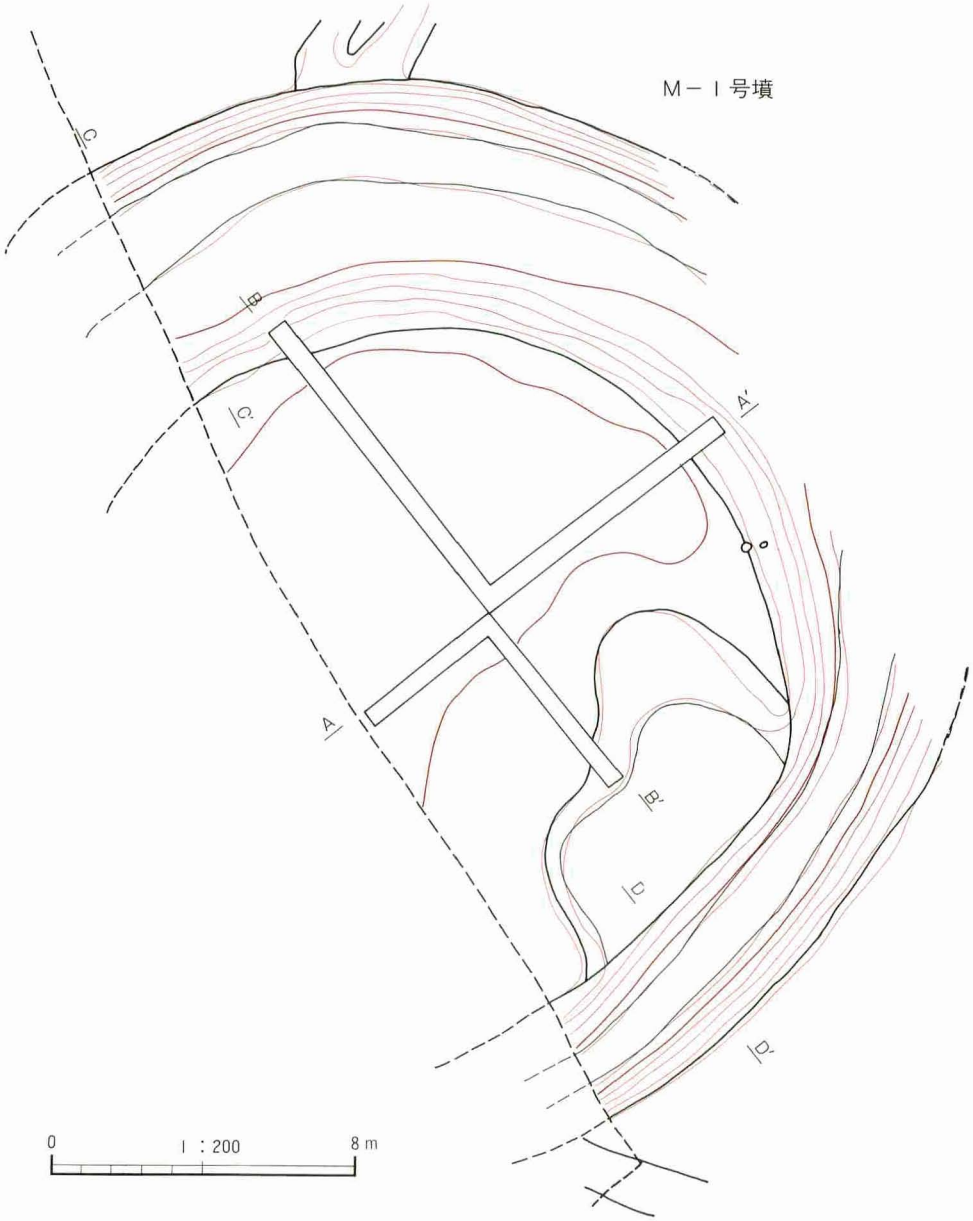
(6) 前掲註(3)の指摘による。

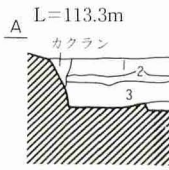
(7) 藤岡市教育委員会『七興山古墳範囲確認調査報告書V』　1991

Tab. 4　石器・特殊遺物観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考		Fig
1	W−11	石鏃	2.7	1.3	0.4	1.2	黒色頁岩	完形。表裏とも丁寧な剝離で仕上げられる。	縄文石器	42
2	W−11	石鏃	3.9	1.3	0.6	2.0	黒色頁岩	完形。両側縁とも鋸歯状に仕上げられる。		42
3	W−11	石鏃	3.2	1.7	0.7	2.4	黄褐色珪質岩	基部をわずかに欠損。表裏とも斜行剝離で仕上げられる。		42
4	D−16	石鏃	[1.9]	[1.4]	0.3	0.4	黒曜石	左側縁基部を欠損。丁寧な剝離で仕上げられる。		42
5	X15Y19	石鏃	[2.6]	1.6	0.4	1.4	チャート	先端部をわずかに欠損。表面に大きく主要剝離面を残す。		42
6	H−23	打製石斧	6.5	4.9	2.1	52.0	粗粒安山岩	刃部を残す。表面に自然面を残している。		42
7	W−6	打製石斧	12.8	6.1	2.6	216.0	黒色頁岩	刃部をわずかに欠損するが、刃部再生がなされる。		42
8	X27Y44	打製石斧	6.8	4.9	1.3	43.0	粗粒安山岩	基部を欠損する。刃部に使用痕が認められる。		42
9	C区表採	打製石斧	6.6	3.9	1.7	26.0	黒色頁岩	小形の打製石斧。表裏面に大きく主要剝離面を残す。		42
10	X17Y24	削器	7.5	6.6	1.1	62.0	黒色頁岩	表面に大きく自然面を残す。裏面に丁寧な剝離が認められる。		42
11	X27Y38	削器	8.9	6.5	1.9	78.0	黒色頁岩	表裏面とも主要剝離面を残し、一縁に刃部が形成される。		42
12	W−11	磨石	9.8	7.9	3.0	329.0	粗粒安山岩	やや大形の磨石の一部と考えられる。		42
13	D−13	磨石	12.1	10.4	3.2	554.0	粗粒安山岩	表裏面とも摩耗痕が認められ、側縁には打痕がみられる。		42
14	M−1	敲石	12.2	5.4	4.6	417.0	粗粒安山岩	棒状の礫の両端及び側縁に打痕が認められる。		42
15	M−2	敲石	12.1	9.7	4.4	632.0	石英閃緑岩	楕円形の礫の半欠品。端部と両側縁に打痕が認められる。		42
16	W−1	敲石	16.8	5.8	4.0	573.0	粗粒安山岩	棒状の礫の両端及び側縁に打痕が認められる。		42
17	M−1	敲石	13.7	7.7	5.4	757.0	粗粒安山岩	偏平な礫の両端及び側縁に打痕が認められる。		43
18	M−1	敲石	10.8	9.7	8.6	920.0	粗粒安山岩	丸い石の両端に打痕が認められる。		43
19	H−5	敲石	15.2	19.9	6.9	980.0	粗粒安山岩	楕円形の礫の先端と左側縁下部に打痕が認められる。		43
20	H−10	敲石	9.9	3.9	2.7	153.0	粗粒安山岩	棒状の礫の両端に打痕が認められる。		43
21	W−6	敲石	8.9	3.1	2.4	79.0	黒色頁岩	棒状の礫の先端に大きな打痕(剝離)が認められる。		43
22	W−6	敲石	13.5	5.3	2.6	269.0	雲母石英片岩	棒状の礫の先端及び石側縁に打痕が認められる。		43
23	I−3	板碑	22.4	11.8	2.2	678.0	雲母石英片岩	板碑の残片。	中世	−
24	X29Y43	板碑	8.0	4.9	1.5	67.0	緑色片岩	板碑の残片。		−
25	H−18	勾玉	3.5	1.2	0.7	6.0	滑石質蛇紋岩	表裏面とも丁寧な研磨で仕上げられる。腹面は丸く、背面は稜が付く。	古墳	43
26	H−22	勾玉	3.9	2.3	0.4	3.0	滑石質蛇紋岩	偏平な勾玉。穿孔は片側から行われる。		43
27	H−15	鉄鏃	〈全長[6.4]　刃部長5.2　頸巾1.0　重さ[13.0]〉					有腸挟長三角形鏃。平根鏃で逆刺は深く頸部が欠損している。		43
28	H−12	鉄釘	〈長さ[4.7]　巾0.8　重さ[3.0]〉					頭部欠損。木質の遺存はない。	〜平安	44
29	H−12	鉄釘	〈長さ[8.2]　巾1.2　重さ[6.0]〉					やや長く細目の釘。木質、遺存していない。		44
30	B区表採	鉄釘	〈長さ[5.1]　巾0.8　重さ[3.3]〉					ほぼ完形。木質一部付着。小形の釘である。		44
31	H−15	紡錘車	〈直径4.7　内径0.9　厚さ1.8　重さ44.7〉					砥沢石。側面の調整は丁寧に施されていない。		44
32	X16Y23	古銭	〈外径2.3　穿径0.7　重さ2.0〉					完形。対読。「寛永通宝」の文字はっきりと読み取れる。裏は無文。	近世	−
33	X27Y44	古銭	〈外径 −　穿径 −　重さ0.5〉					1/2欠損。対読。「寛」と「永」の左半分欠損、「通」のみ完全。裏は11波が現存。		−
34	A区表採	古銭	〈外径2.3　穿径0.6　重さ1.0〉					完形。対読。表裏とも付着物ひどく「寛永通宝」の文字わずかに読める程度。		−
35	B区表採	古銭	〈外径2.8　穿径0.7　重さ4.0〉					完形。対読。寛永通宝。裏は11波。		−
36	H−3	煙管	〈長さ8.0　直径1.0　重さ4.0〉					(36)〜(40)は煙管で江戸時代初期以降のものであるが、時代は限定できない。		44
37	H−3	煙管	〈長さ5.8　直径1.3　重さ6.0〉					(36)(37)(40)は吸口部分で3点ともほぼ完形である。		44
38	A区表採	煙管	〈口径1.7　器高0.9　厚さ0.2　重さ1.0〉					(38)(39)は雁首部分で(39)は火皿部と羅宇結合部が欠損、(38)は火皿部のみ		44
39	D−14	煙管	〈長さ[4.9]直径1.0　重さ3.0〉					である。雁首と吸口の組み合わせはできなかった。		44
40	B区表採	煙管	〈長さ7.0　直径0.9　重さ5.0〉							44
41	W−6	硯	15.3	6.8	1.8	[271.0]		長方形。角掘り。縁は欠損。丘は、使用により溝状に凹む。		44
42	W−6	硯	[12.7]	5.9	[0.8]	[59.8]		長方形。底、丘、縁共に剝離する。側と落潮の一部のみ遺存。		−
43	H−12	砥石	[10.2]	3.5	3.9	[165.2]		端部欠損。4面使用。		44
44	W−6	砥石	[10.8]	2.9	1.8	[76.4]		端部欠損。1面使用。3面にクシ状タガネ痕。		44
45	W−6	砥石	[8.1]	3.1	1.8	[75.2]		2面使用。側面と1面にクシ状タガネ痕。		44
46	W−6	砥石	[8.4]	2.7	1.8	[66.3]		両端欠損。1面使用。3面にクシ状タガネ痕。		44
47	I−1	石臼	〈直径[29.9]　厚さ12.4　重さ[5,300]〉					粗粒安山岩製。上臼。ものくばり直線的。		44
48	I−1	石臼	〈直径[35.4]　厚さ10.2　重さ[6,050]〉					粗粒安山岩製。下臼。片減りあり。		44

註)　表の記載で、大きさと重さについての単位はcm、gであり、現存値は[　]で示した。





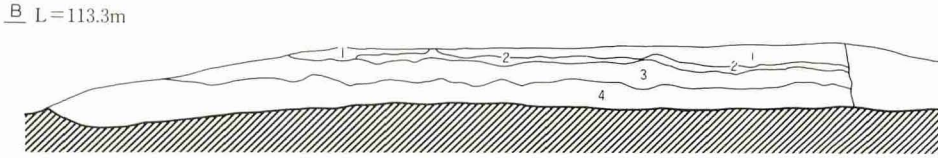
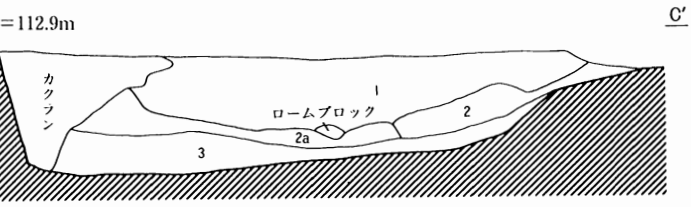


Fig. 8　M－



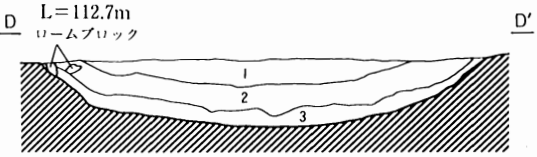
M－1号周堀北側

1　層　暗褐色細砂層　As-C10%、Hr-FA20%、Hr-FPを若干含む。

2　層　黒褐色細砂層　As-C(径10㎜)20%。

2 a 層　黒褐色細砂層　As-C(径10㎜)30%。

3　層　にぶい黄褐色細砂層　黒色土とソフトロームの混土層。



－1号周堀南側

層　にぶい黄橙色細砂層　As-C５%、Hr-FA20%。

層　黄褐色細砂層　Hr-FP(径10㎜)を若干、As-C10%。

層　明黄褐色細砂層　As-C５%、ソフトローム30%。

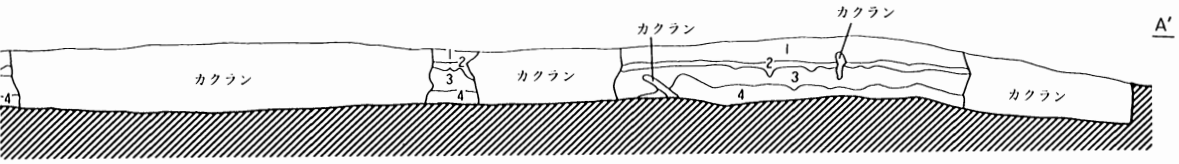
M－1号墳丘

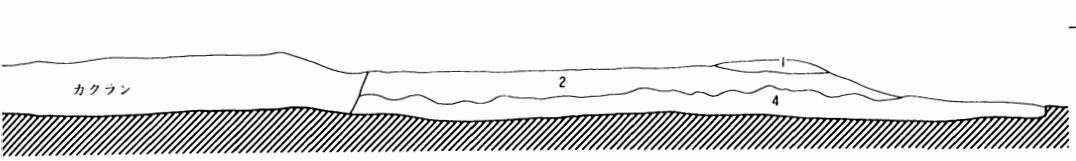
1　層　にぶい黄褐色粗砂＋細砂層　As-C、Hr-FP20%、ソフトローム30%。

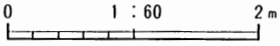
2　層　褐灰色粗砂＋細砂層　Hr-FAの純層。

3　層　黒褐色粗砂＋細砂層　As-C(灰)主体。

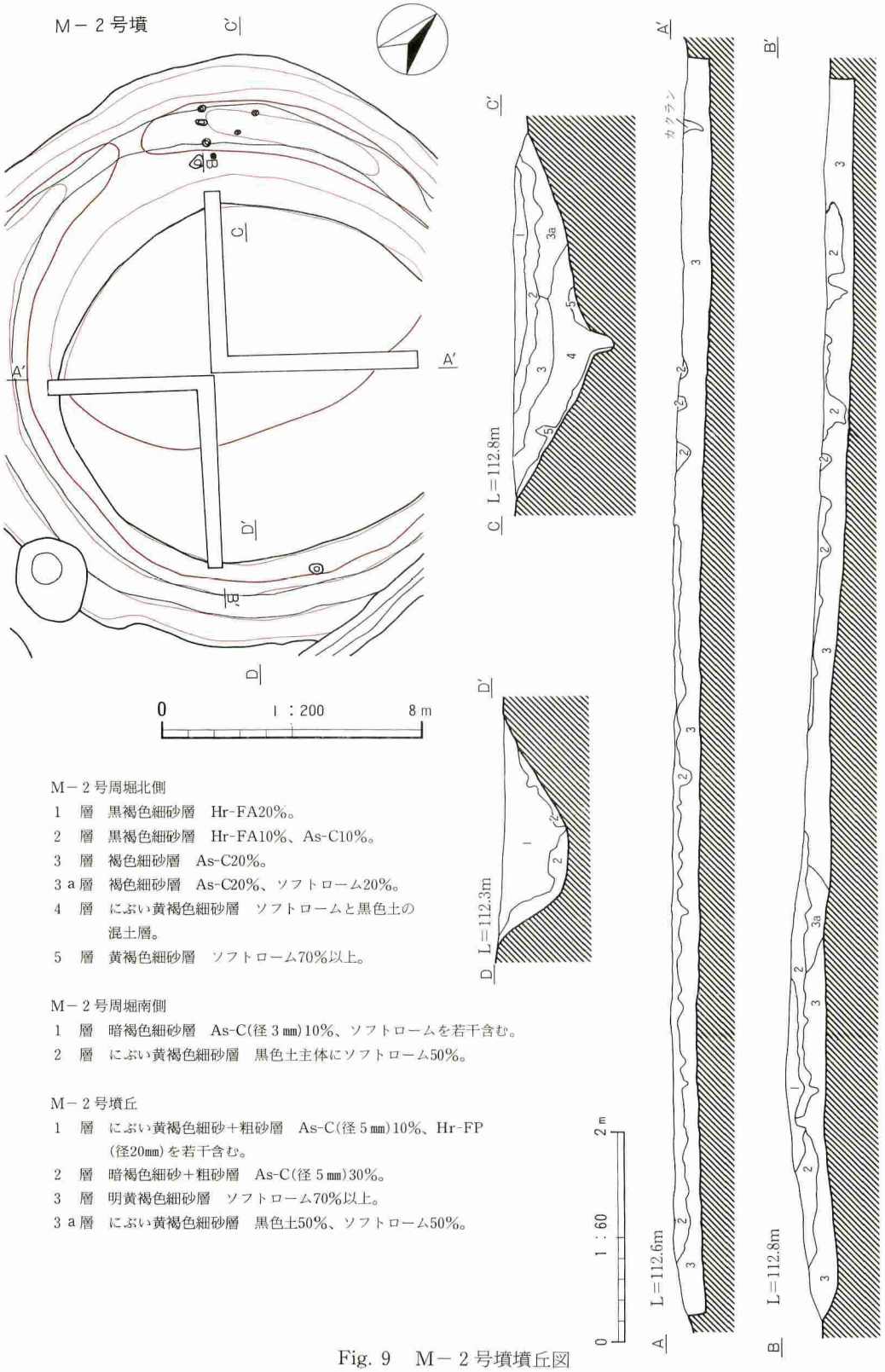
4　層　黄褐色粗砂＋細砂層　ソフトローム70%以上。







. 号墳墳丘図



M－2号周堀北側

1　層　黒褐色細砂層　Hr-FA20%。
2　層　黒褐色細砂層　Hr-FA10%、As-C10%。
3　層　褐色細砂層　As-C20%。
3 a 層　褐色細砂層　As-C20%、ソフトローム20%。
4　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトロームと黒色土の混土層。
5　層　黄褐色細砂層　ソフトローム70%以上。

M－2号周堀南側

1　層　暗褐色細砂層　As-C(径3㎜)10%、ソフトロームを若干含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　黒色土主体にソフトローム50%。

M－2号墳丘

1　層　にぶい黄褐色細砂＋粗砂層　As-C(径5㎜)10%、Hr-FP(径20㎜)を若干含む。
2　層　暗褐色細砂＋粗砂層　As-C(径5㎜)30%。
3　層　明黄褐色細砂層　ソフトローム70%以上。
3 a 層　にぶい黄褐色細砂層　黒色土50%、ソフトローム50%。

Fig. 9　M－2号墳墳丘図

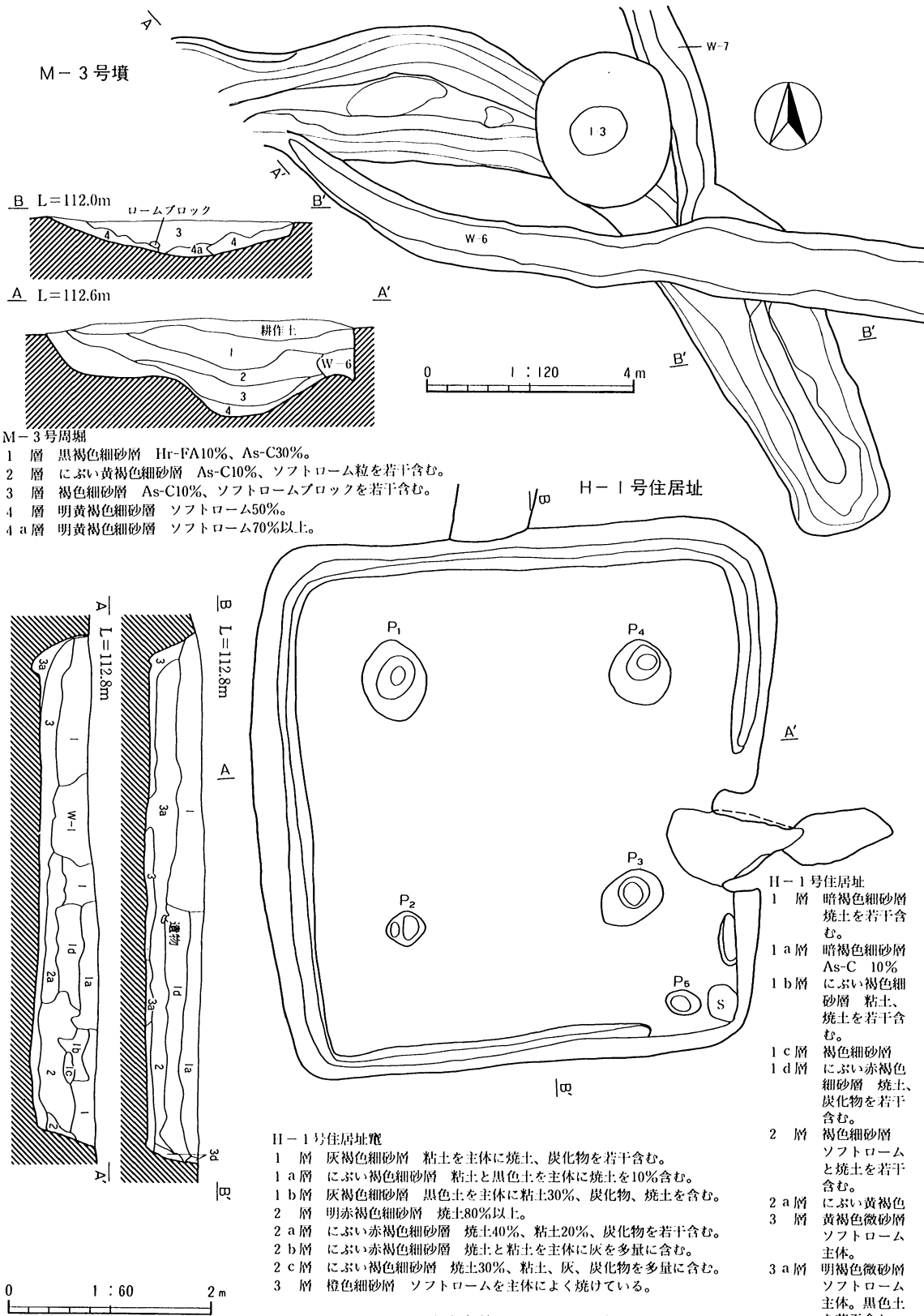
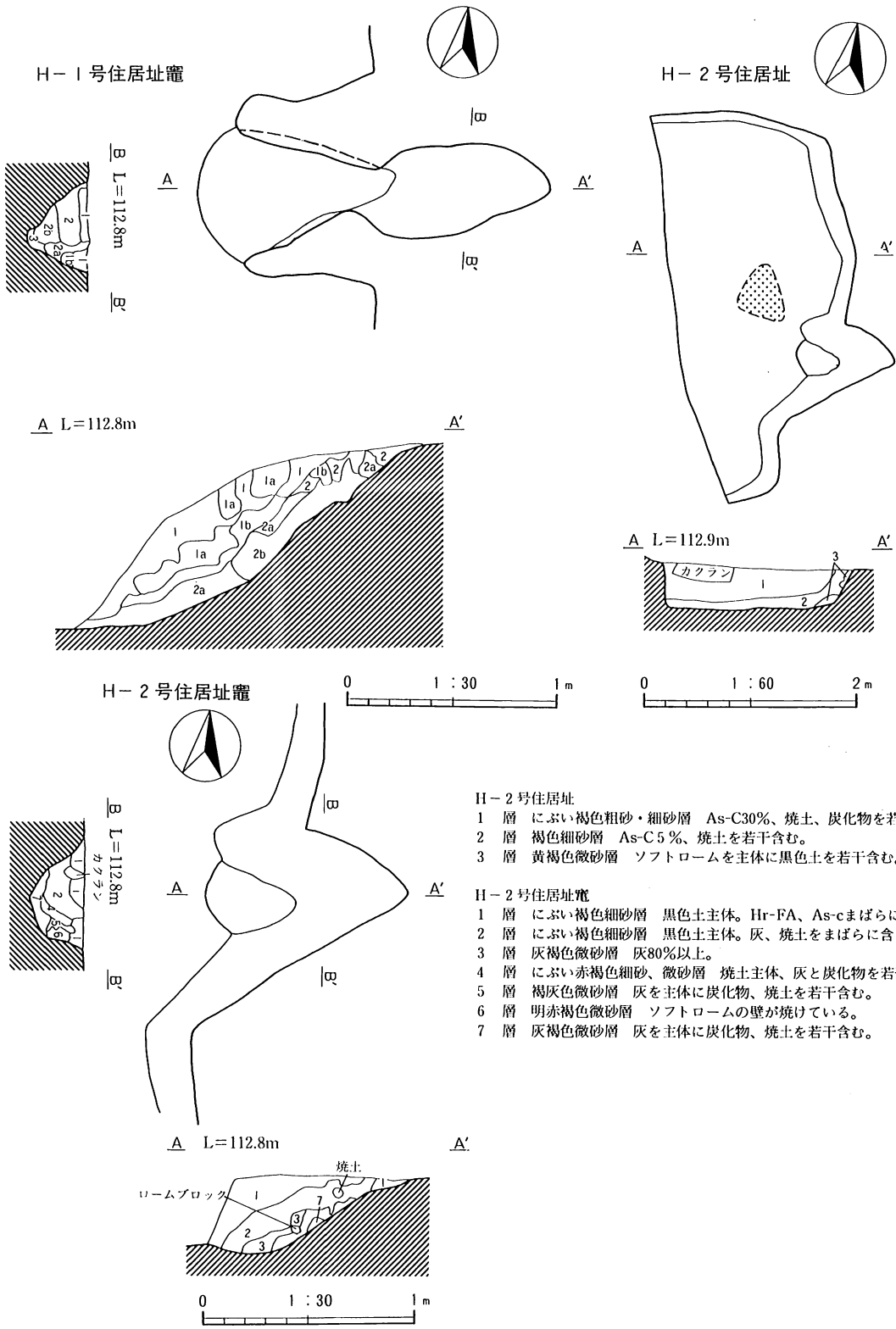


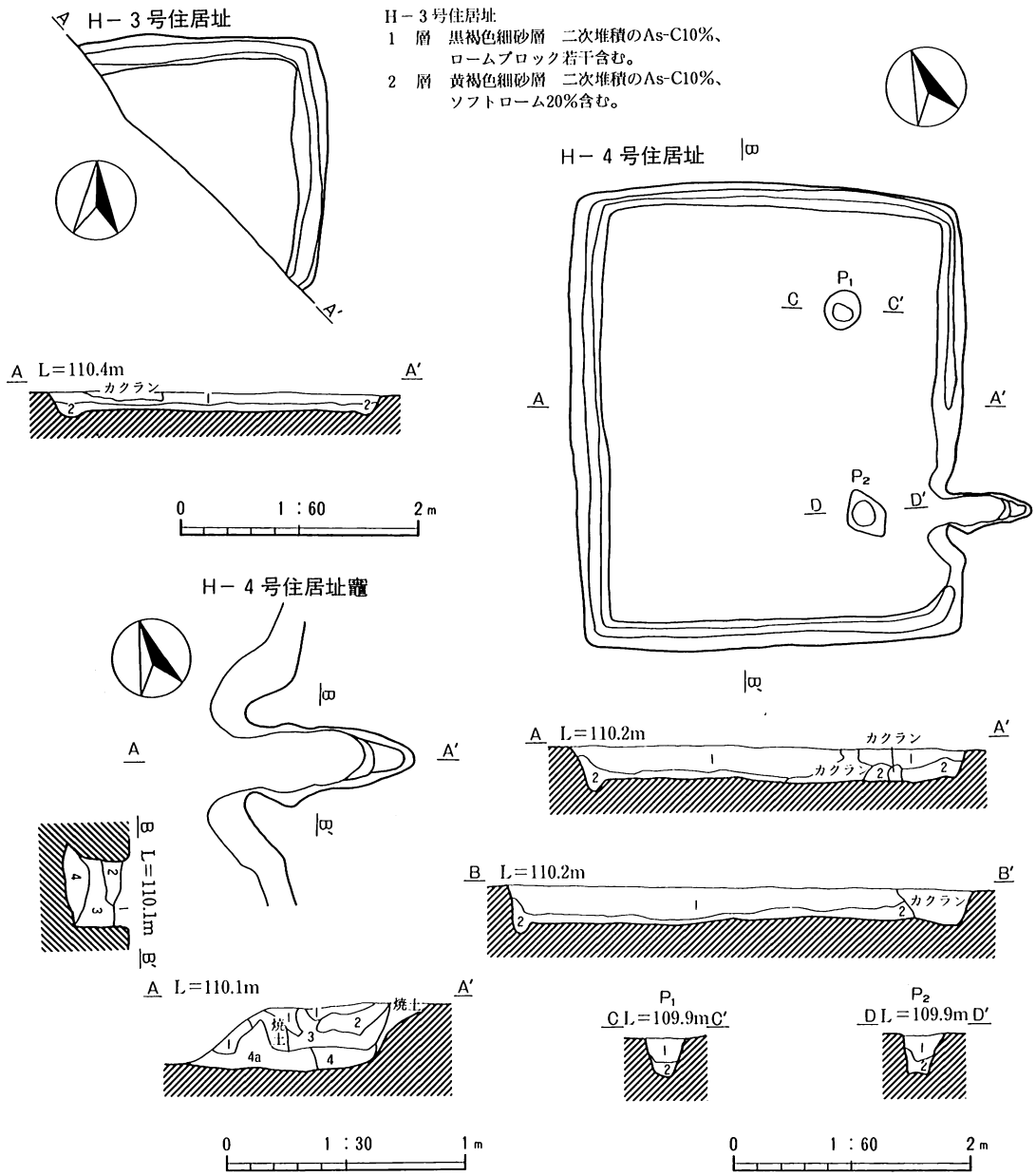
Fig. 10 M－3号墳全体図・H－1号住居址



H－2号住居址
1 層 にぶい褐色粗砂・細砂層 As-C30%、焼土、炭化物を若干含む。
2 層 褐色細砂層 As-C5%、焼土を若干含む。
3 層 黄褐色微砂層 ソフトロームを主体に黒色土を若干含む。

H－2号住居址竈
1 層 にぶい褐色細砂層 黒色土主体。Hr-FA、As-cまばらに10%。
2 層 にぶい褐色細砂層 黒色土主体。灰、焼土をまばらに含む。
3 層 灰褐色微砂層 灰80%以上。
4 層 にぶい赤褐色細砂、微砂層 焼土主体、灰と炭化物を若干含む。
5 層 褐灰色微砂層 灰を主体に炭化物、焼土を若干含む。
6 層 明赤褐色微砂層 ソフトロームの壁が焼けている。
7 層 灰褐色微砂層 灰を主体に炭化物、焼土を若干含む。

Fig. 11 H－1～2号住居址



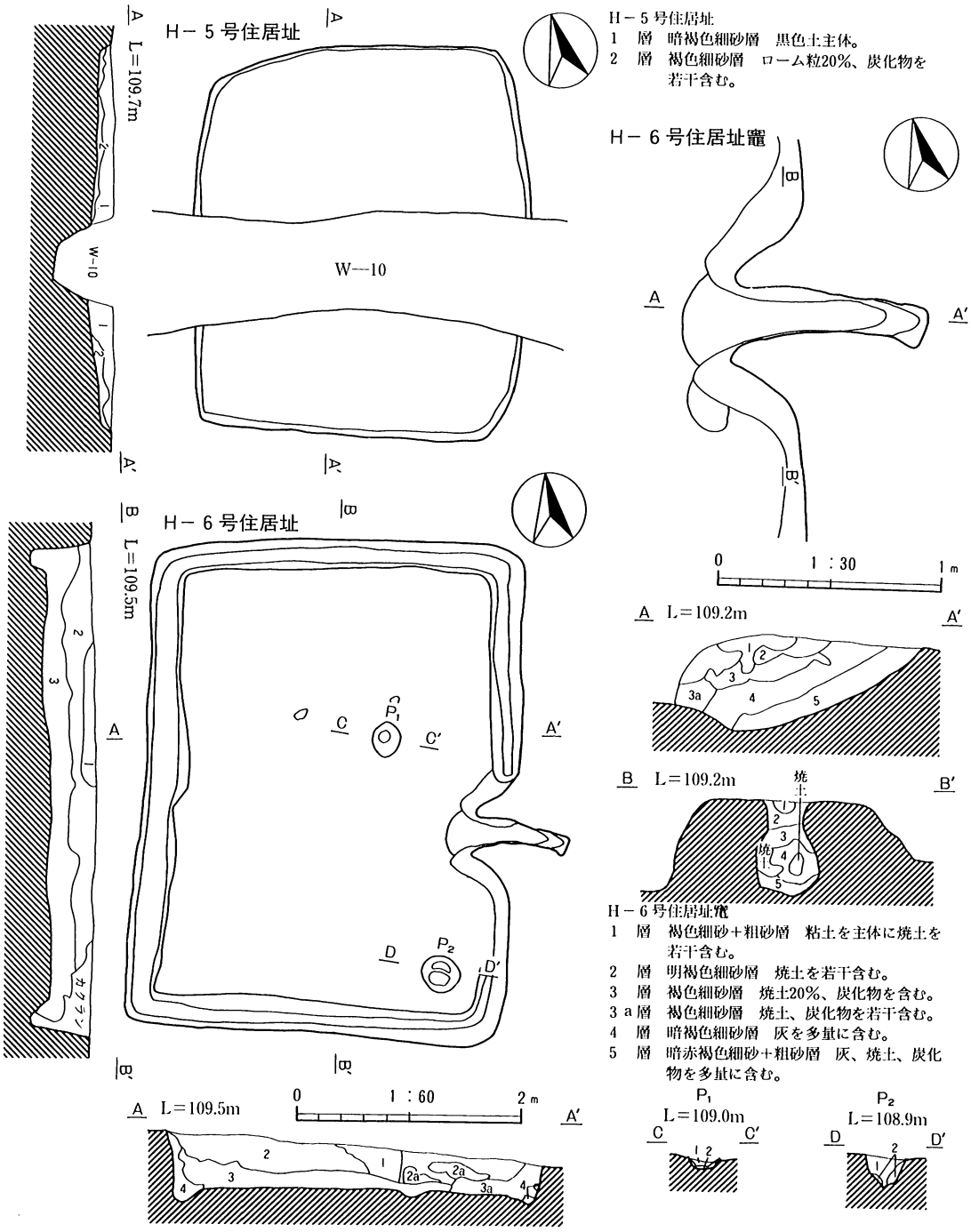
H－3号住居址
1　層　黒褐色細砂層　二次堆積のAs-C10%、ロームブロック若干含む。
2　層　黄褐色細砂層　二次堆積のAs-C10%、ソフトローム20%含む。

H－4号住居址竈
1　層　にぶい褐色微砂層　粘土を主体にローム土を若干含む。
2　層　明褐色細砂層　黒色度主体に焼土30%、炭化物を若干含む。
3　層　褐色細砂＋粗砂層　黒色土主体に焼土30%、炭化物10%、ロームブロック10%。
4　層　灰褐色細砂層　灰を主体に焼土20%、炭化物20%。
4a層　褐色細砂層　灰を主体に焼土20%、炭化物10%。

H－4号住居址
1　層　褐色細砂層　Hr-FP、As-C5%、ロームブロック若干含む。
2　層　褐色細砂層　炭化物5%、ロームブロック若干含む。
3　層　褐色細砂層　焼土粒10%、炭化物若干含む。

H－4号住居址柱穴P_1・P_2
1　層　暗褐色細砂層　ソフトローム10%。
2　層　褐色細砂層　ソフトローム30%。

Fig. 12　H－3～4号住居址



H－6号住居址
1 層 にぶい暗褐色細砂層 Hr-FP(径1㎜)5%、As-C20%、焼土粒10%。
2 層 暗褐色細砂層 Hr-FP(径1㎜)5%、As-C30%、ローム粒を若干含む。
2 a 層 黒褐色細砂層 Hr-FP(径1㎜)5%。
3 層 暗褐色細砂層 Hr-FP(径1㎜)5%、As-C10%、焼土粒10%。
3 a 層 暗褐色細砂層 焼土10%、炭化物を若干含む。
4 層 黄褐色細砂層 ローム粒を多量に含む。

H－6号住居址柱穴P_1・P_2
1 層 暗褐色細砂層 黒色土主体。
2 層 黄褐色細砂層 ローム粒50%。

Fig. 13 H－5～6号住居址

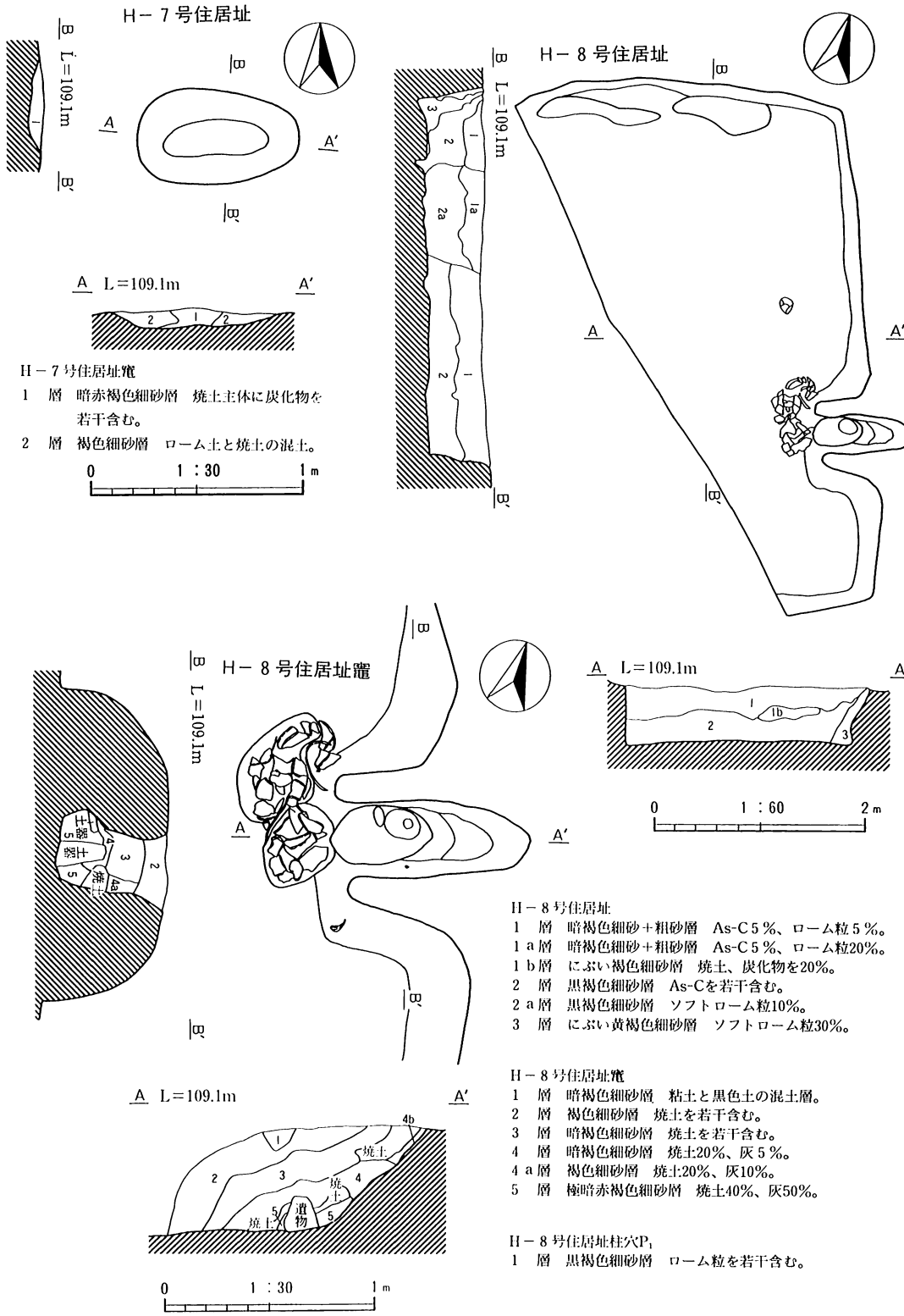
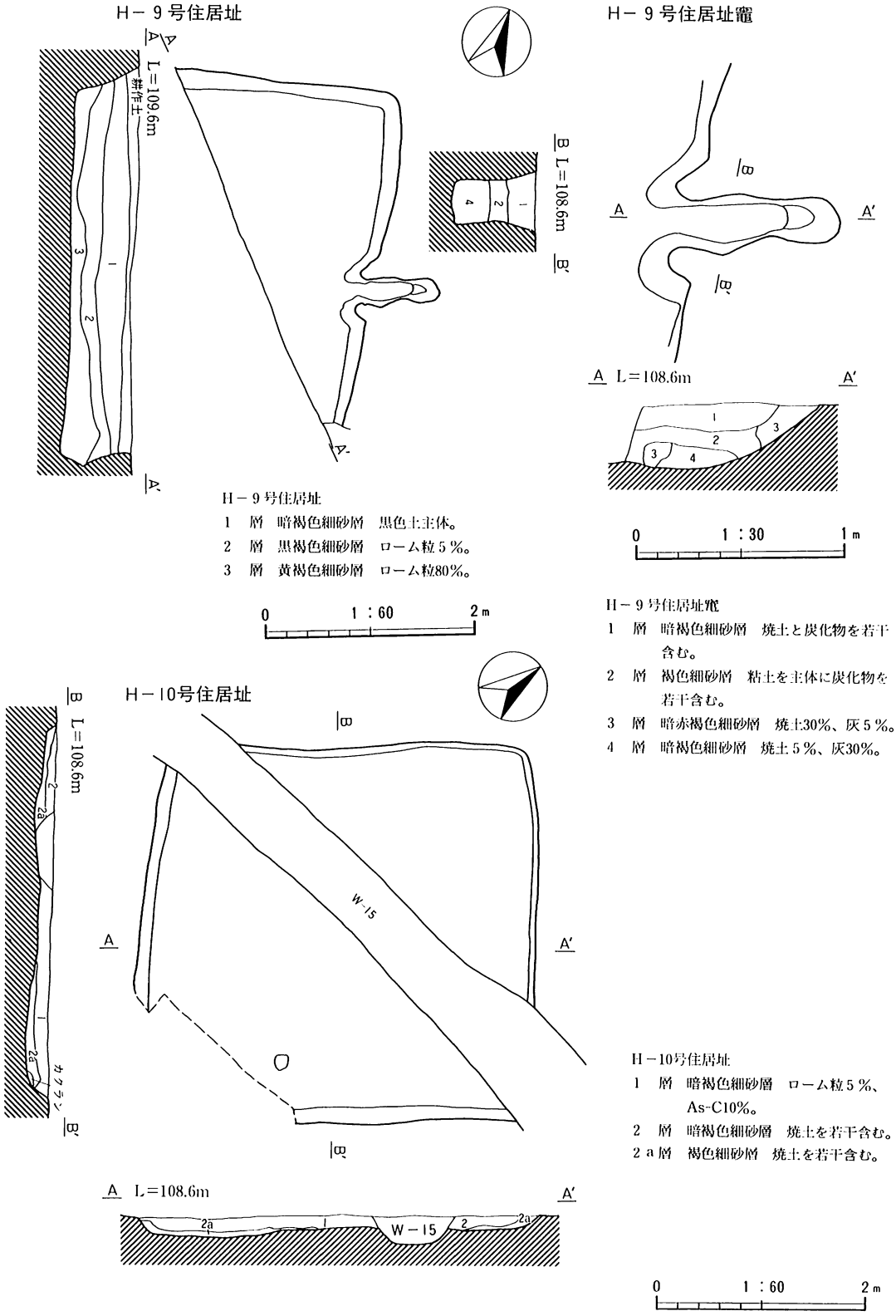


Fig. 14 H－7～8号住居址



H－9号住居址

1　層　暗褐色細砂層　黒色土主体。

2　層　黒褐色細砂層　ローム粒5％。

3　層　黄褐色細砂層　ローム粒80％。

H－9号住居址竈

1　層　暗褐色細砂層　焼土と炭化物を若干含む。

2　層　褐色細砂層　粘土を主体に炭化物を若干含む。

3　層　暗赤褐色細砂層　焼土30％、灰5％。

4　層　暗褐色細砂層　焼土5％、灰30％。

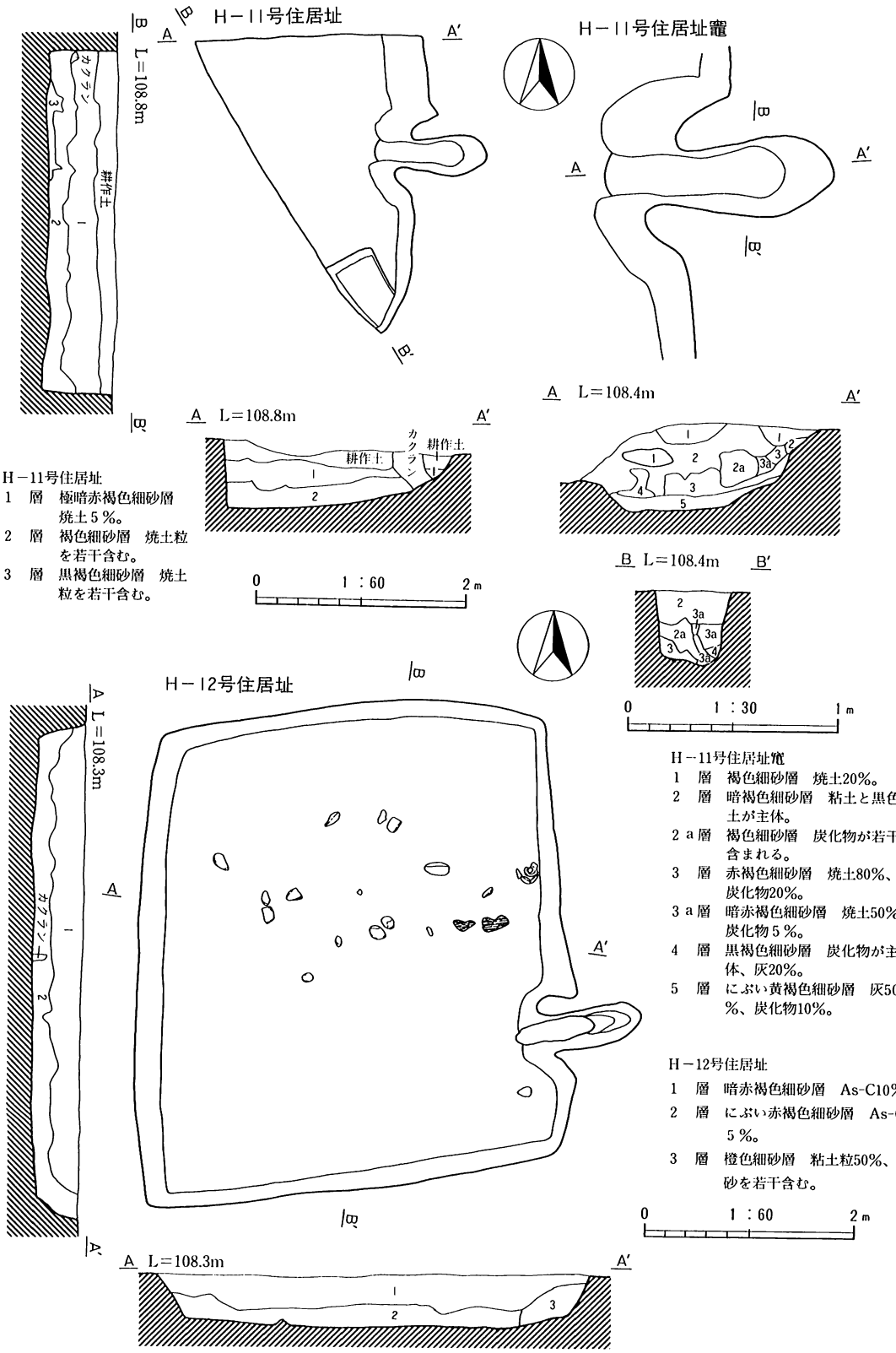
H－10号住居址

1　層　暗褐色細砂層　ローム粒5％、As-C10％。

2　層　暗褐色細砂層　焼土を若干含む。

2a層　褐色細砂層　焼土を若干含む。

Fig. 15　H－9～10号住居址

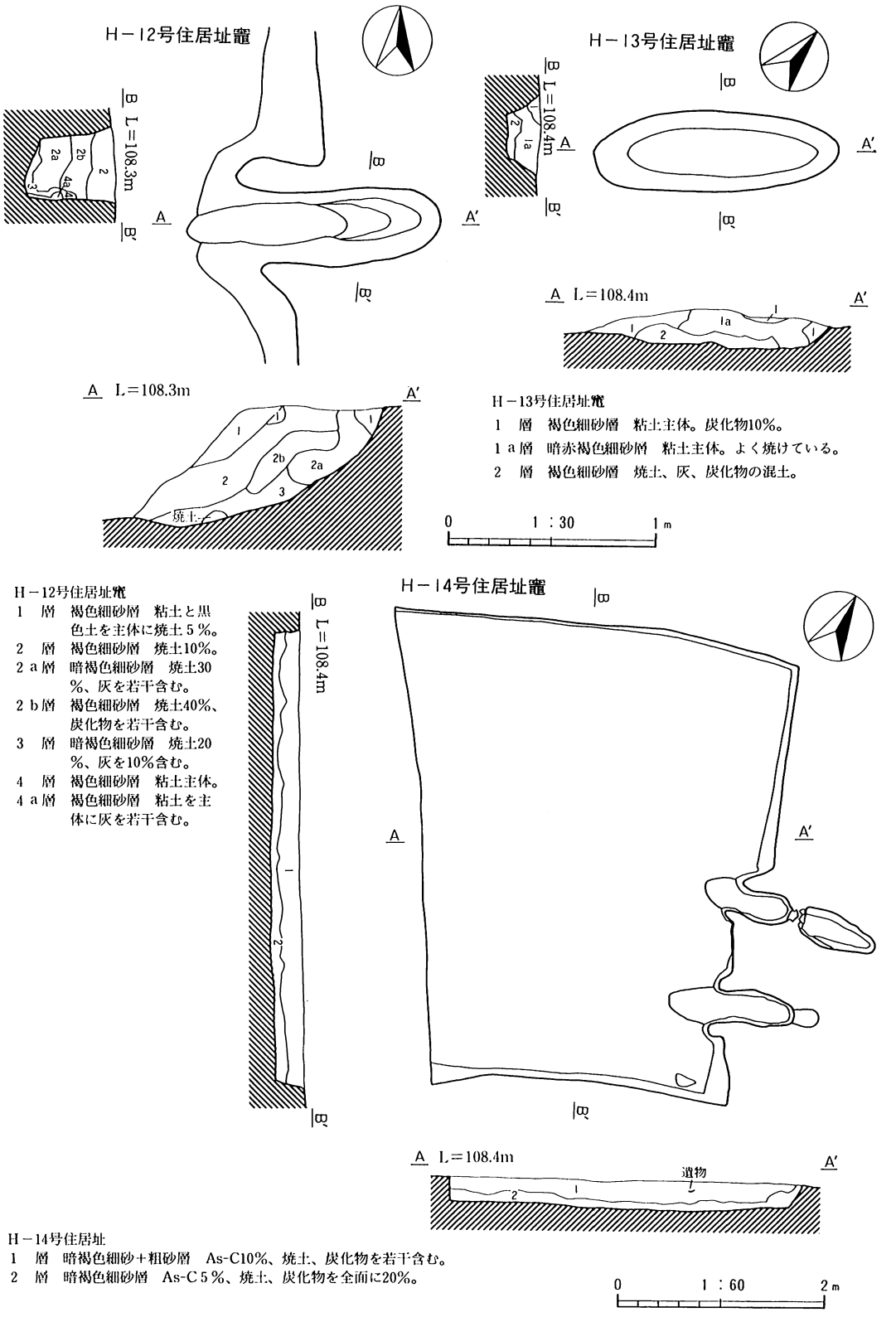


H－11号住居址
1 層 極暗赤褐色細砂層 焼土5％。
2 層 褐色細砂層 焼土粒を若干含む。
3 層 黒褐色細砂層 焼土粒を若干含む。

H－11号住居址竈
1 層 褐色細砂層 焼土20％。
2 層 暗褐色細砂層 粘土と黒色土が主体。
2 a 層 褐色細砂層 炭化物が若干含まれる。
3 層 赤褐色細砂層 焼土80％、炭化物20％。
3 a 層 暗赤褐色細砂層 焼土50％、炭化物5％。
4 層 黒褐色細砂層 炭化物が主体、灰20％。
5 層 にぶい黄褐色細砂層 灰50％、炭化物10％。

H－12号住居址
1 層 暗赤褐色細砂層 As-C10％。
2 層 にぶい赤褐色細砂層 As-C 5％。
3 層 橙色細砂層 粘土粒50％、砂を若干含む。

Fig. 16 H－11～12号住居址



H－12号住居址竈
1　層　褐色細砂層　粘土と黒色土を主体に焼土５％。
2　層　褐色細砂層　焼土10％。
2ａ層　暗褐色細砂層　焼土30％、灰を若干含む。
2ｂ層　褐色細砂層　焼土40％、炭化物を若干含む。
3　層　暗褐色細砂層　焼土20％、灰を10％含む。
4　層　褐色細砂層　粘土主体。
4ａ層　褐色細砂層　粘土を主体に灰を若干含む。

H－13号住居址竈
1　層　褐色細砂層　粘土主体。炭化物10％。
1ａ層　暗赤褐色細砂層　粘土主体。よく焼けている。
2　層　褐色細砂層　焼土、灰、炭化物の混土。

H－14号住居址
1　層　暗褐色細砂＋粗砂層　As-C10％、焼土、炭化物を若干含む。
2　層　暗褐色細砂層　As-C５％、焼土、炭化物を全面に20％。

Fig. 17　H－12～14号住居址

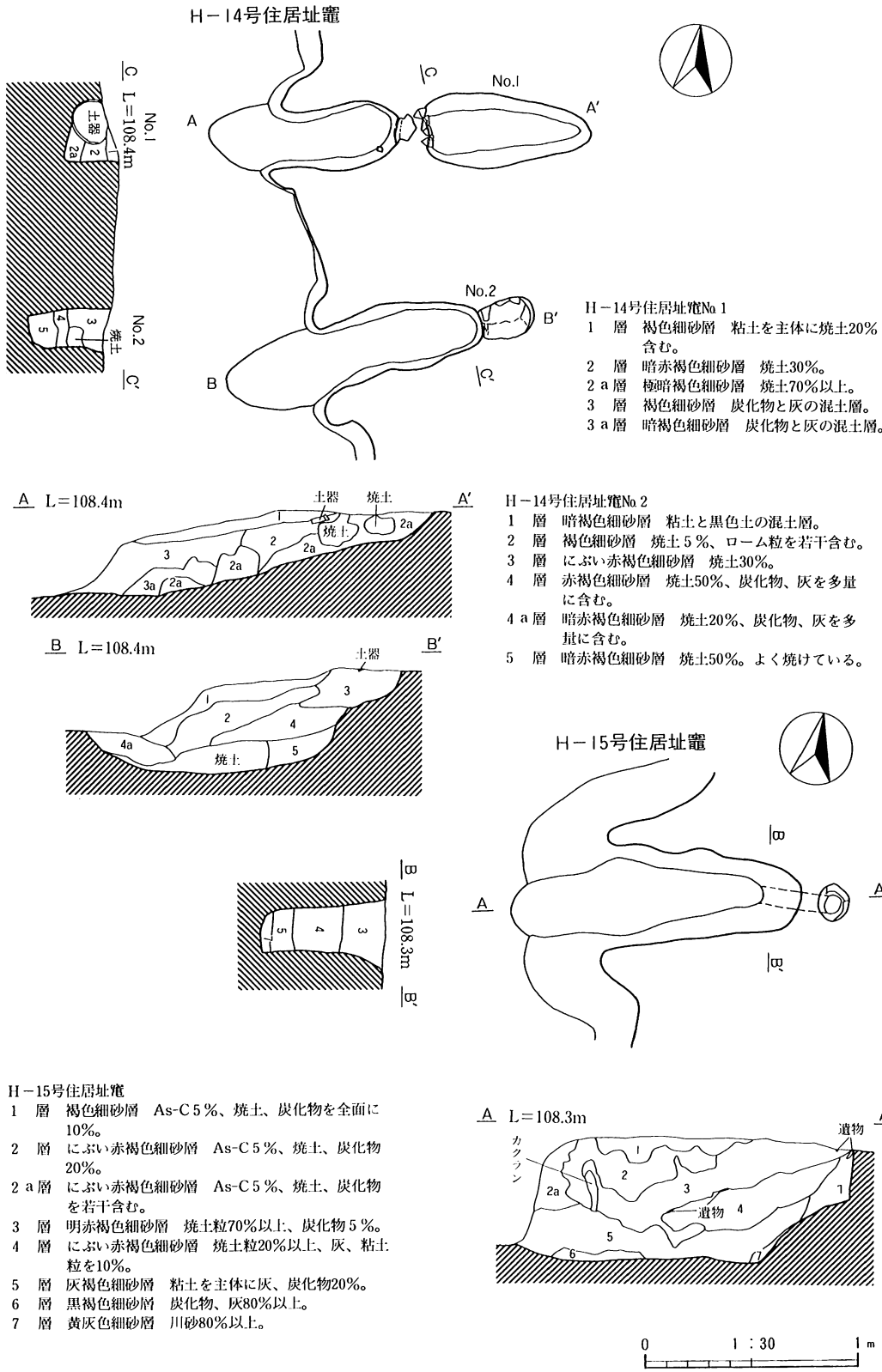
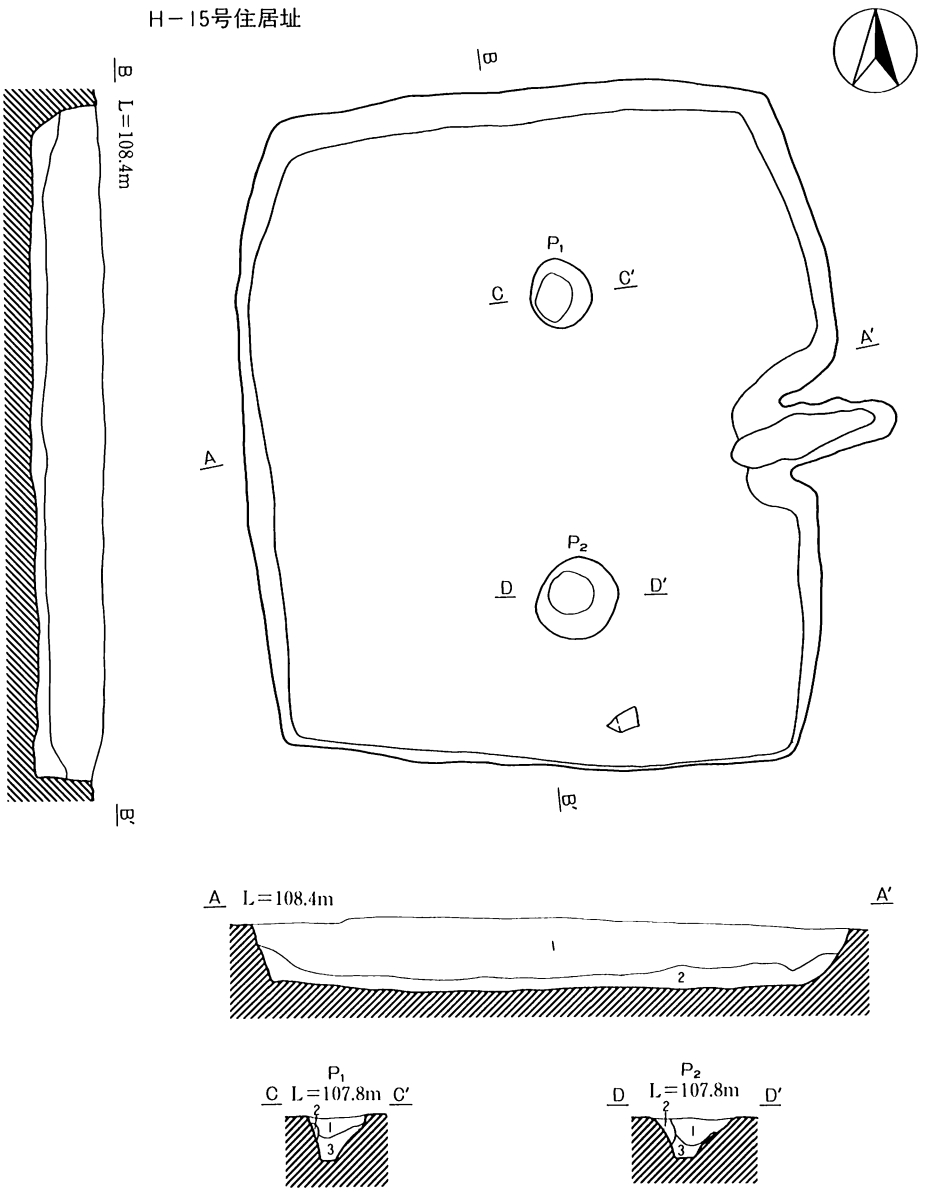


Fig. 18　H－14～15号住居址



H－15号住居址

1　層　褐色細砂＋粗砂層　As-C20%、焼土粒10%。

2　層　暗褐色細砂層　As-C10%、炭化物を若干含む。

H－15号住居址P_1・P_2

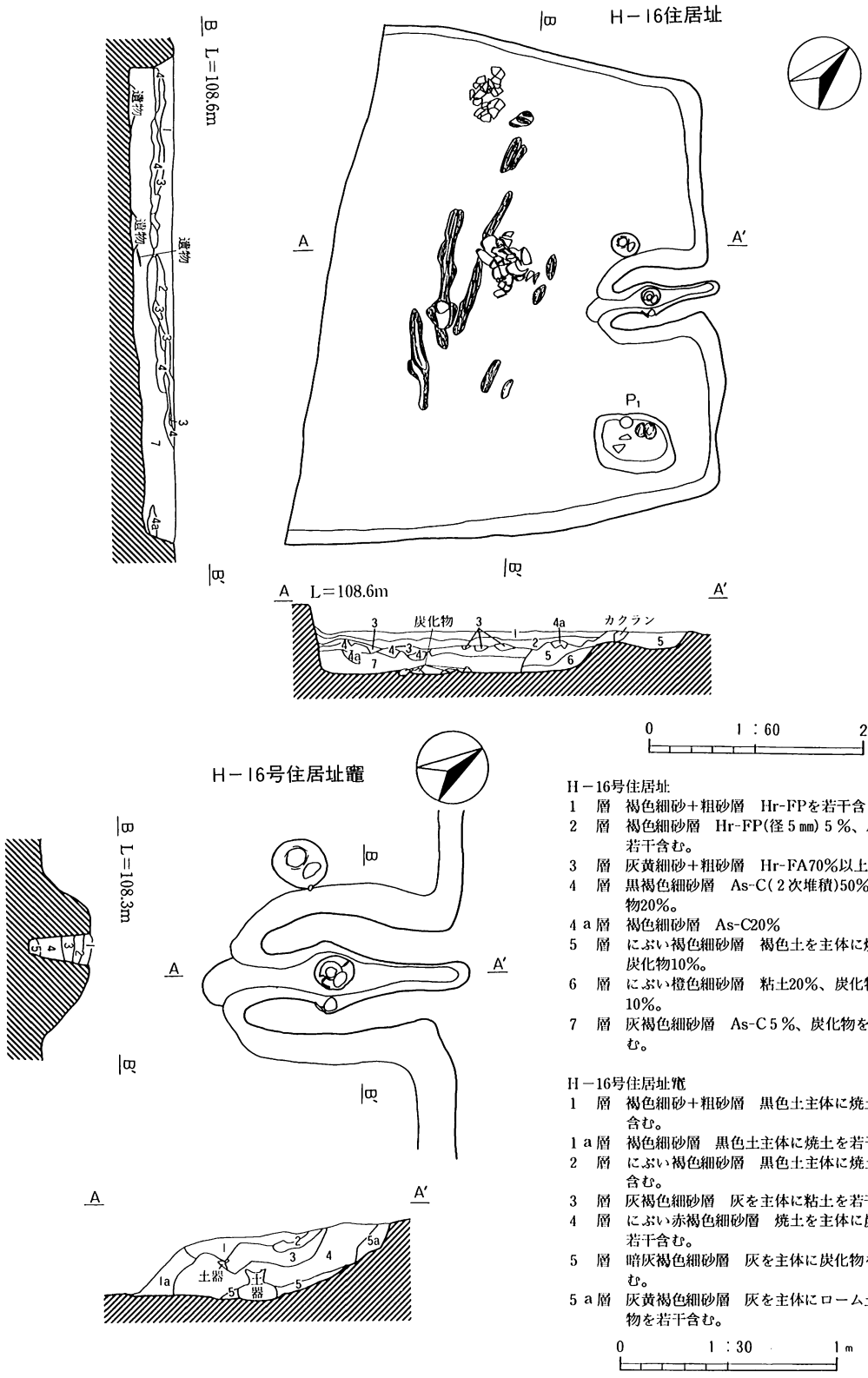
1　層　黒褐色細砂層　As-C10%含む。

2　層　黄褐色細砂層　粘土粒10%含む。

3　層　にぶい黄橙色細砂層　砂と粘土を多量に含む。

0　1：60　2m

Fig. 19　H－15号住居址



H－16号住居址

1 層 褐色細砂＋粗砂層 Hr-FPを若干含む。
2 層 褐色細砂層 Hr-FP(径5㎜)5％、As-Cを若干含む。
3 層 灰黄細砂＋粗砂層 Hr-FA70％以上。
4 層 黒褐色細砂層 As-C(2次堆積)50％、炭化物20％。
4a層 褐色細砂層 As-C20％
5 層 にぶい褐色細砂層 褐色土を主体に焼土10％、炭化物10％。
6 層 にぶい橙色細砂層 粘土20％、炭化物、焼土10％。
7 層 灰褐色細砂層 As-C5％、炭化物を多量に含む。

H－16号住居址竈

1 層 褐色細砂＋粗砂層 黒色土主体に焼土を20％含む。
1a層 褐色細砂層 黒色土主体に焼土を若干含む。
2 層 にぶい褐色細砂層 黒色土主体に焼土を5％含む。
3 層 灰褐色細砂層 灰を主体に粘土を若干含む。
4 層 にぶい赤褐色細砂層 焼土を主体に炭化物を若干含む。
5 層 暗灰褐色細砂層 灰を主体に炭化物を若干含む。
5a層 灰黄褐色細砂層 灰を主体にローム土と炭化物を若干含む。

Fig. 20 H－16号住居址

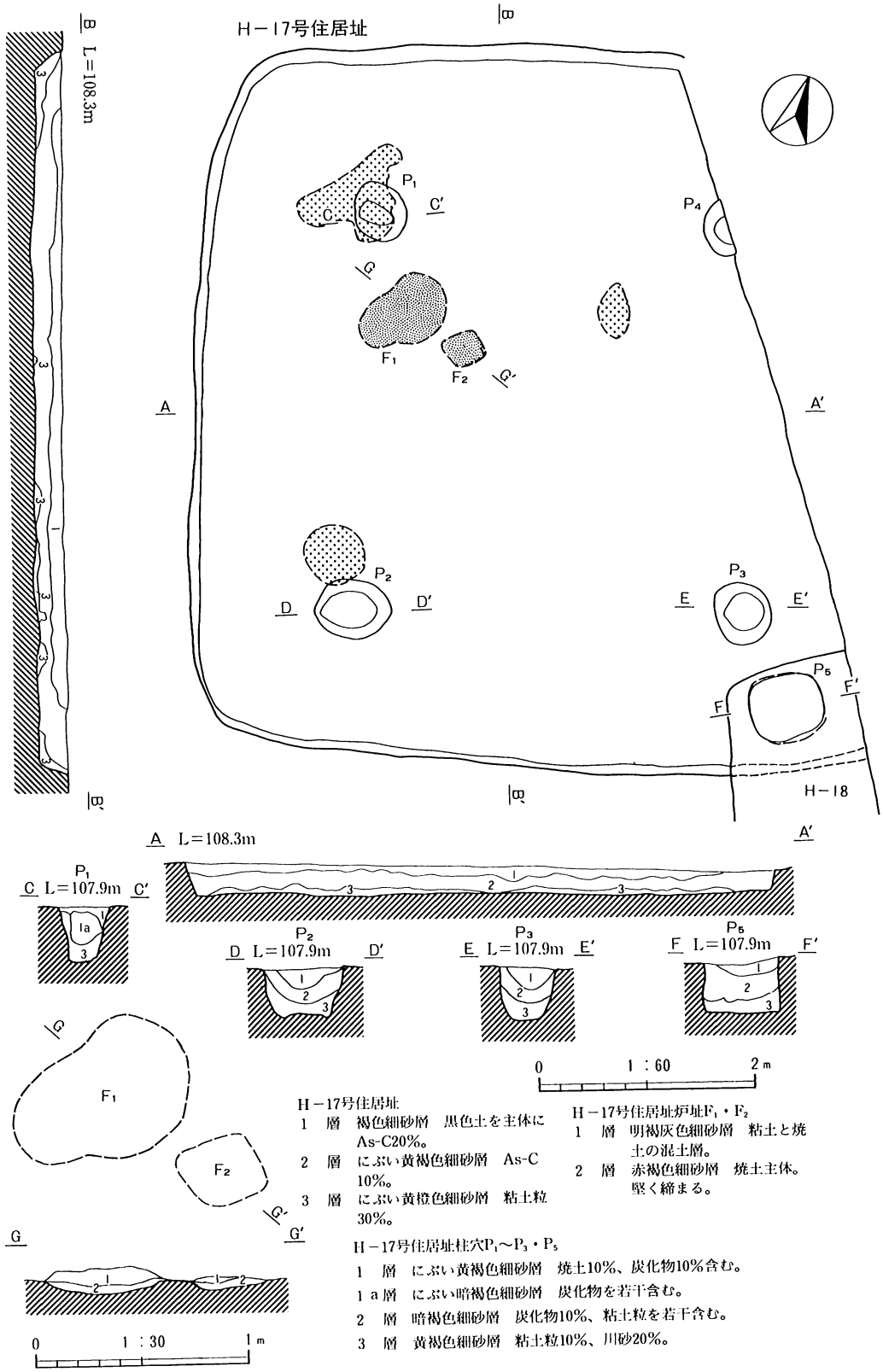
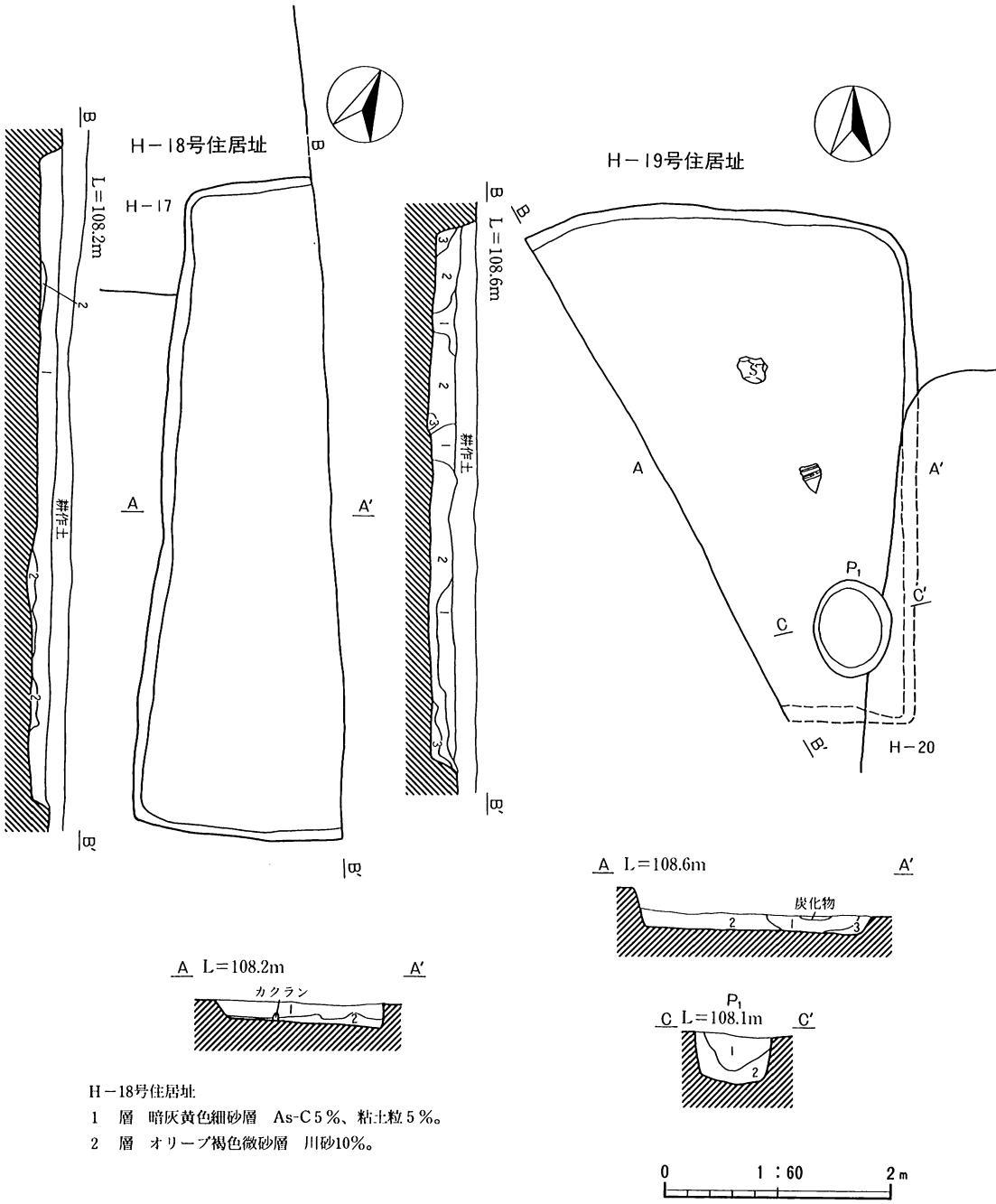


Fig. 21 H－17号住居址



H－18号住居址

1　層　暗灰黄色細砂層　As-C５％、粘土粒５％。

2　層　オリーブ褐色微砂層　川砂10％。

H－19号住居址

1　層　褐色細砂層　炭化物粒、As-Cを若干含む。

2　層　にぶい黄褐色細砂層　As-C５％。

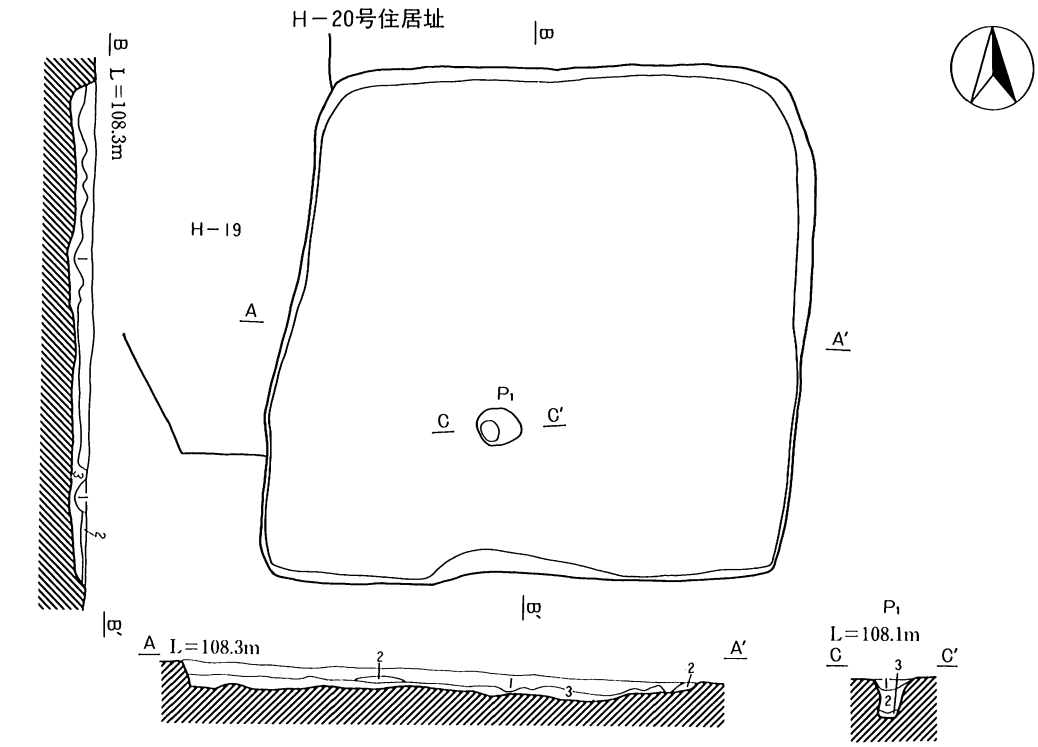
3　層　にぶい黄褐色細砂層　粘土粒10％、川砂を若干含む。

H－19号住居址貯蔵穴P_1

1　層　暗褐色細砂層　As-Cをまばらに10％含む。

2　層　明黄褐色細砂層　川砂主体。

Fig. 22　H－18～19号住居址



H－20号住居址

1　層　暗褐色細砂＋粗砂層　As-C10%、炭化物粒を若干含む。

2　層　にぶい黄橙色細砂層　粘土主体。

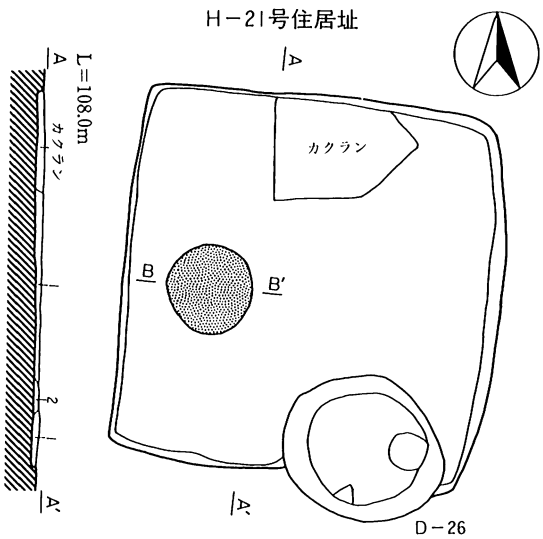
3　層　にぶい黄褐色シルト層。

H－20号住居址柱穴P_1

1　層　黒褐色微砂層　黒色土主体。

2　層　褐色細砂層　粘土粒10%。

3　層　灰黄褐色細砂層　川砂10%、粘土粒10%。

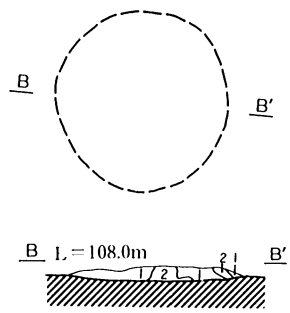


H－21号住居址

1　層　にぶい黄褐色微砂層　川砂を若干含む。

2　層　にぶい褐色細砂層　粘土粒を若干含む。

H－21号住居址炉址



H－21号住居址炉址F_1

1　層　暗褐色細砂層　黒色土主体。

2　層　暗赤褐色細砂層　焼土主体。

0　1：60　2m

0　1：30　1m

Fig. 23　H－20～21号住居址

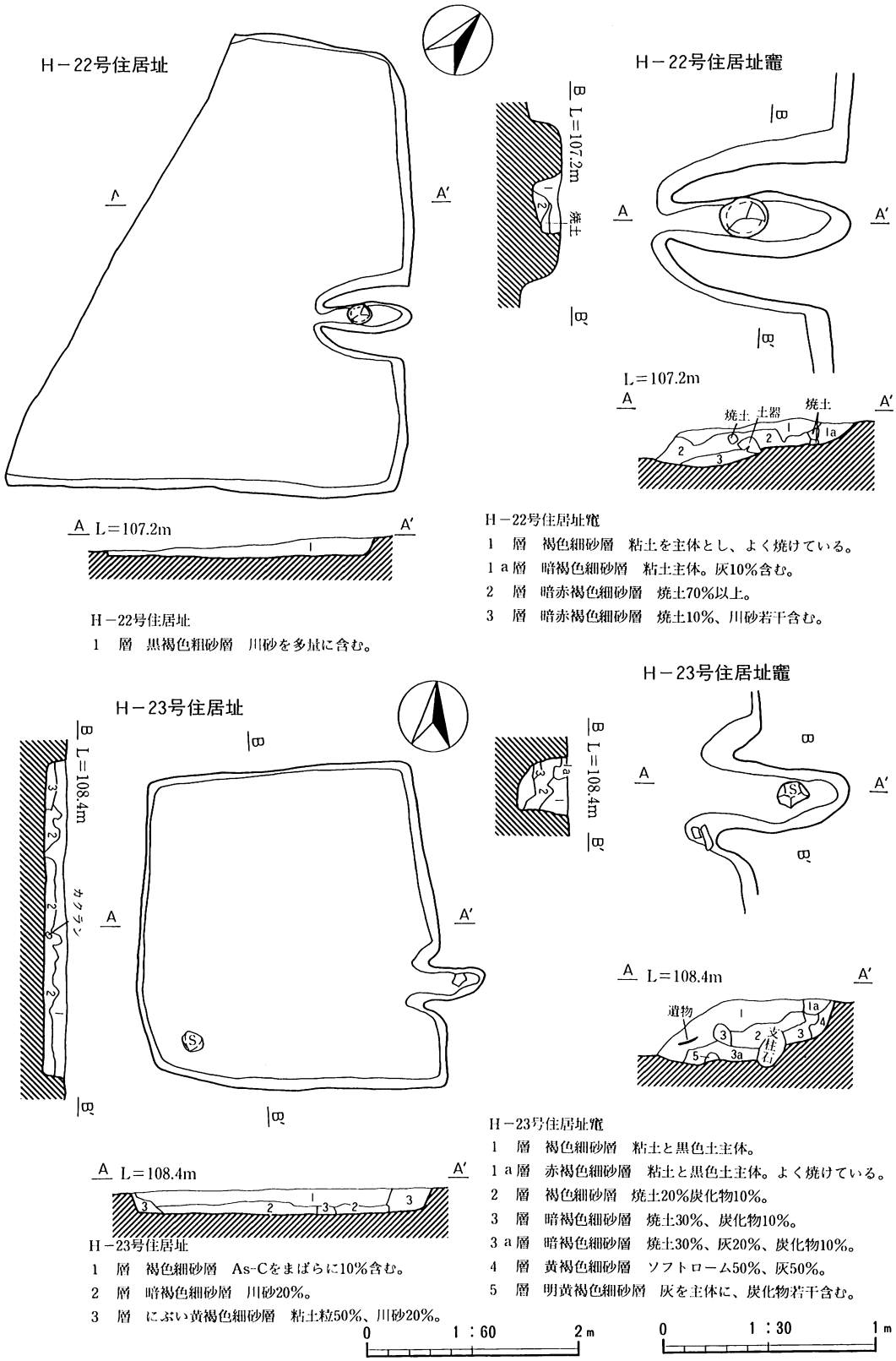
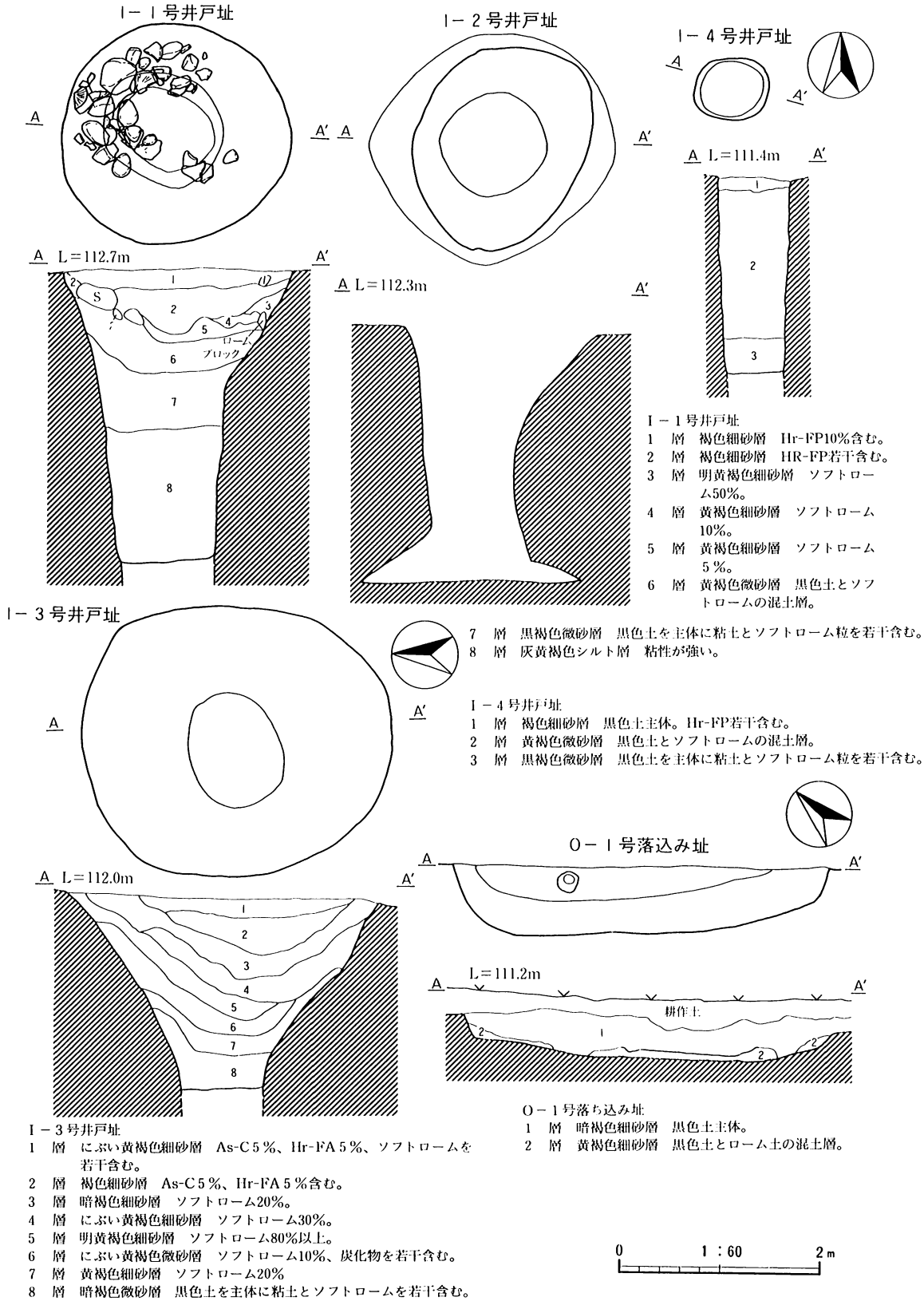


Fig. 24　H－22～23号住居址



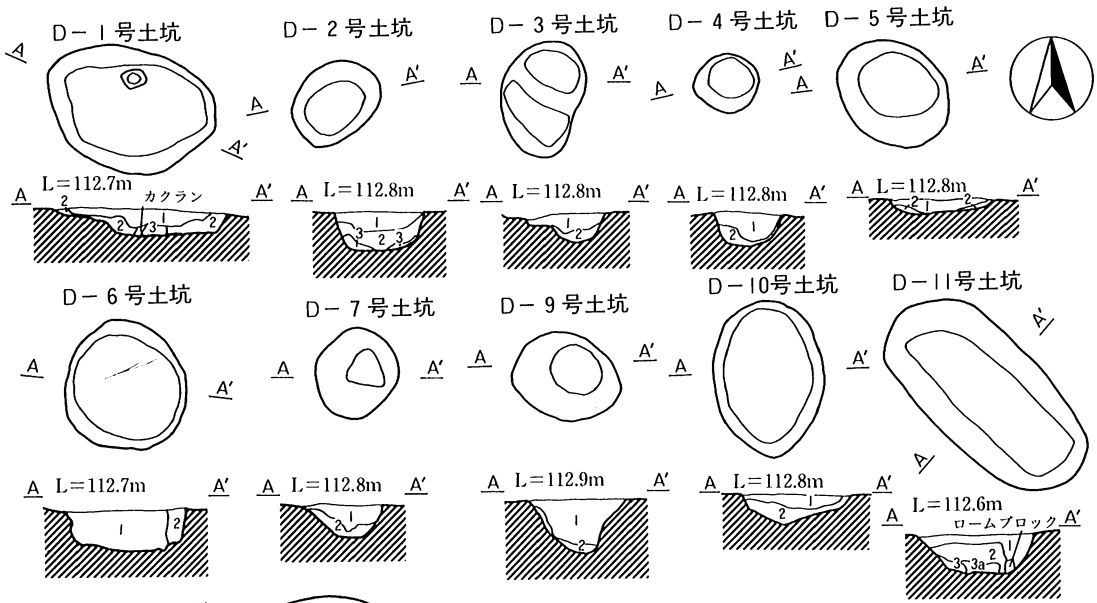
I－1号井戸址
1 層 褐色細砂層 Hr-FP10%含む。
2 層 褐色細砂層 HR-FP若干含む。
3 層 明黄褐色細砂層 ソフトローム50%。
4 層 黄褐色細砂層 ソフトローム10%。
5 層 黄褐色細砂層 ソフトローム5%。
6 層 黄褐色微砂層 黒色土とソフトロームの混土層。
7 層 黒褐色微砂層 黒色土を主体に粘土とソフトローム粒を若干含む。
8 層 灰黄褐色シルト層 粘性が強い。

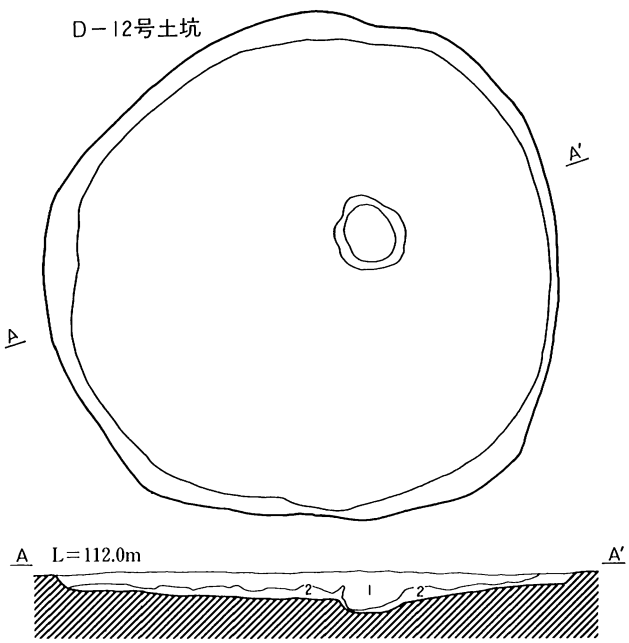
I－4号井戸址
1 層 褐色細砂層 黒色土主体。Hr-FP若干含む。
2 層 黄褐色微砂層 黒色土とソフトロームの混土層。
3 層 黒褐色微砂層 黒色土を主体に粘土とソフトローム粒を若干含む。

O－1号落ち込み址
1 層 暗褐色細砂層 黒色土主体。
2 層 黄褐色細砂層 黒色土とローム土の混土層。

I－3号井戸址
1 層 にぶい黄褐色細砂層 As-C5%、Hr-FA5%、ソフトロームを若干含む。
2 層 褐色細砂層 As-C5%、Hr-FA5%含む。
3 層 暗褐色細砂層 ソフトローム20%。
4 層 にぶい黄褐色細砂層 ソフトローム30%。
5 層 明黄褐色細砂層 ソフトローム80%以上。
6 層 にぶい黄褐色微砂層 ソフトローム10%、炭化物を若干含む。
7 層 黄褐色細砂層 ソフトローム20%
8 層 暗褐色微砂層 黒色土を主体に粘土とソフトロームを若干含む。

Fig.25 I－1～4号井戸址 O－1号落ち込み址





D－1号土坑
1　層　灰黄褐色細砂＋粗砂層　粘土粒20%、ソフトロームブロック20%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム30%。
3　層　黄褐色細砂層　ソフトローム70%以上。

D－2号土坑
1　層　黄褐色細砂層　粘土粒10%、ソフトローム20%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム40%。
3　層　黄褐色細砂層　ソフトローム主体。

D－3号土坑
1　層　灰黄褐色細砂層　粘土粒10%、ソフトロームブロック30%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　粘土粒5%、ソフトローム30%。

D－4号土坑
1　層　黄褐色細砂層　粘土粒20%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム30%。

D－5号土坑
1　層　黒褐色細砂層　粘土粒20%、炭化物20%。
2　層　黄褐色細砂層　ソフトロームブロック。

D－6号土坑
1　層　黄褐色細砂層　粘土粒10%、ソフトロームブロック20%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム50%。

D－7号土坑
1　層　灰黄褐色細砂層　粘土粒30%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム30%。

D－9号土坑
1　層　黒褐色細砂層　As-C 5%、粘土粒20%。
2　層　黄褐色細砂層　炭化物20%、ソフトローム30%。

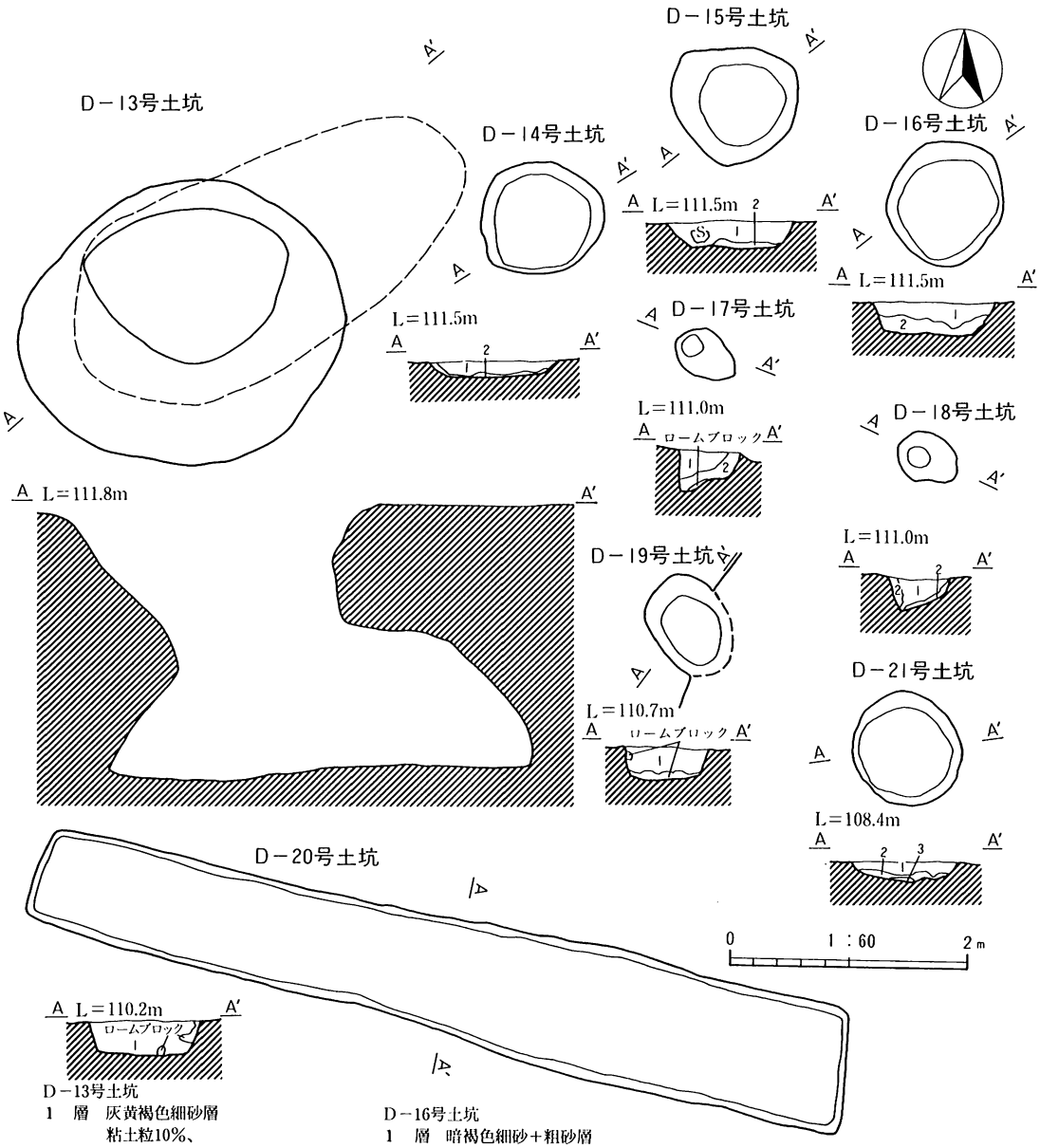
D－10号土坑
1　層　灰黄褐色細砂＋粗砂層　粘土粒10%、ソフトロームブロック20%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム40%。

D－11号土坑
1　層　暗褐色細砂層　As-C(径3㎜)10%、炭化物を若干含む。
2　層　灰褐色細砂層　炭化物30%、灰を30%。
3　層　明褐色細砂層　炭化物10%、焼土10%。
3a層　にぶい褐色細砂層　ソフトローム粒30%、

D－12号土坑
1　層　黒褐色細砂＋粗砂層　Hr-FP30%、As-C30%。
2　層　黄褐色細砂層　ソフトローム30%、As-C10%。

0　1：60　2m

Fig. 26　D－1～12号土坑



D－13号土坑
1　層　灰黄褐色細砂層
　　粘土粒10%、
　　ソフトロームブロック20%。
2　層　黄褐色細砂層
　　ソフトローム30%。

D－14号土坑
1　層　にぶい黄褐色細砂層
　　炭化物、ソフトローム
　　ブロックを若干含む。
2　層　灰黄褐色細砂層
　　粘土50%。

D－15号土坑
1　層　暗褐色細砂＋粗砂層
　　As-C 5%、
　　ソフトロームブロック
　　若干含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層
　　ソフトローム40%。

D－16号土坑
1　層　暗褐色細砂＋粗砂層
　　As-C 5%、
　　ソフトロームブロック若干含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層
　　ソフトローム50%。

D－17号土坑
1　層　黒褐色細砂層
　　粘土粒20%。
2　層　褐色細砂層
　　ソフトローム10%。

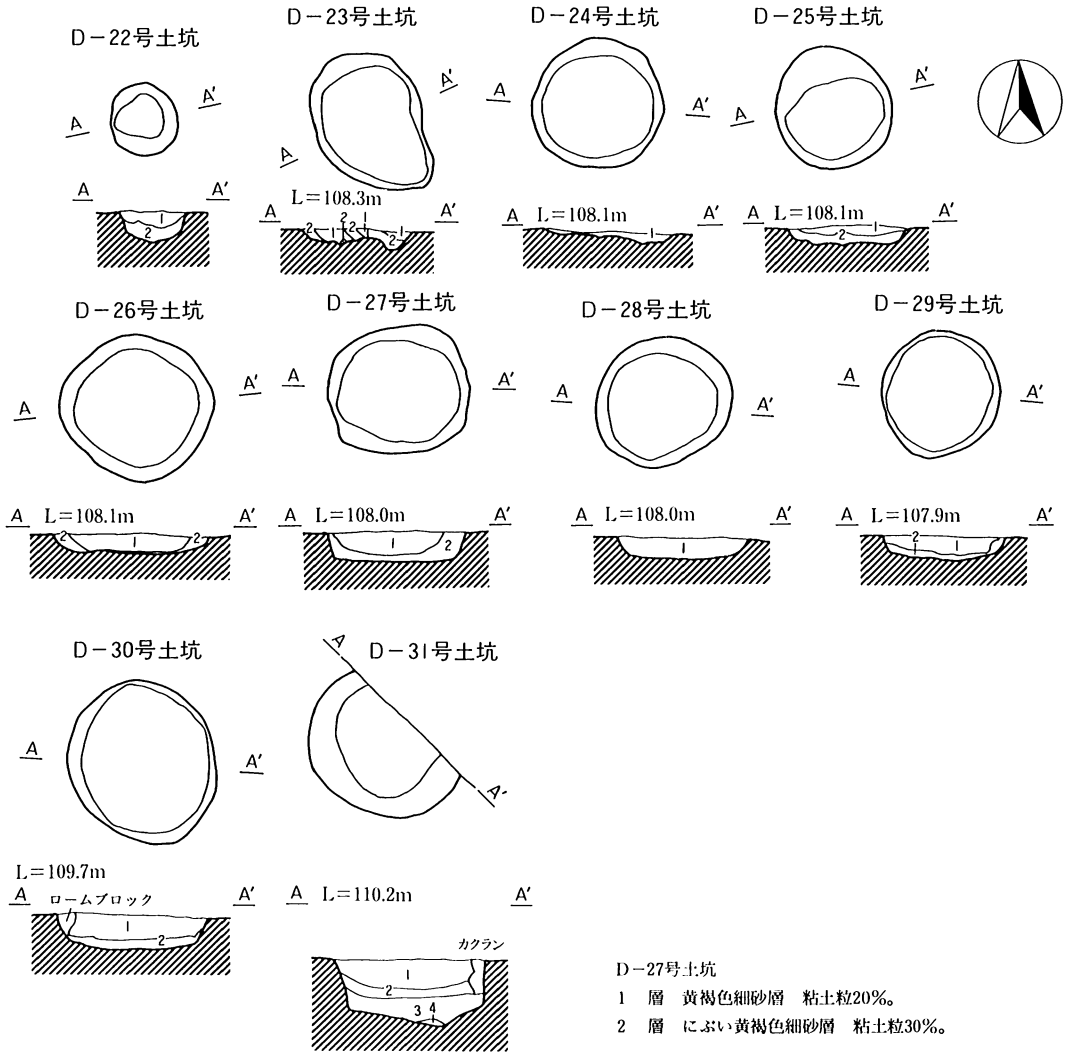
D－18号土坑
1　層　黒褐色細砂層
　　粘土粒10%。
2　層　褐色細砂層
　　ソフトローム20%。

D－19号土坑
1　層　暗褐色細砂層
　　ソフトロームブロック5%。

D－20号土坑
1　層　にぶい黄褐色細砂層
　　ソフトロームブロック5%。

D－21号土坑
1　層　暗褐色細砂層
　　粘土粒20%。
2　層　暗褐色細砂層
　　粘土粒30%。
3　層　明黄褐色細砂層　粘土主体。

Fig. 27　D－13～21号土坑



D－22号土坑
1　層　暗褐色細砂層
2　層　にぶい黄褐色細砂層　粘土粒20%、川砂５%。

D－23号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘土粒20%。
2　層　にぶい黄橙色細砂層　粘土粒60%。

D－24号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘土粒40%。

D－25号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘土粒20%。
2　層　にぶい黄橙色細砂層　川砂と粘土粒主体。

D－26号土坑
1　層　にぶい黄褐色細砂　粘土粒20%。
2　層　にぶい黄橙色細砂層　粘土と川砂の混合。

D－27号土坑
1　層　黄褐色細砂層　粘土粒20%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　粘土粒30%。

D－28号土坑
1　層　にぶい黄褐色細砂層　粘土粒10%。

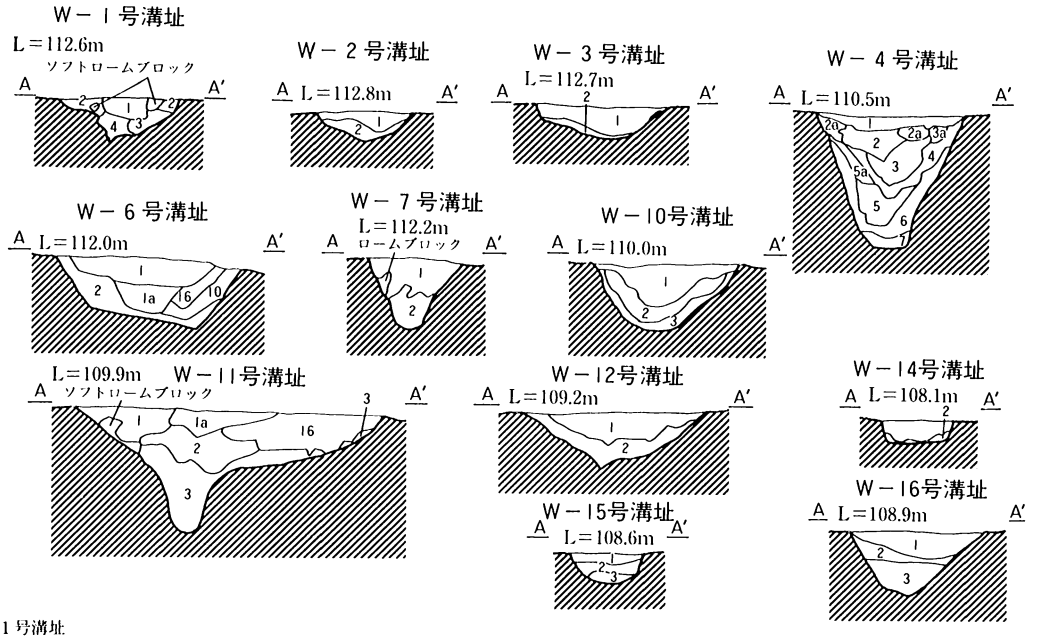
D－29号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘土粒10%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　粘土粒30%。

D－30号土坑
1　層　暗褐色細砂層　ソフトローム粒10%。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム粒30%。

D－31号土坑
1　層　にぶい黄褐色細砂＋粗砂層　ソフトローム粒30%。
2　層　黒褐色細砂層　As-Cを若干含む。
3　層　暗褐色細砂層　ソフトローム粒10%。
4　層　黄褐色細砂層　ソフトローム粒70%。

0　1：60　2m

Fig. 28　D－22～31号土坑



W－1号溝址
1　層　灰黄褐色粗砂＋細砂層　As-C５％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　As-C(３㎜)10％。
3　層　黄褐色細砂層　ソフトローム30％。
4　層　にぶい黄褐色細砂層　As-Cを若干含む。

W－1号溝址№2
1　層　褐色粗砂＋細砂層　As-C５％、焼土を若干含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　As-C10％、焼土を若干含む。
3　層　褐色細砂層　焼土を若干含む。
4　層　にぶい黄褐色微砂層　ソフトローム５％、焼土を若干含む。

W－2号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C10％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム50％。

W－3号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C10％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム50％。

W－4号溝址
1　層　灰黄褐色粗砂＋細砂層　As-B、As-Cを若干含む。
2　層　黒褐色細砂層　As-C10％、Hr-FPを若干含む。
2ａ層　にぶい黄褐色細砂層　As-C、ソフトロームを若干含む。
3　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム10％、As-Cを若干含む。
3ａ層　にぶい黄褐色細砂層　As-Cを若干含む。
4　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトロームブロックを若干含む。
5　層　黄褐色細砂＋微砂層　ソフトローム土30％、CPを若干含む。
5ａ層　黄褐色細砂＋微砂層　ソフトローム土20％。
6　層　黄褐色細砂＋微砂層　ソフトローム土40％。
7　層　黄褐色細砂＋微砂層　ソフトローム土60％。

W－5号溝址
1　層　褐色細砂層　As-C10％、黒色土主体。
2　層　にぶい黄橙色細砂層　黒色土とソフトローム30％の混土層。

W－6号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C10％、炭化物を若干含む。
1ａ層　褐色細砂層　ソフトローム土10％。
1ｂ層　灰黄褐色細砂層　As-C10％、粘土を若干含む。
1ｃ層　にぶい黄褐色細砂層　As-C５％、ソフトローム土10％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトロームをブロック状に30％含む。

W－7号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C10％、Hr-FPを若干含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　As-C10％、ソフトローム土20％。

W－8号溝址
1　層　褐色細砂層　As-C５％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム20％。

W－9号溝址
1　層　褐色細砂層　ソフトローム粒10％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム粒30％。

W－10号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C５％。
2　層　褐色細砂層　ソフトローム20％。
3　層　にぶい黄褐色微砂層　ソフトローム30％。

W－11号溝址
1　層　褐色細砂層　As-C５％、ソフトロームを若干含む。
1ａ層　褐色細砂層　As-C５％、ソフトロームを若干含む。
1ｂ層　にぶい赤褐色細砂層　炭化物を若干含む。
2　層　暗褐色細砂層　As-C10％、ソフトローム粒５％。
3　層　褐色微砂層　ソフトローム30％。

W－12号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C５％、炭化物を若干含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム10％。

W－13号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C５％。
2　層　褐色細砂層　ソフトロームを若干含む。
3　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム10％。
4　層　褐色細砂層　As-C５％、ソフトローム10％。
5　層　黄褐色細砂層　ソフトローム70％以上。

W－14号溝址
1　層　黒褐色細砂層　As-C５％。
2　層　にぶい黄橙色細砂層　As-C10％、粘土粒30％。

W－15号溝址
1　層　暗褐色細砂層　As-C５％。
2　層　褐色細砂層　ソフトローム40％。
3　層　暗褐色細砂層　ソフトローム50％。

W－16号溝址
1　層　黒褐色細砂層　As-C５％。
2　層　にぶい黄褐色細砂層　ソフトローム10％。
3　層　褐色細砂層　川砂とソフトローム主体。

0　1：60　2ｍ

Fig. 29　W－1～4・6・7・10～12・14～16号溝址

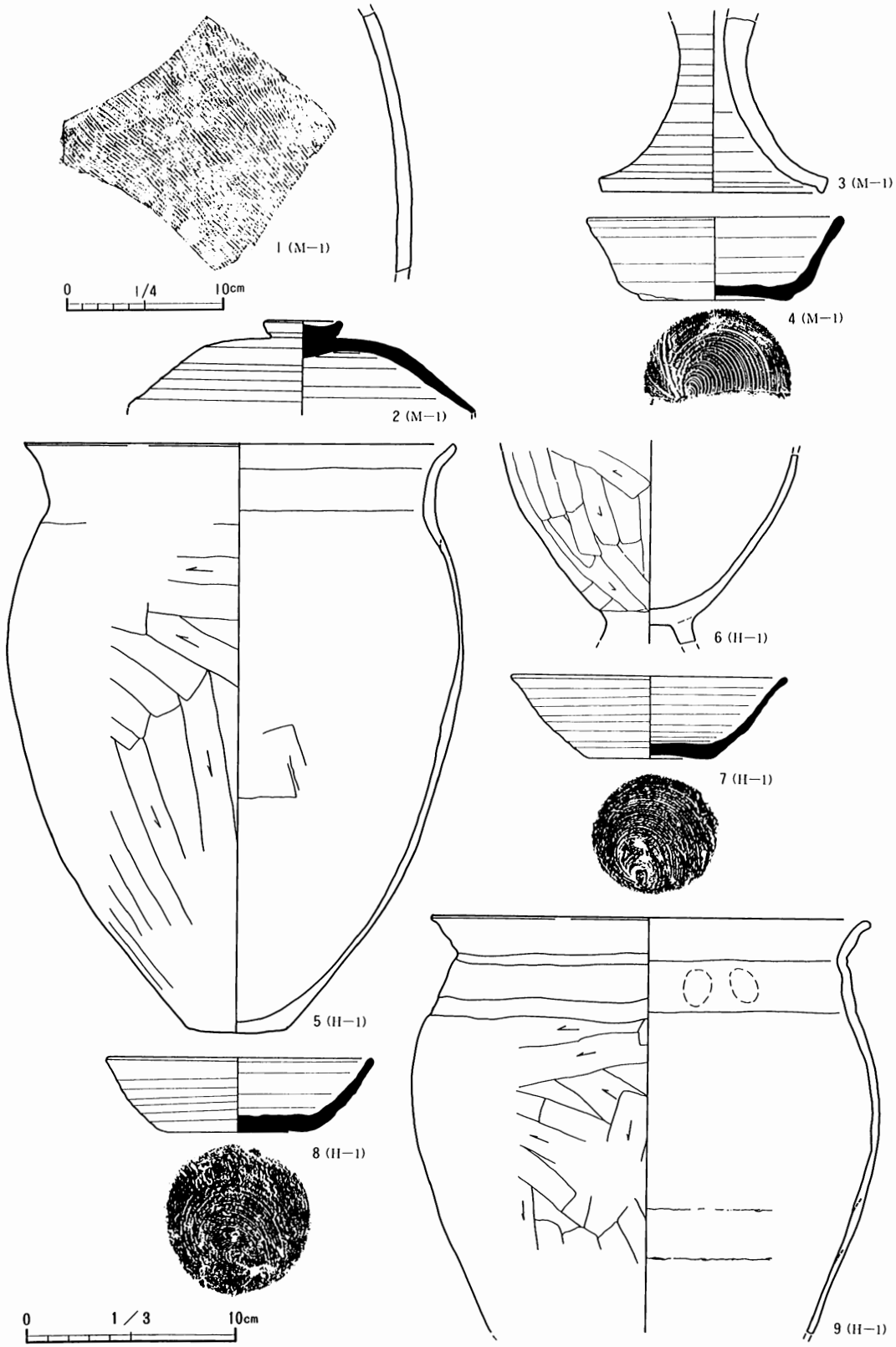


Fig. 30　古墳〜奈良・平安時代の土器(1)

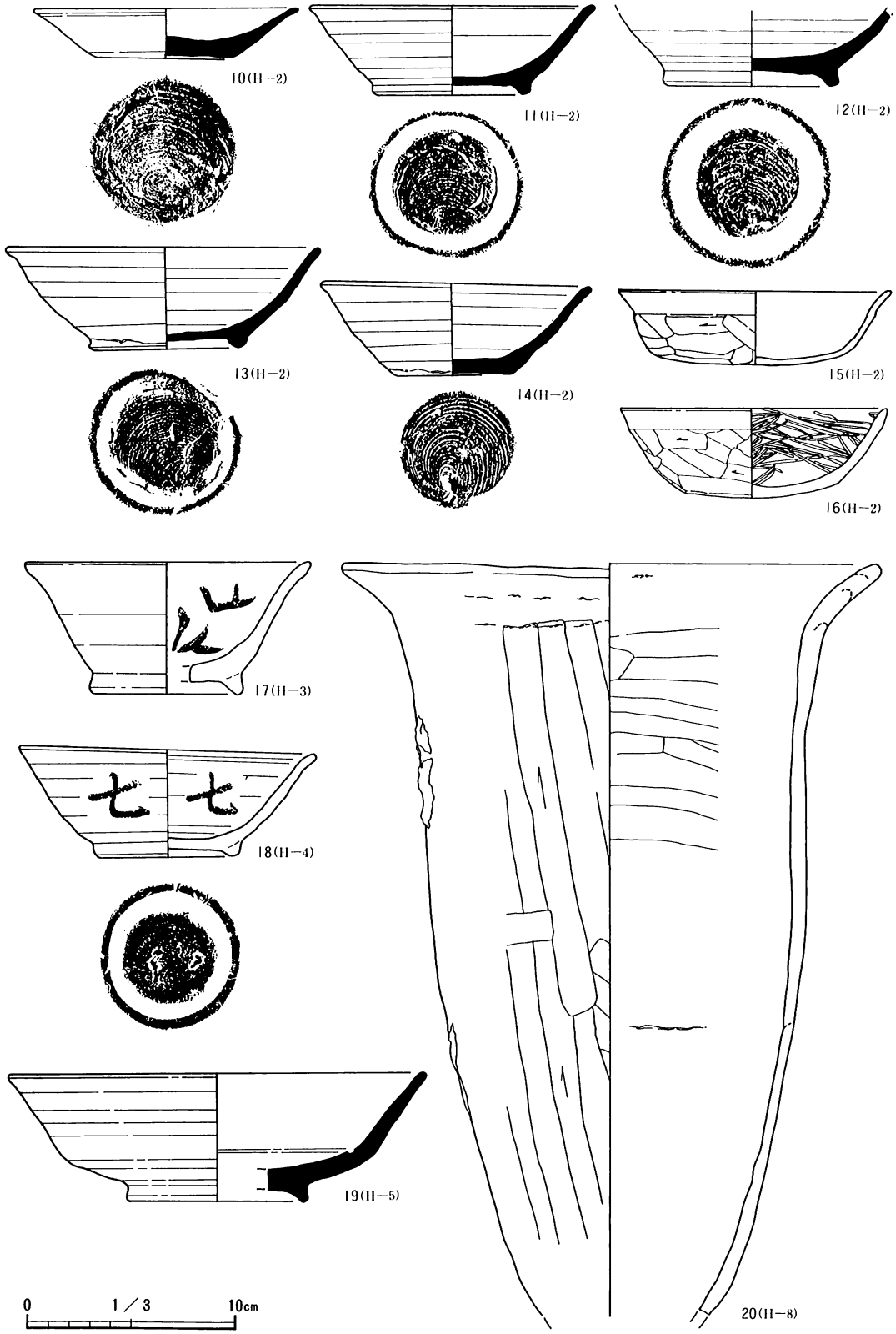


Fig. 31　古墳〜奈良・平安時代の土器(2)

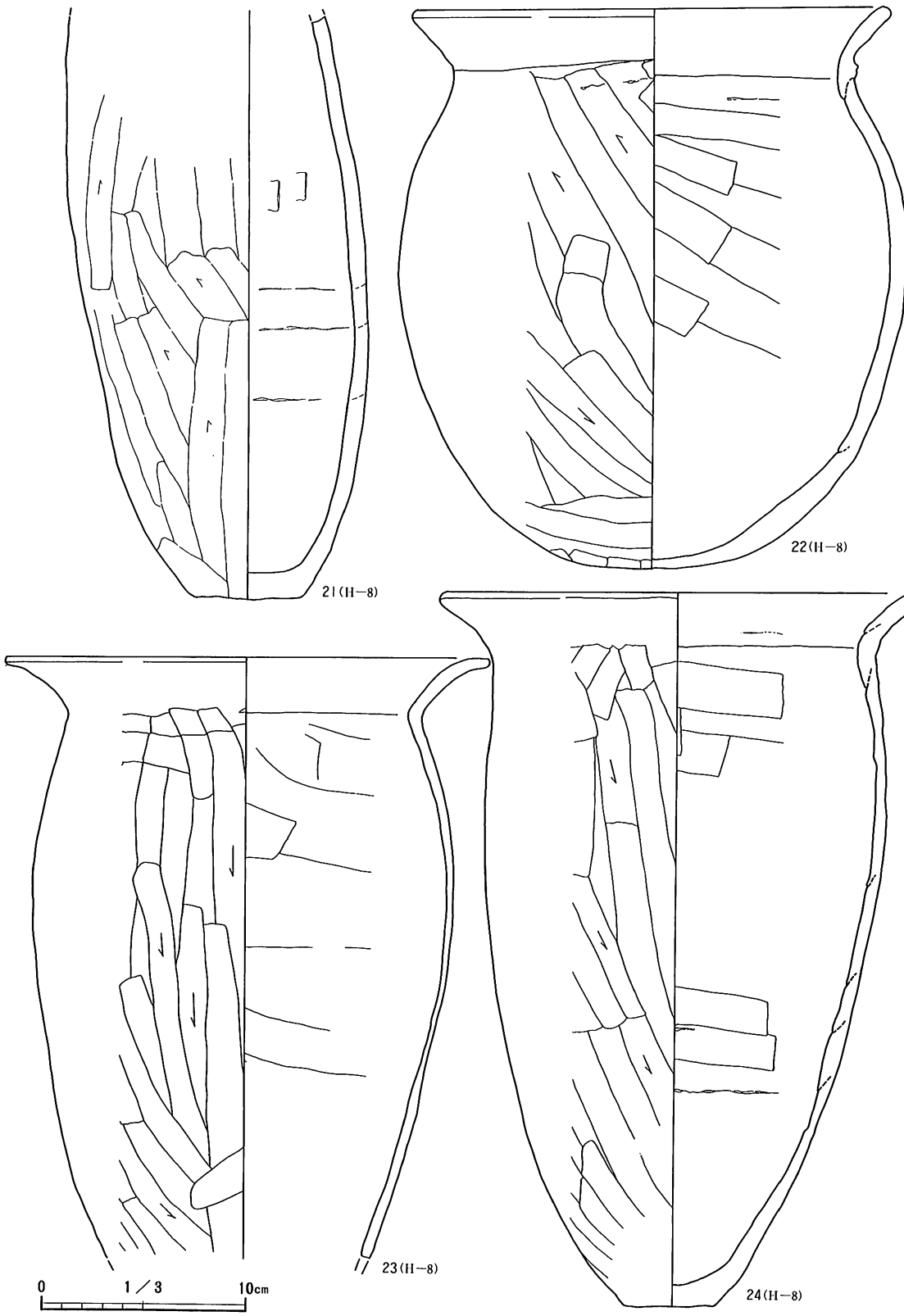


Fig. 32　古墳〜奈良・平安時代の土器(3)

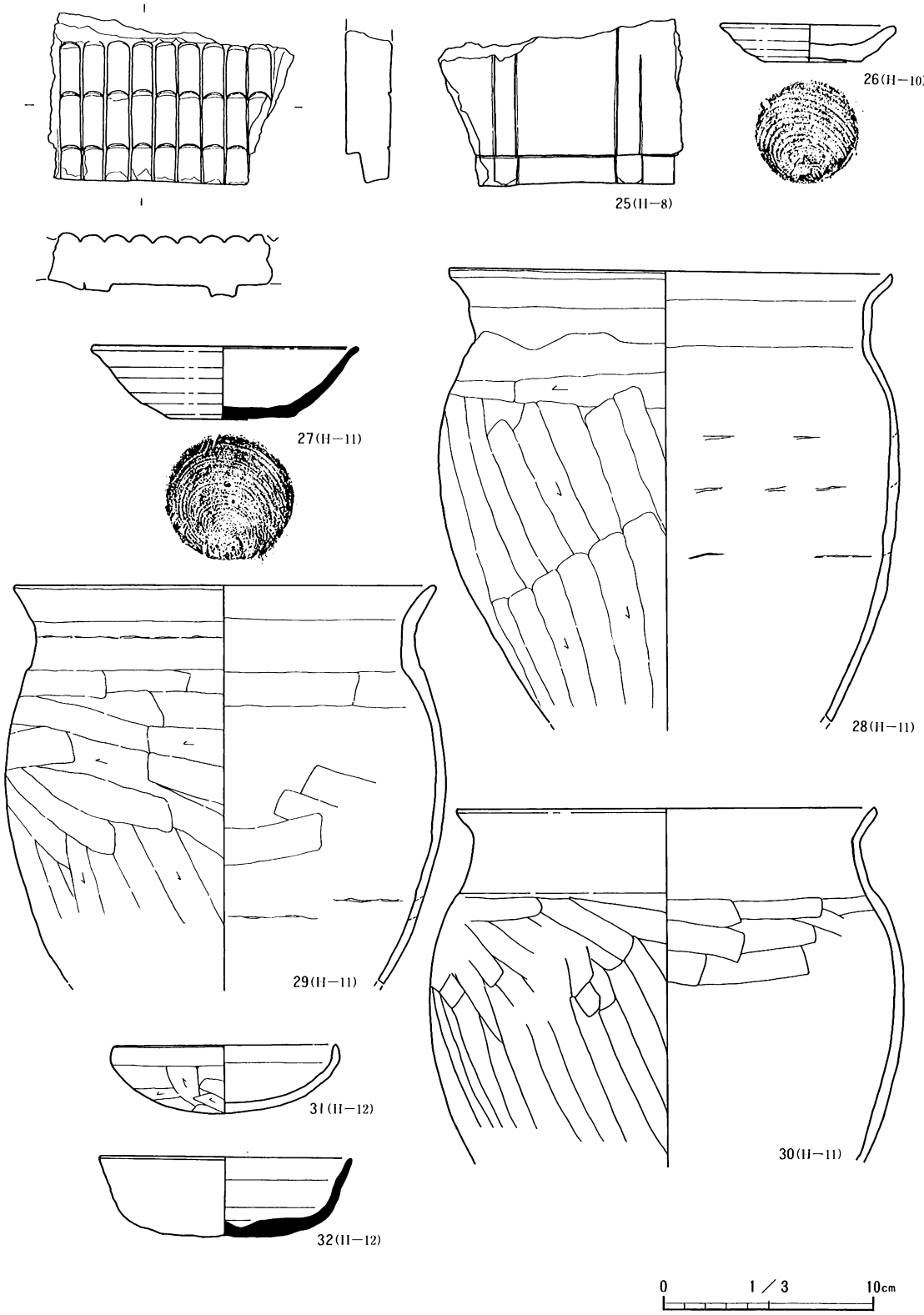


Fig. 33　古墳〜奈良・平安時代の土器(4)

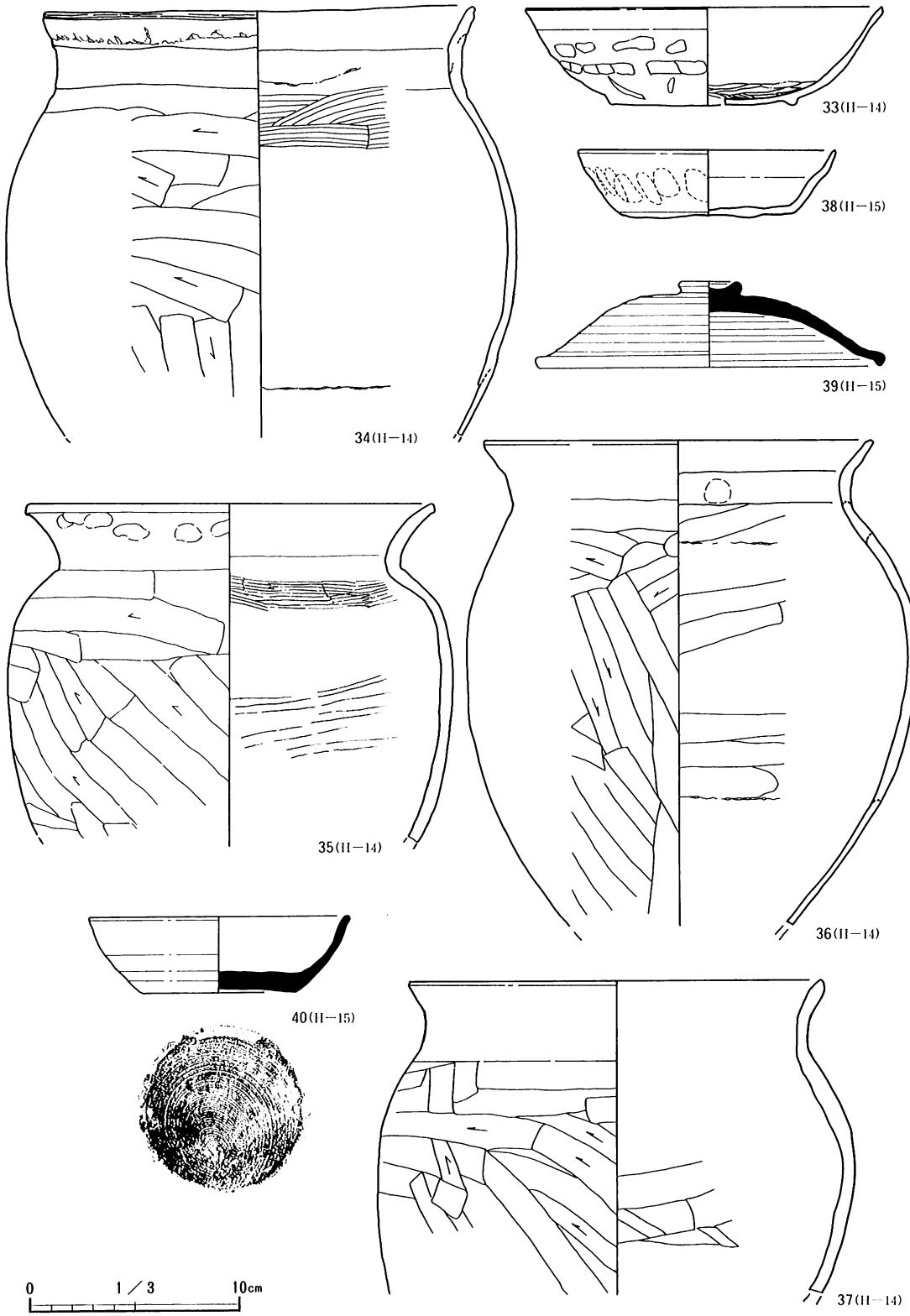


Fig. 34　古墳〜奈良・平安時代の土器(5)

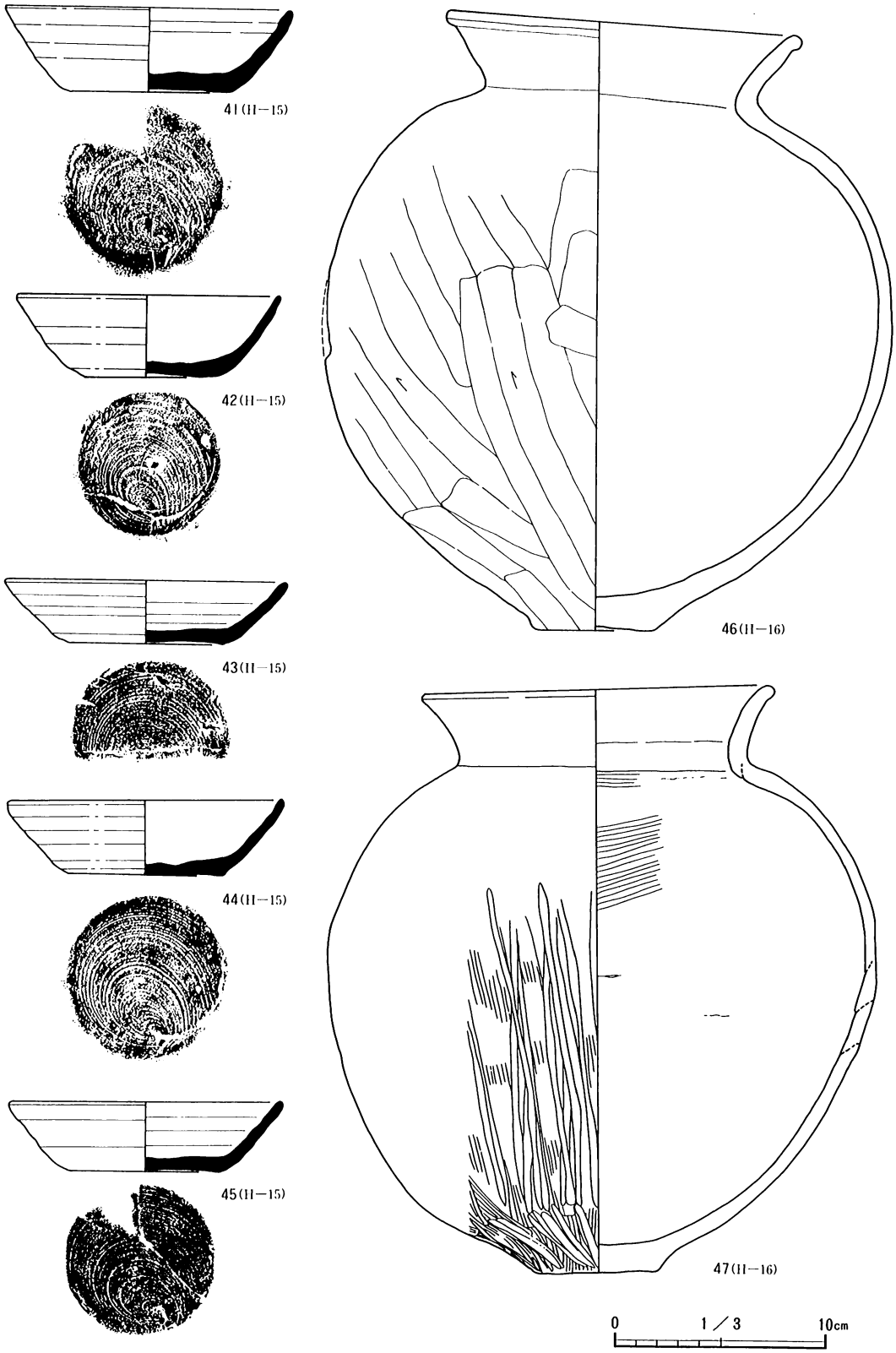


Fig. 35　古墳〜奈良・平安時代の土器(6)

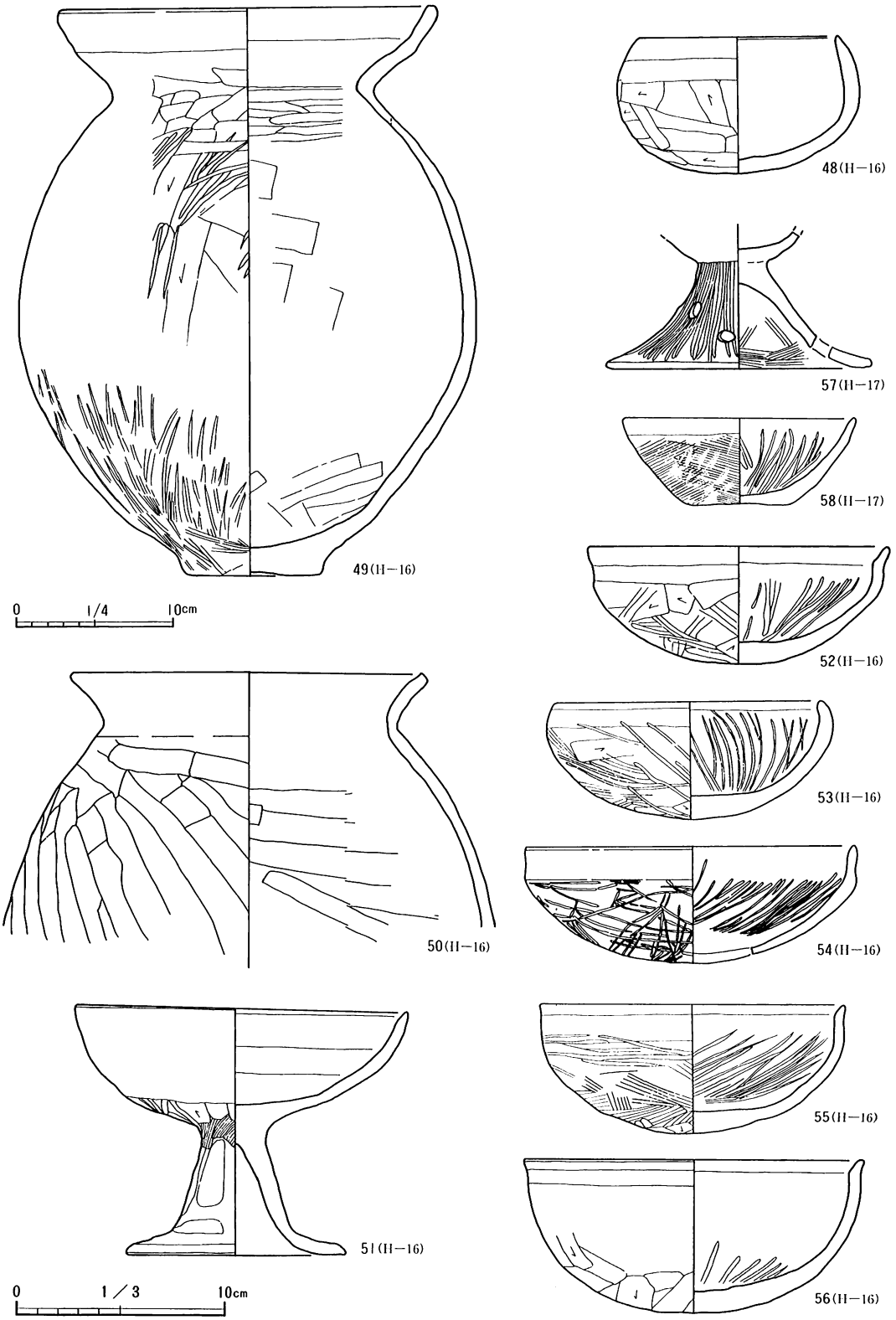


Fig. 36　古墳〜奈良・平安時代の土器(7)

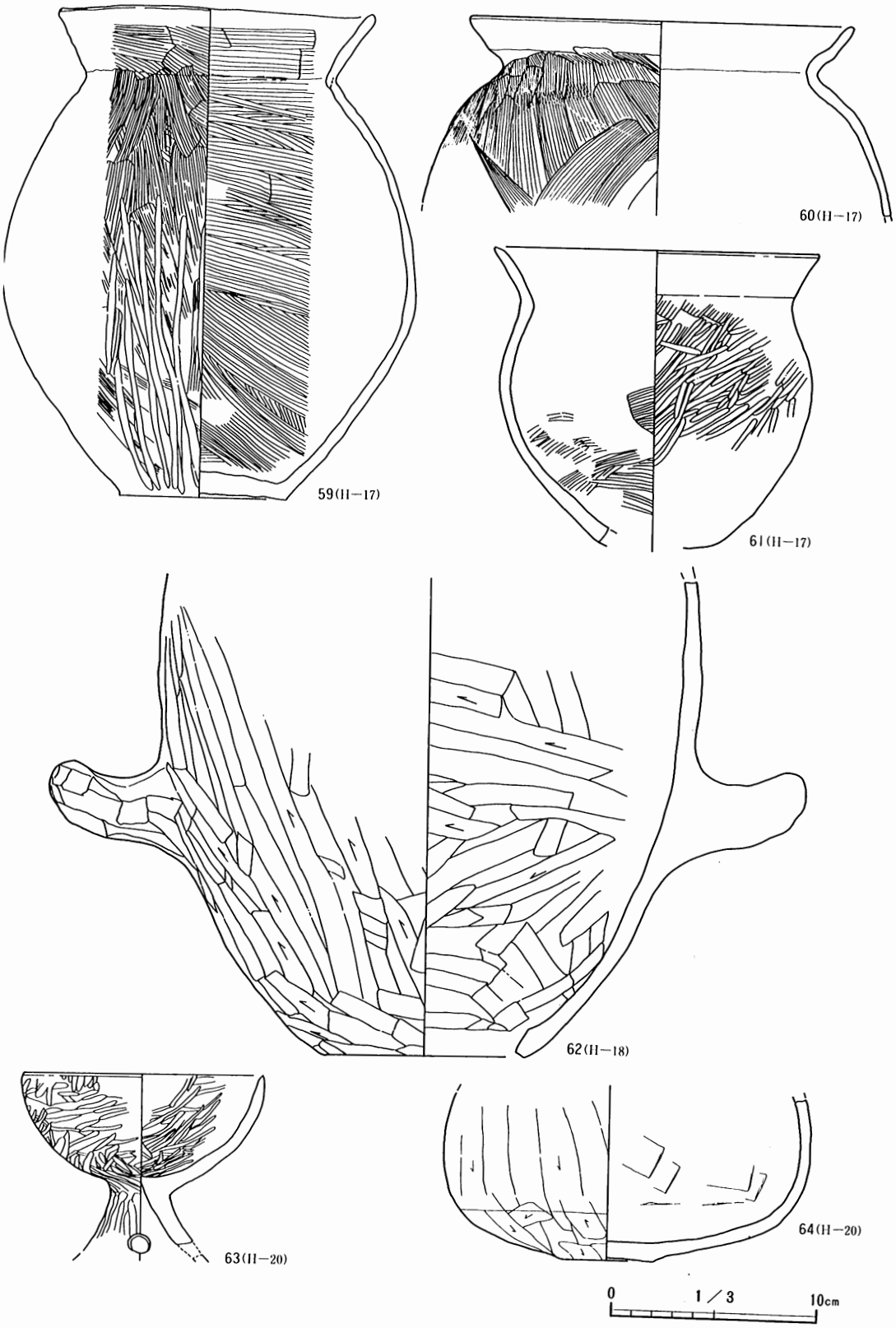


Fig. 37　古墳〜奈良・平安時代の土器(8)

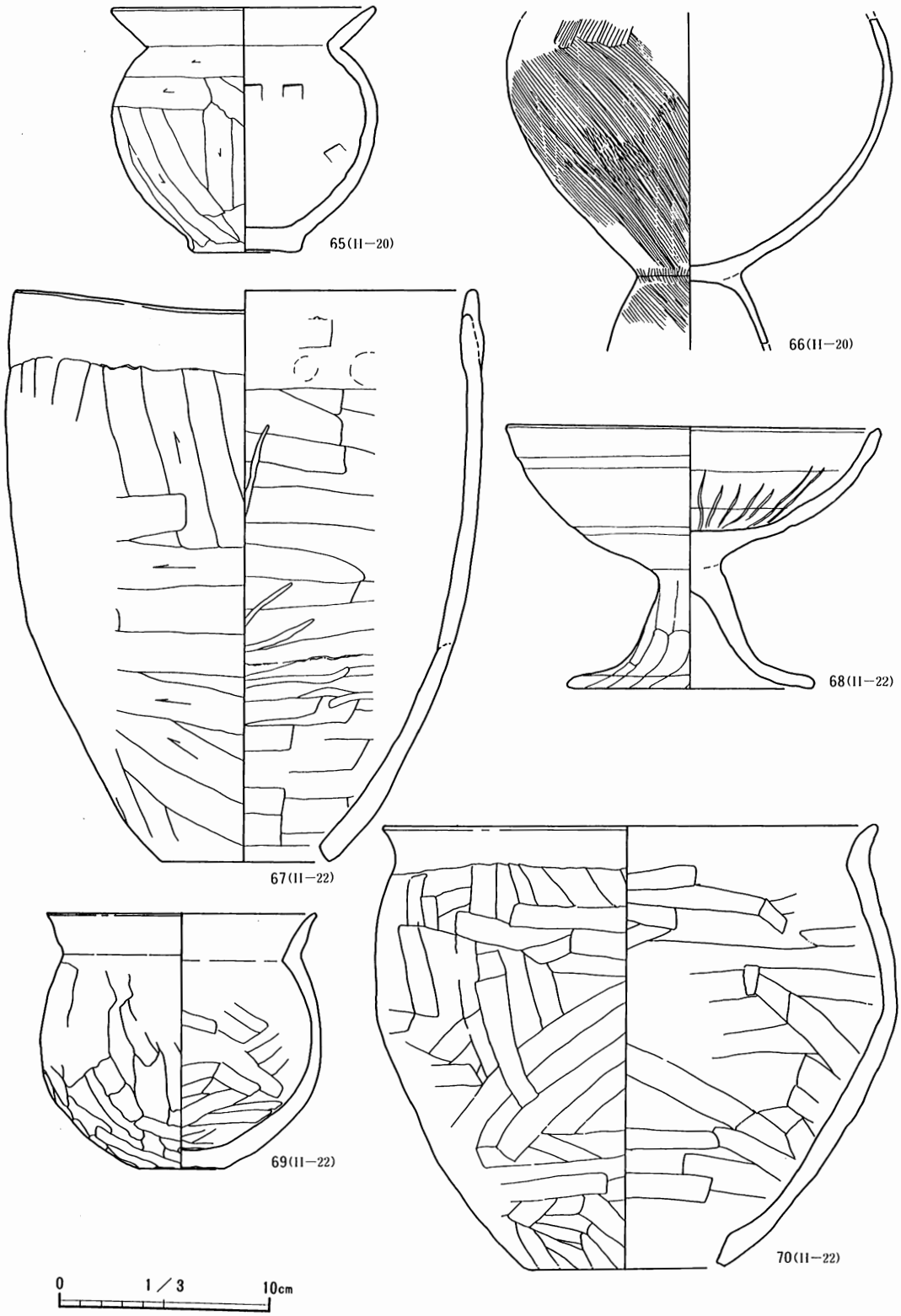


Fig. 38　古墳〜奈良・平安時代の土器(9)

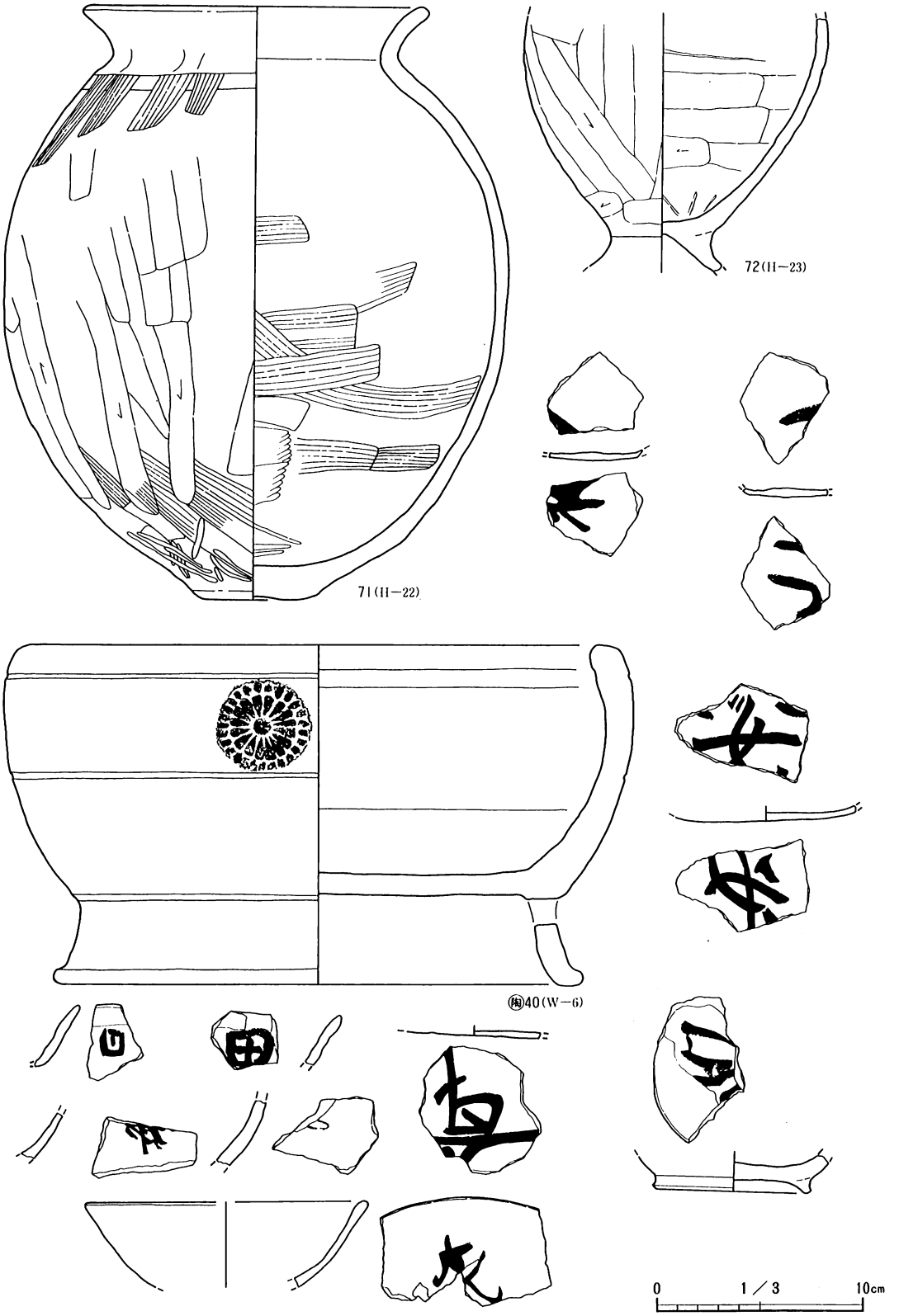


Fig. 39　古墳〜奈良・平安時代の土器(10)

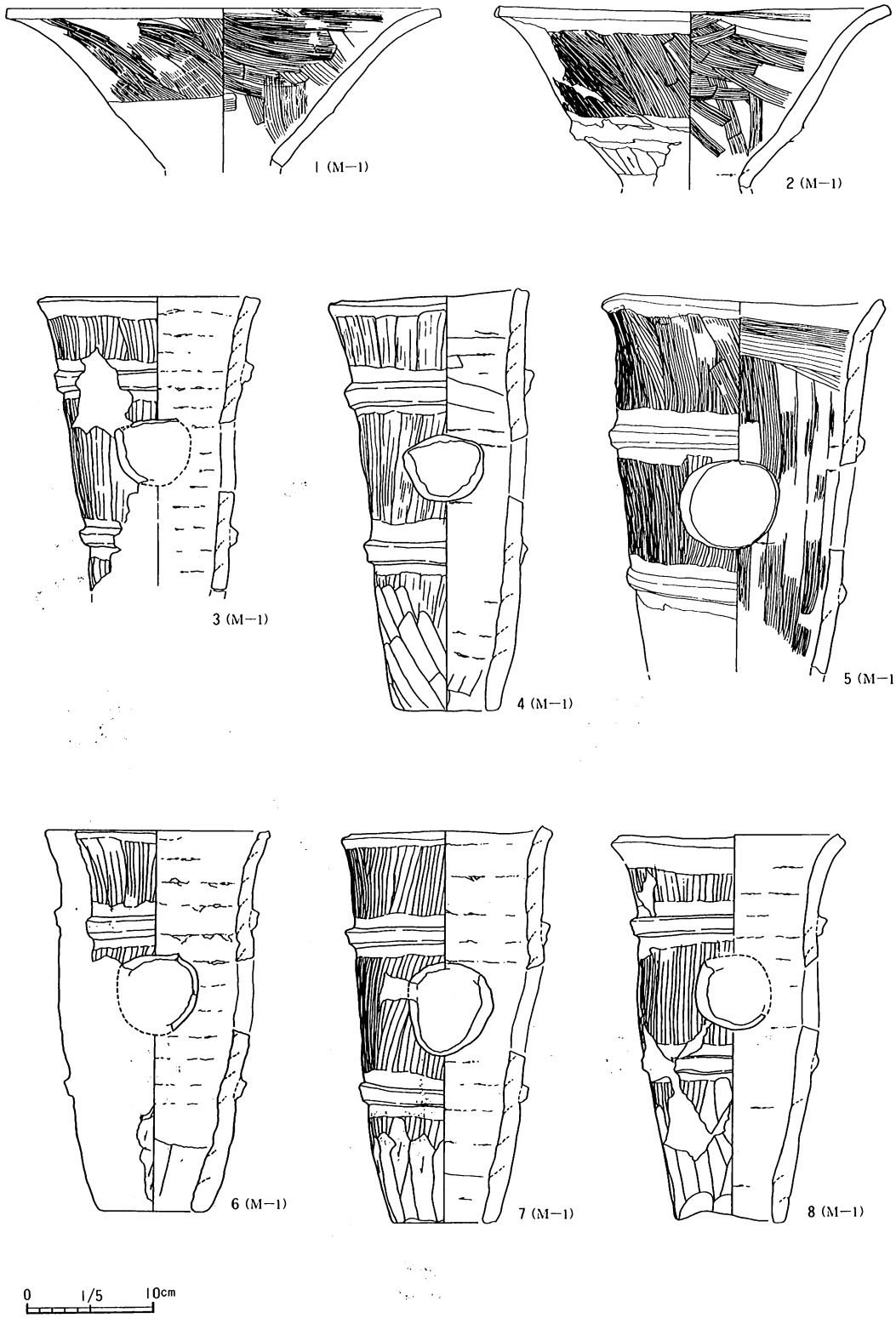


Fig. 40　古墳時代の埴輪(1)

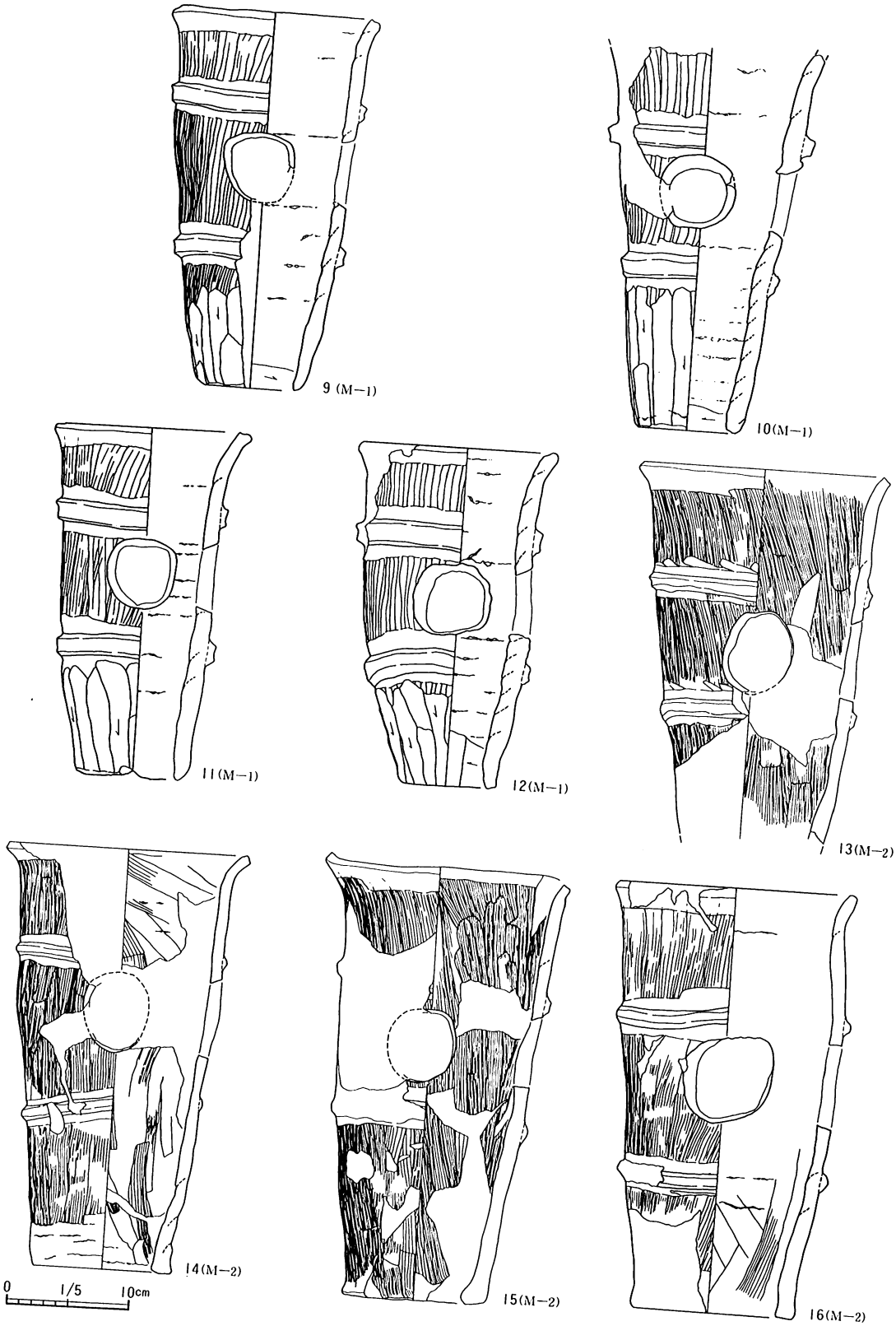


Fig. 41　古墳時代の埴輪(2)

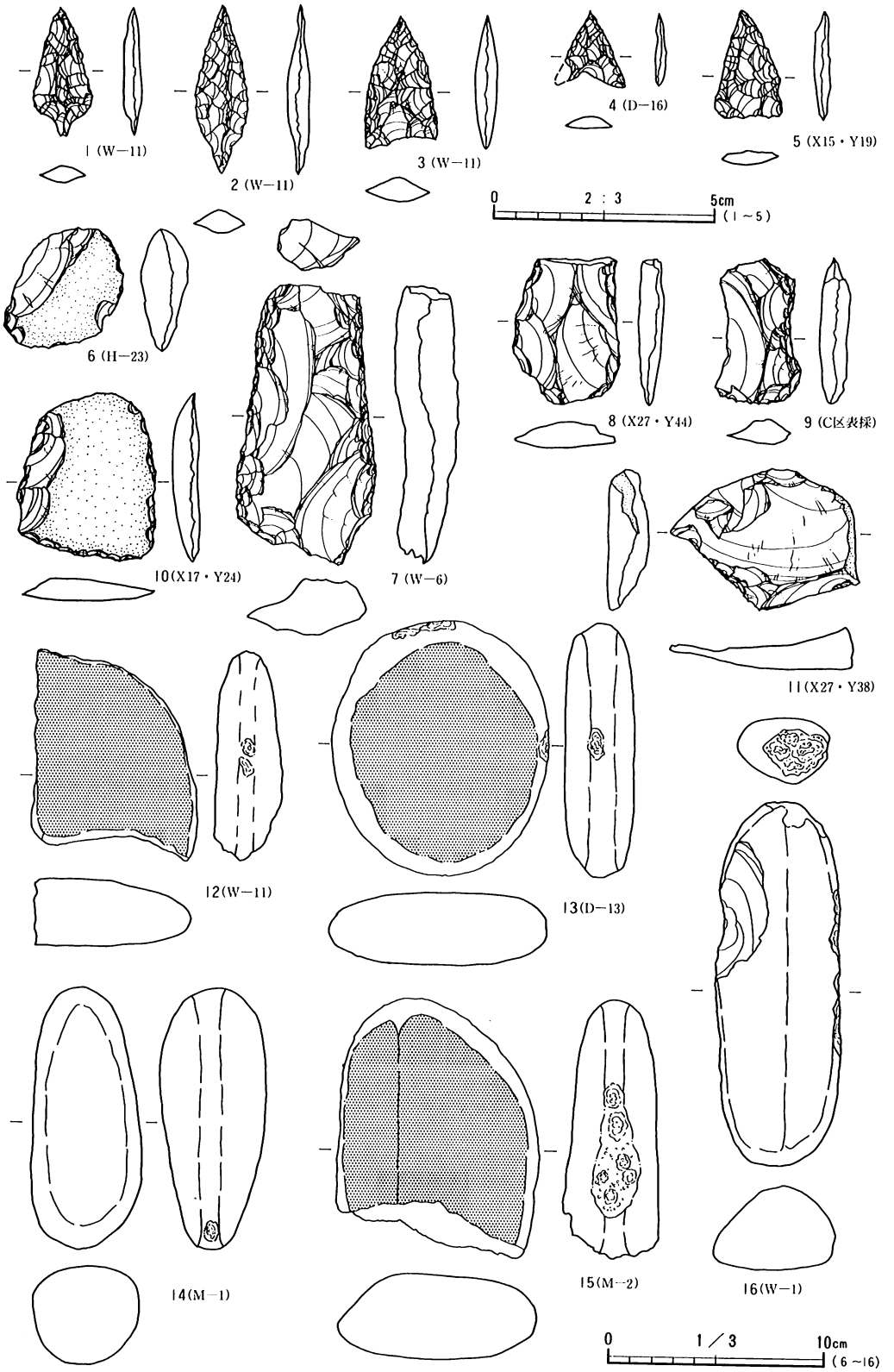


Fig. 42　石器・特殊遺物(1)

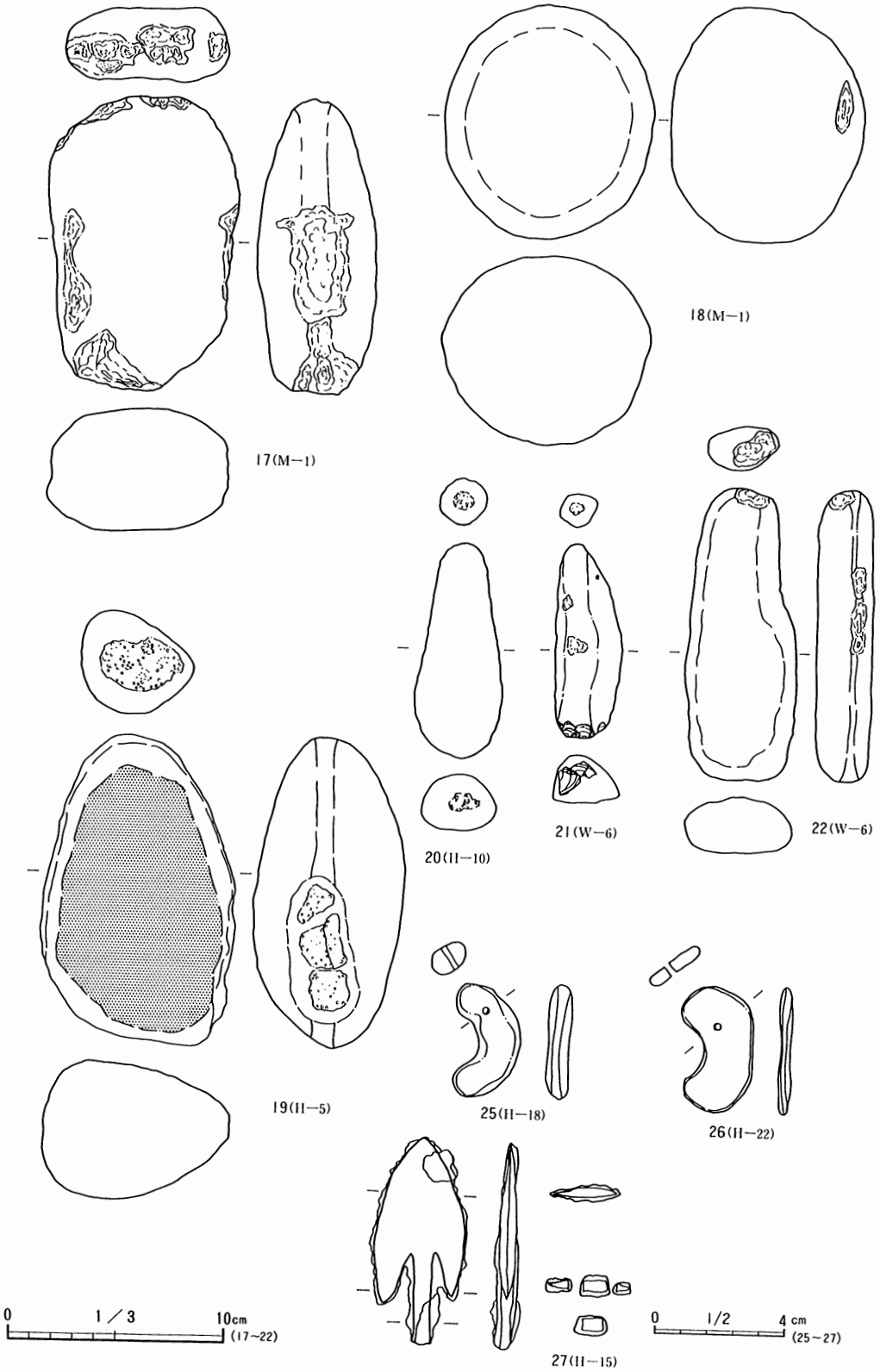


Fig. 43　石器・特殊遺物(2)

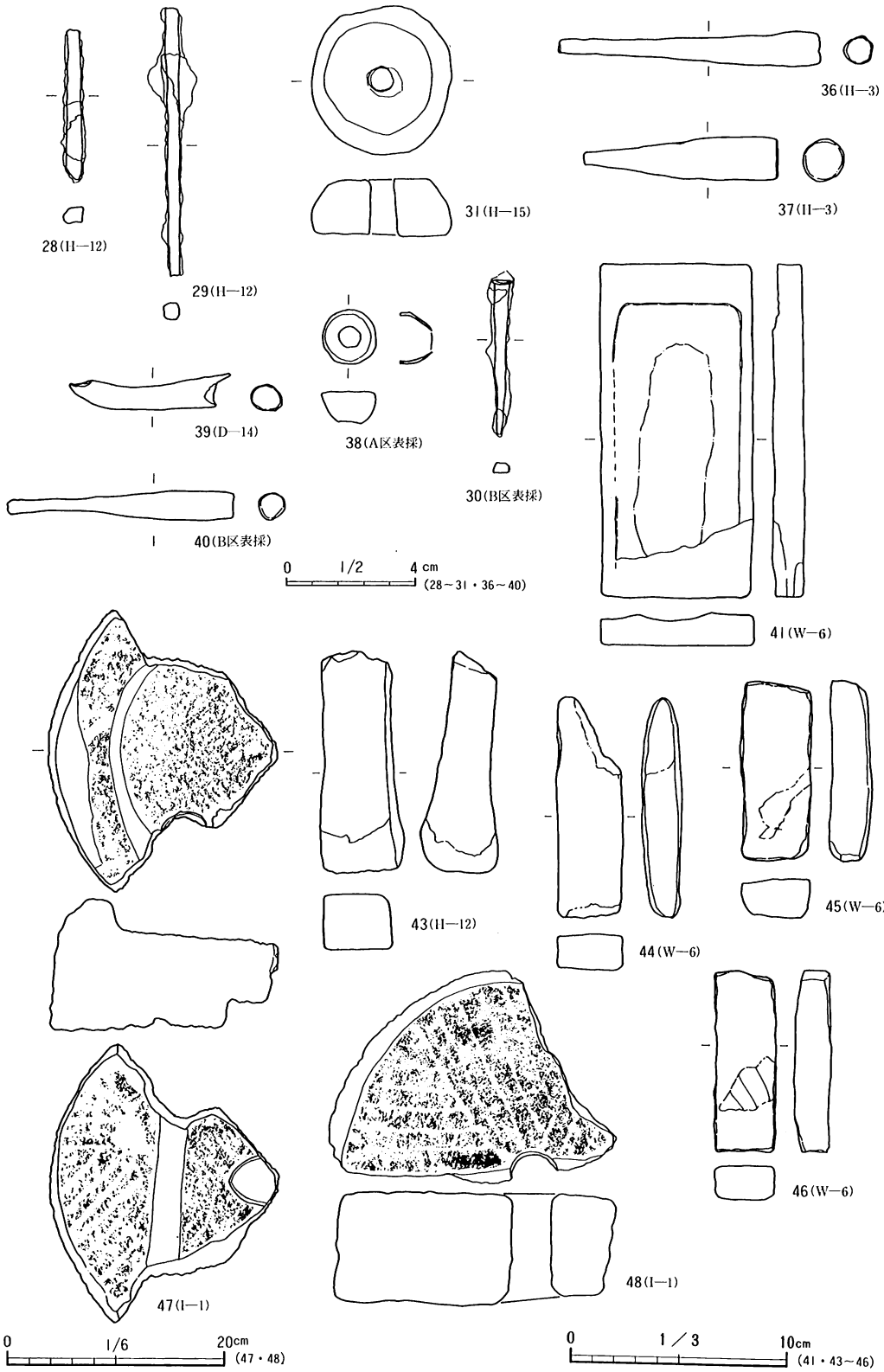
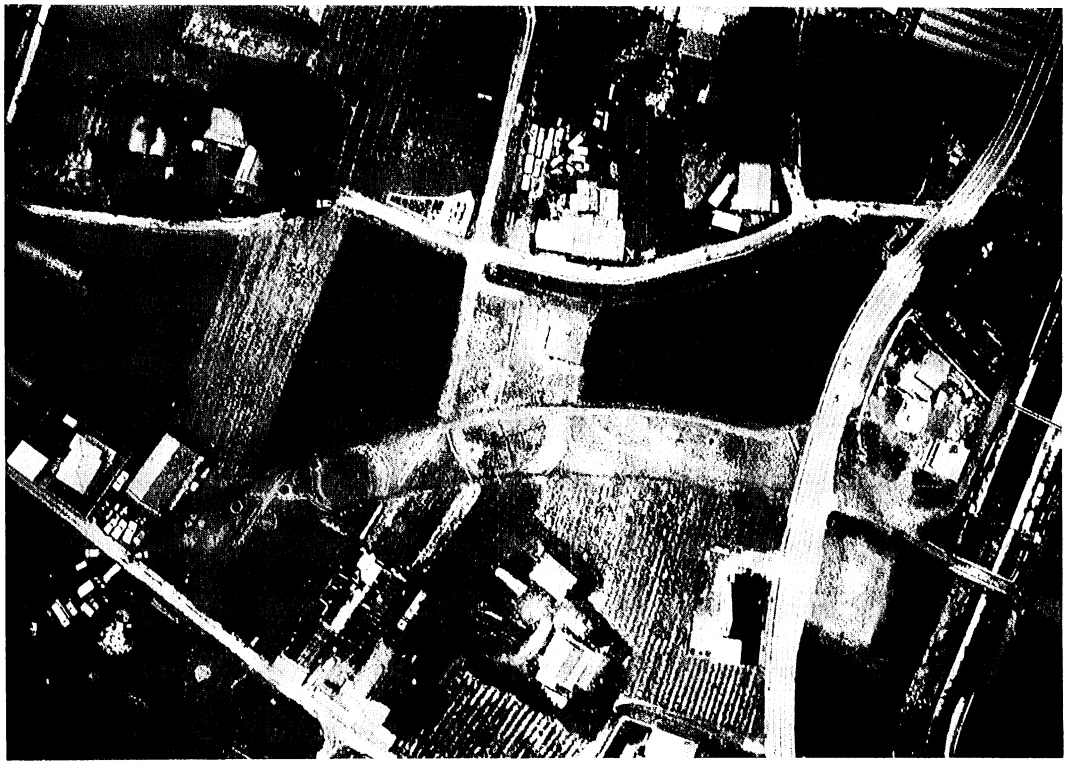
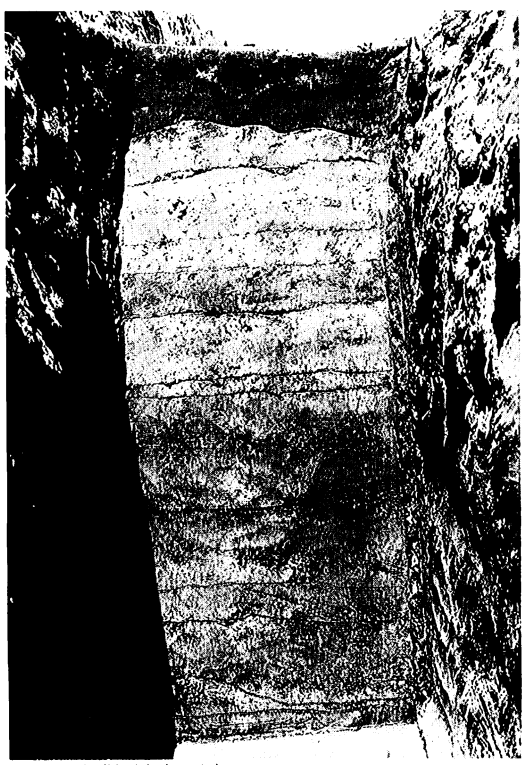


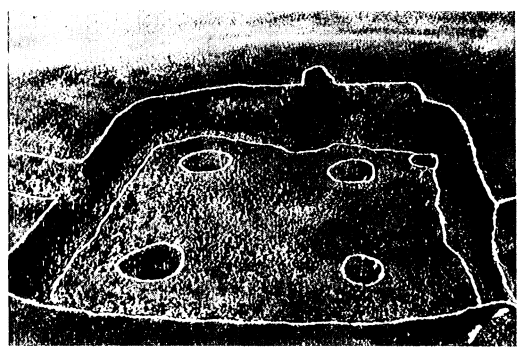
Fig. 44　石器・特殊遺物(3)



1．A区全景（上空から）



2．A区深掘（南東から）



3．H－1号住居址（西から）

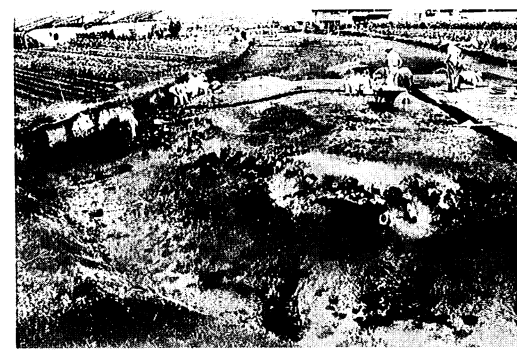
4．H－2号住居址出土遺物（南東から）

1．W－6号溝址（東から）

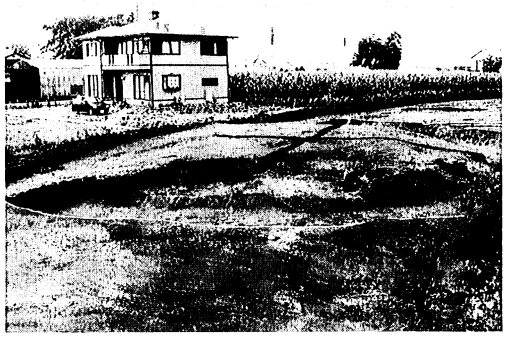
2．W－6号溝址出土遺物（南から）

3．M－1号墳（上空から）

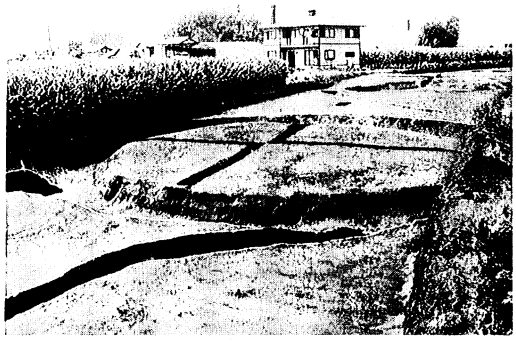
4．M－1号墳出土遺物（北から）



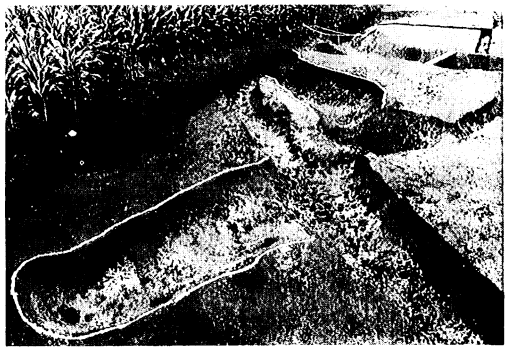
5．M－1号墳出土遺物（北から）



1．M－1号墳全景（南東から）

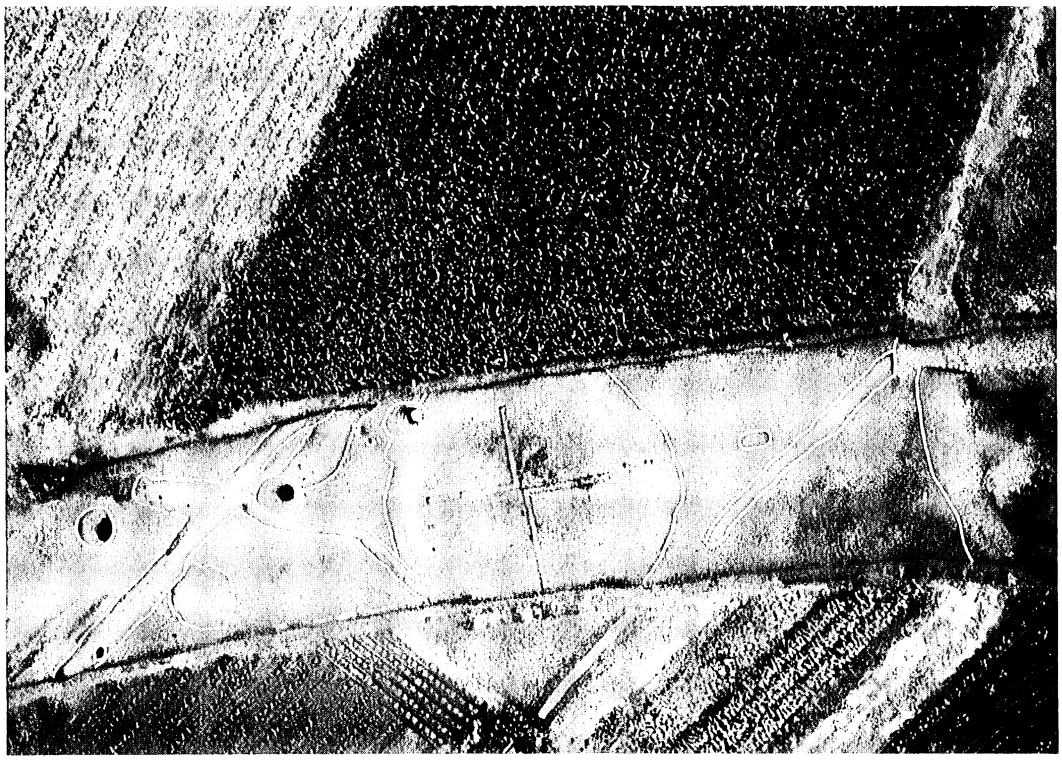


2．M－2号墳全景（南東から）

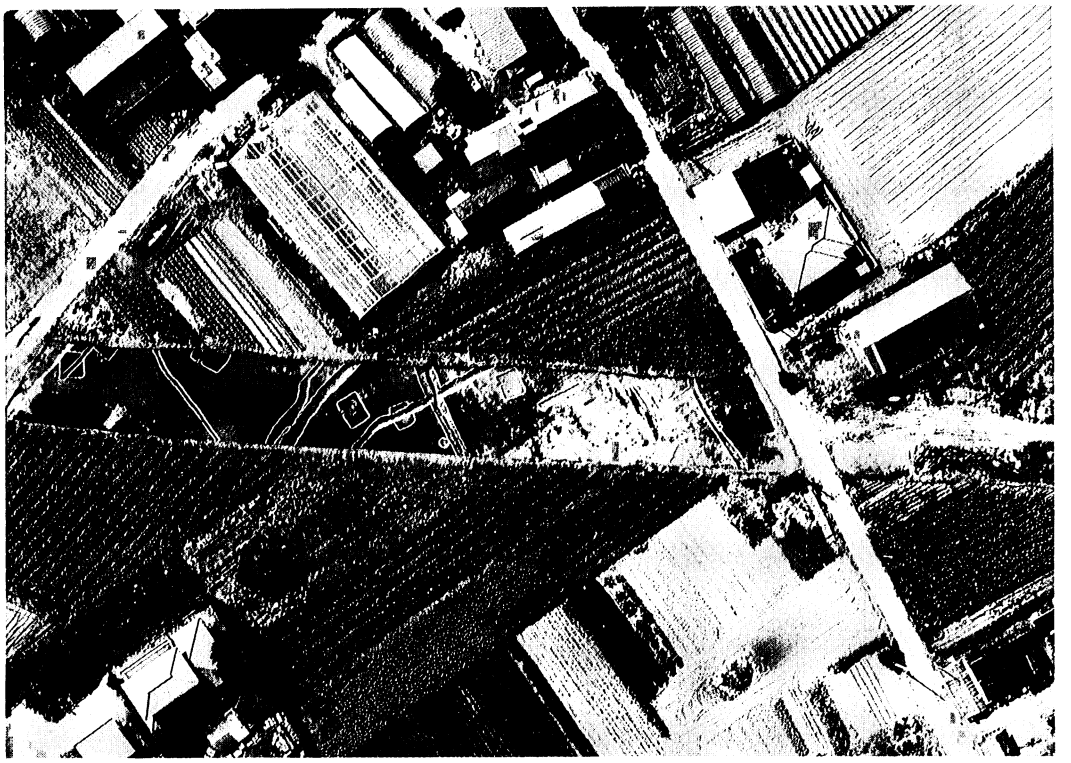


3．M－3号墳周掘（南から）

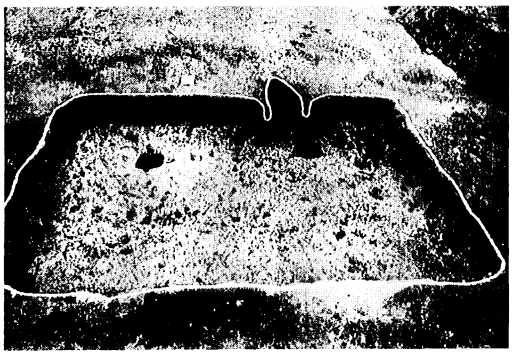
4．W－7号溝址全景（南西から）



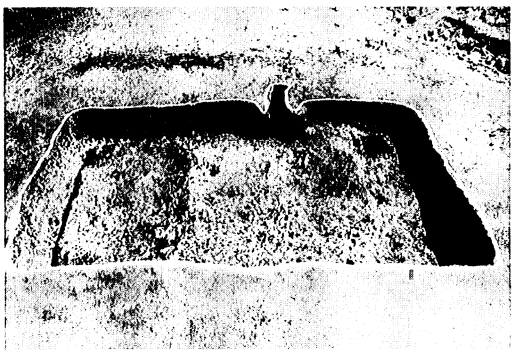
5．M－2号墳全景（上空から）



1．B区全景（上空から）

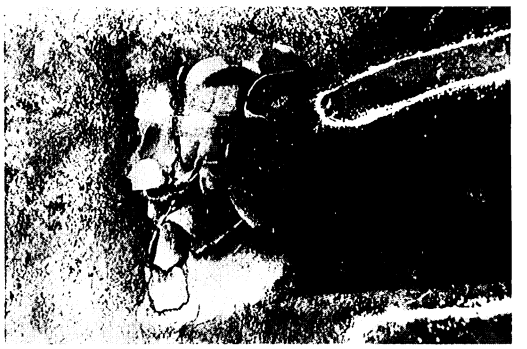


2．H－4号住居址（北西から）

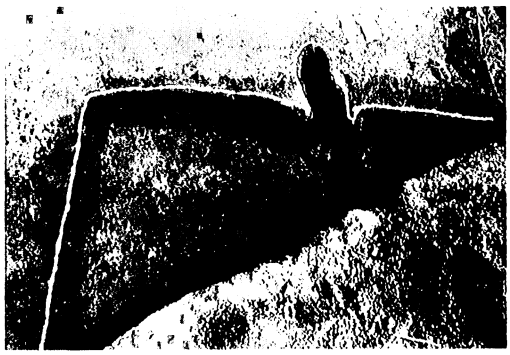


3．H－6号住居址（北西から）

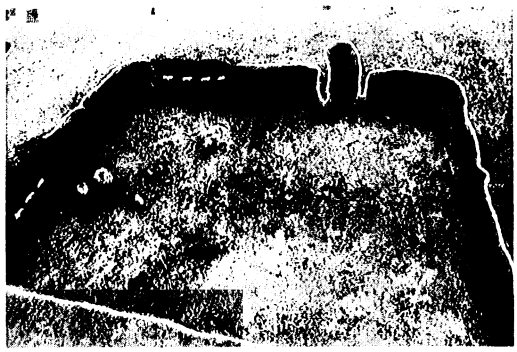
4．H－8号住居址（西から）



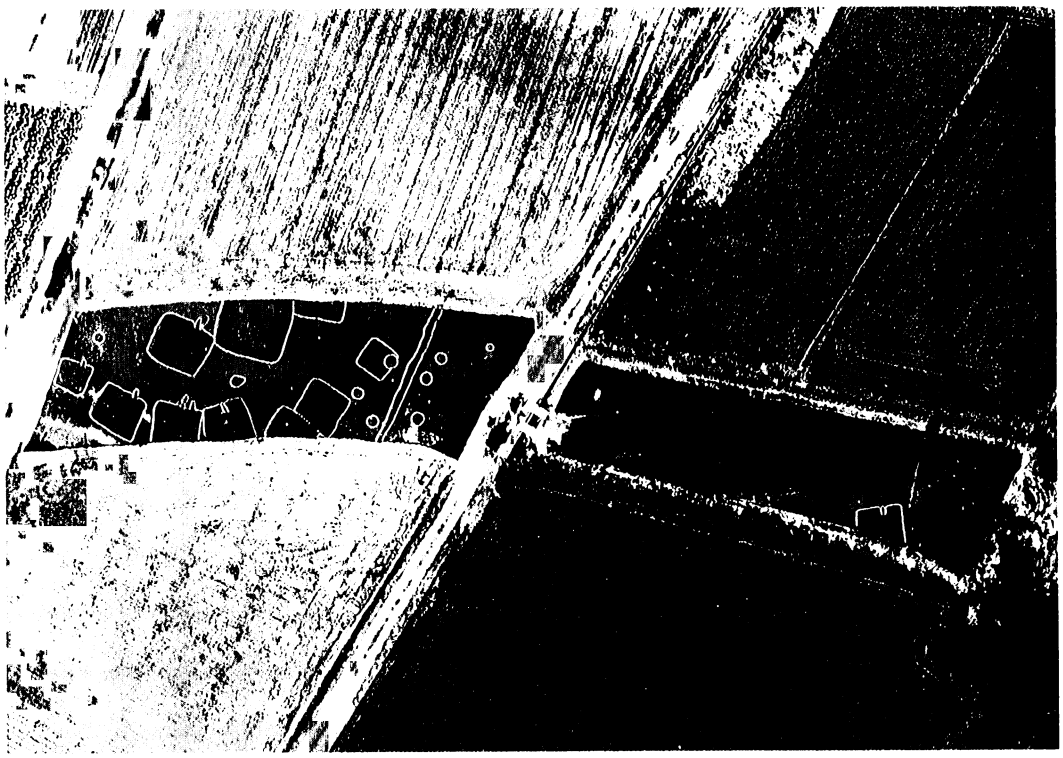
5．H－8号住居址窟出土遺物（西から）



1．H－9号住居址（北西から）



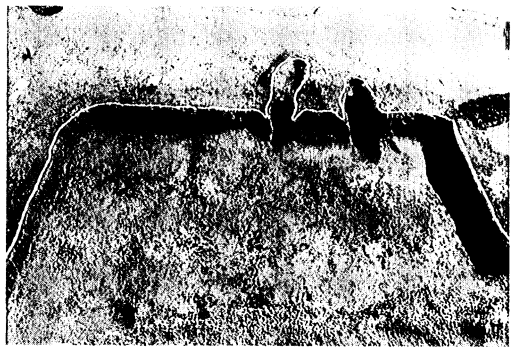
2．H－12号住居址（西から）



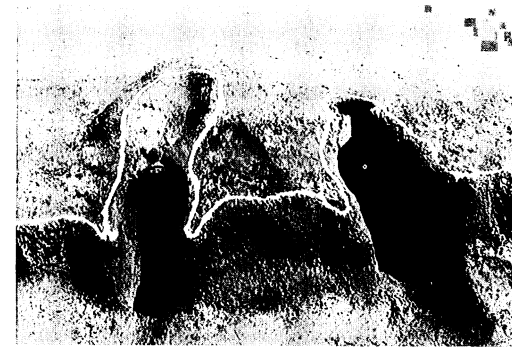
3．C区全景（上空から）

4．H－11号住居址（東から）

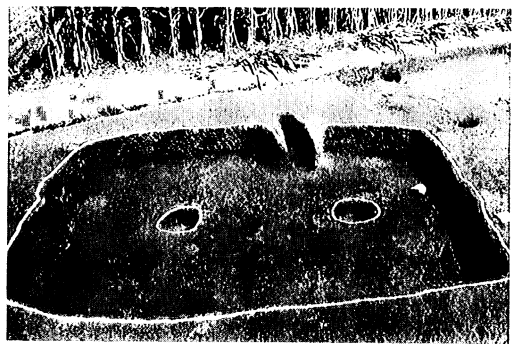
5．H－11号住居址出土遺物（南から）



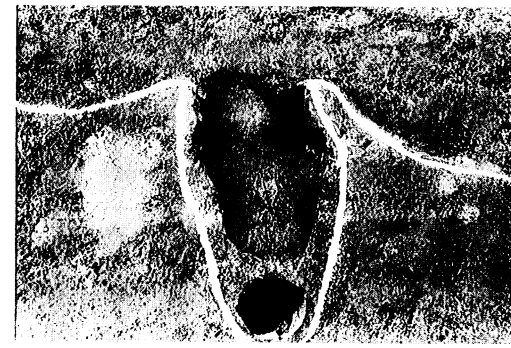
1．H－14号住居址（西から）



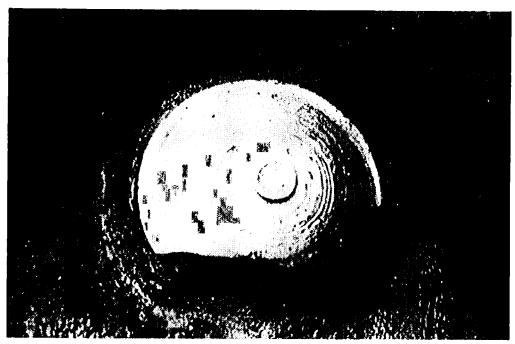
2．H－14号住居址竈（西から）



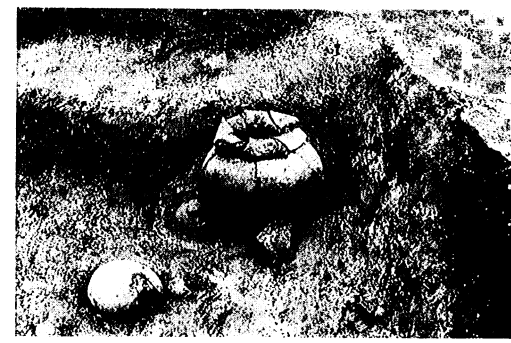
3．H－15号住居址（西から）



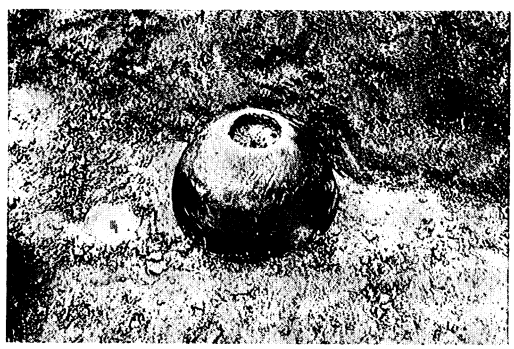
4．H－15号住居址竈（東から）



5．H－15号住居址出土遺物（西から）

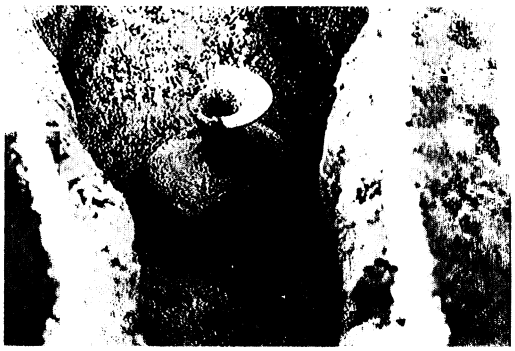


6．H－16号住居址出土遺物（南から）

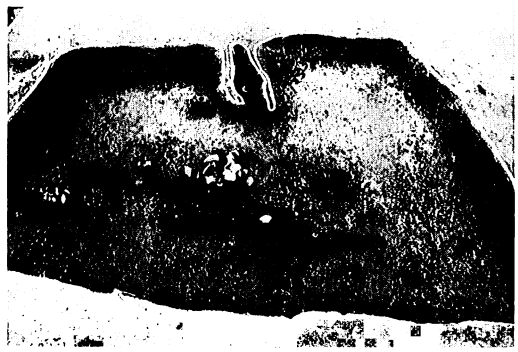


7．H－16号住居址出土遺物（北西から）

8．H－14号住居址貯蔵穴出土遺物（西から）



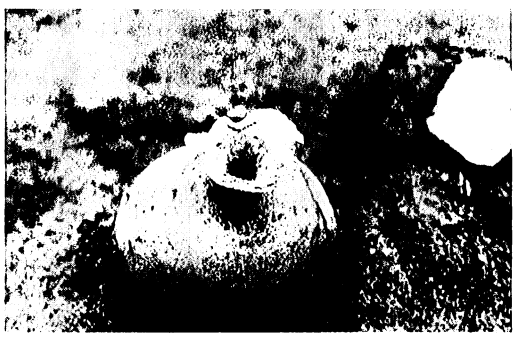
1．H－16号住居址竈内出土遺物（西から）



2．H－16号住居址（西から）

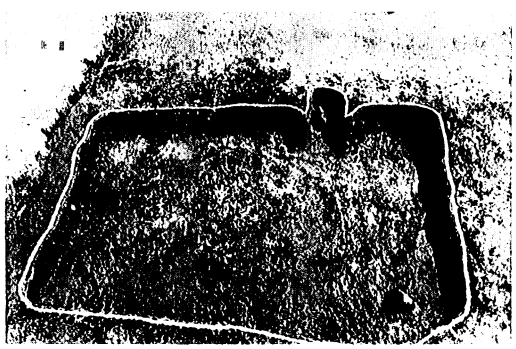
3．H－17号住居址（南から）

4．H－17号住居址出土遺物（南西から）



5．H－20号住居址出土遺物（南から）

6．H－22号住居址（西から）



7．H－23号住居址（西から）

8．H－8号住居址竈出土遺物（西から）

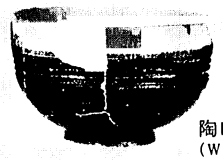
陶5
(W－6)

陶6
(W－6)

陶7
(W－6)

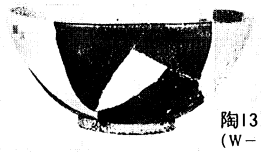
陶8
(W－6)

陶9
(W－6)

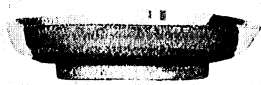

陶10
(W－6)

陶11
(W－6)

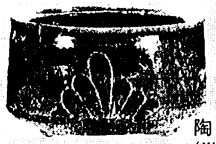
陶12
(W－6)


陶13
(W－6)

陶14
(W－6)


陶15
(W－6)

陶17
(W－6)


陶18
(W－6)

陶19
(W－6)

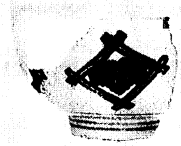
陶22
(W－6)

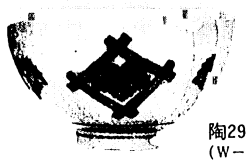
陶24
(W－6)

陶25
(W－6)

陶26
(W－6)

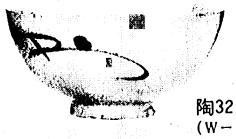
陶27
(W－6)


陶28
(W－6)


陶29
(W－6)

陶30
(W－6)

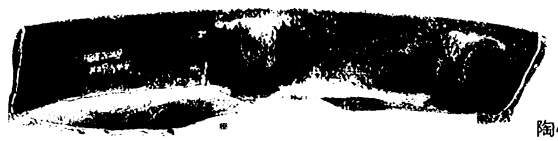
陶31
(W－6)


陶32
(W－6)

陶33
(W－6)

陶34
(W－6)

陶35
(W－6)


陶45
(W－7)

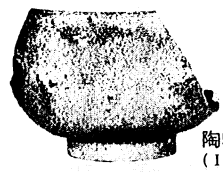
陶37
(W－6)

陶38
(W－6)

陶54
(X29・Y44)

陶42
(W－6)

陶49
(I－1)


陶50
(I－3)

陶51
(D－13)

陶55
(X32・Y46)

陶53
(X27・Y34)

陶57
(A区埋土)

陶58
(A区埋土)

陶59
(B区埋土)

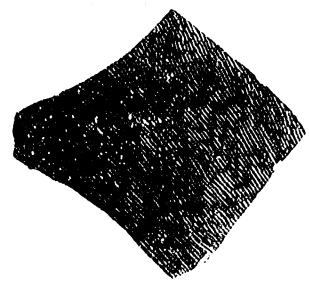
3
(M－1)

4
(M－1)

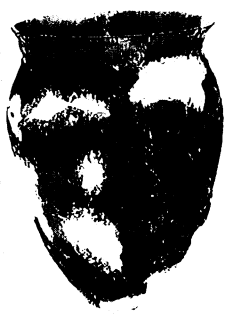
陶39
(W－6)

陶40
(W－6)

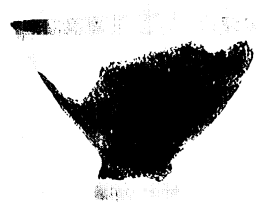
陶41
(W－6)



1
(M－1)



5
(H－1)



6
(H－1)

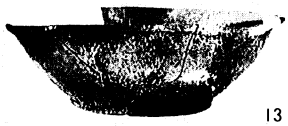
9
(H－1)

7
(H－1)

8
(H－1)

10
(H－2)

11
(H－2)



13
(H－2)

14
(H－2)

15
(H－2)

16
(H－2)

17
(H－3)

18
(H－4)

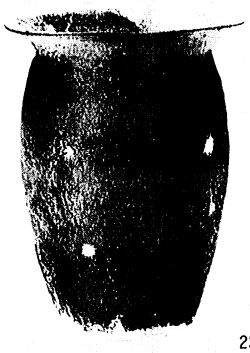
19
(H－5)

20
(H－8)

21
(H－8)

22
(H－8)

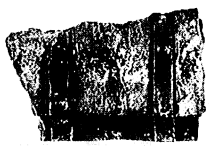
25
(H－10)



23
(H－8)

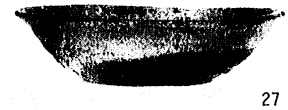
24
(H－8)

25
(H－10)



25
(H－10)

26
(H－10)



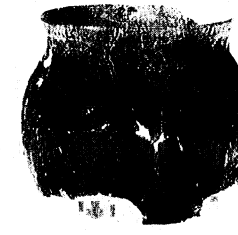
27
(H－11)

28
(H－11)

30
(H－11)

31
(H－12)

32
(H－12)



34
(H－14)

33
(H－14)

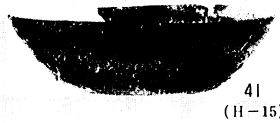
38
(H－15)

36
(H－14)

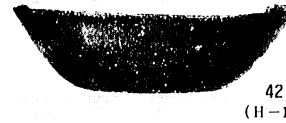
37
(H－14)

39
(H－15)

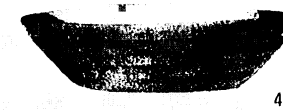
40
(H－15)



41
(H－15)



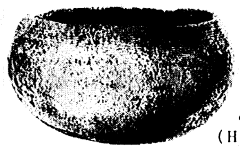
42
(H－15)



44
(H－15)

46
(H－16)

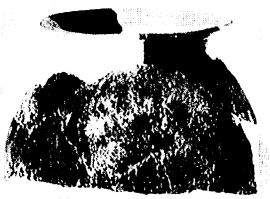
47
(H－16)



48
(H－16)

51
(H－16)

49
(H－16)



50
(H－16)

52
(H－16)

53
(H－16)

54
(H－16)

55
(H－16)

56
(H－16)

57
(H－17)

59
(H－17)

61
(H－17)

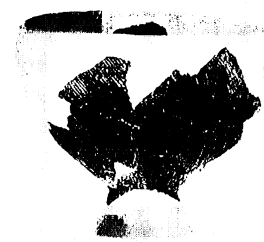
58
(H－17)

63
(H－20)

64
(H－20)

62
(H－18)

65
(H－20)



66
(H－20)

67
(H－22)

68
(H－22)

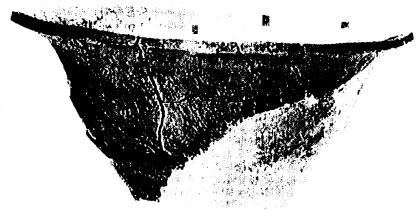
69
(H－22)

70
(H－22)

71
(H－22)

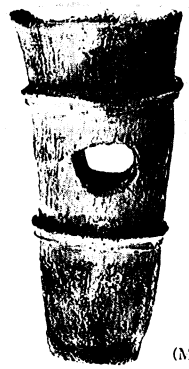
72
(H－23)

1
(M－1)

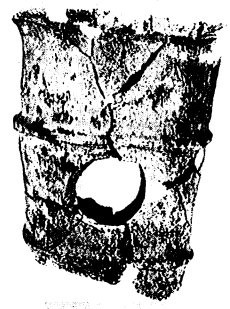


2
(M－1)

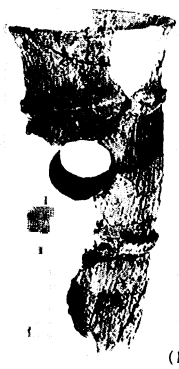
3
(M－1)



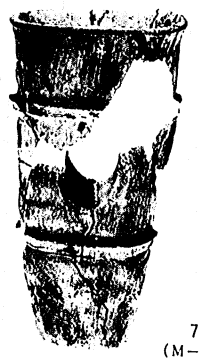
4
(M－1)



5
(M－1)

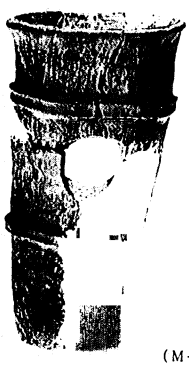


6
(M－1)

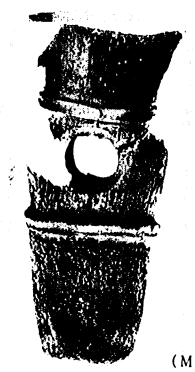


7
(M－1)

8
(M－1)

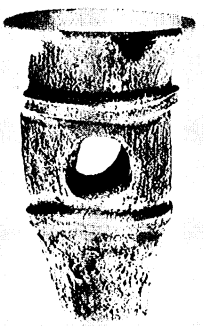


9
(M－1)

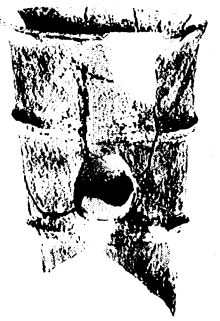


10
(M－1)

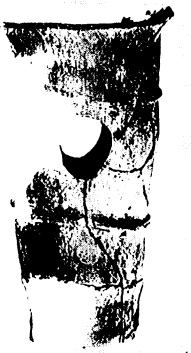
11
(M－1)



12
(M−1)

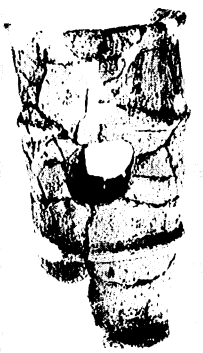


13
(M−2)



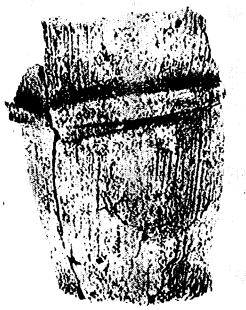
14
(M−2)

15
(M−2)

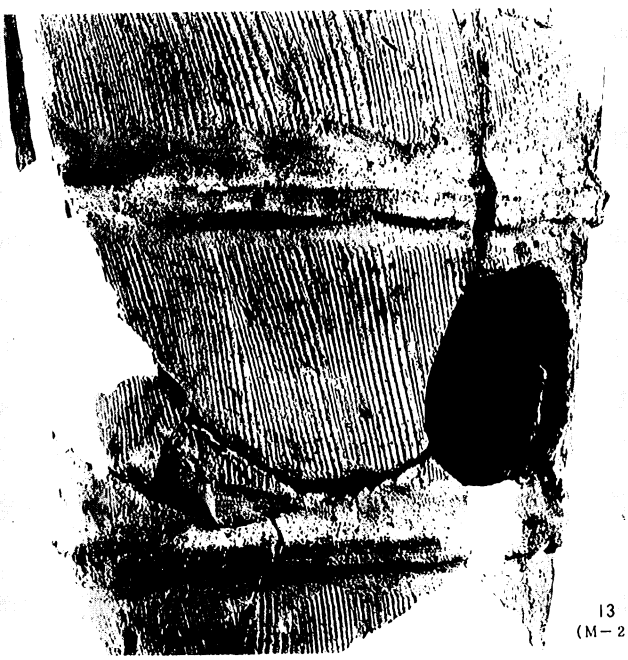


16
(M−2)

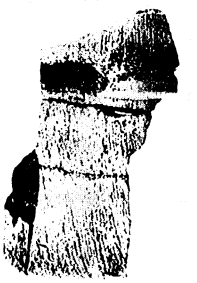
I



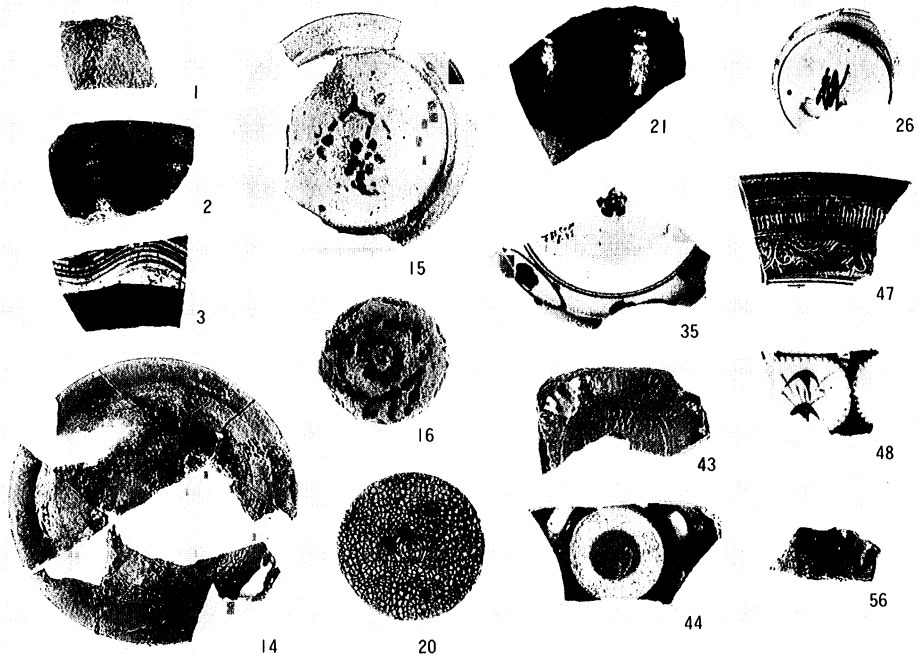
II



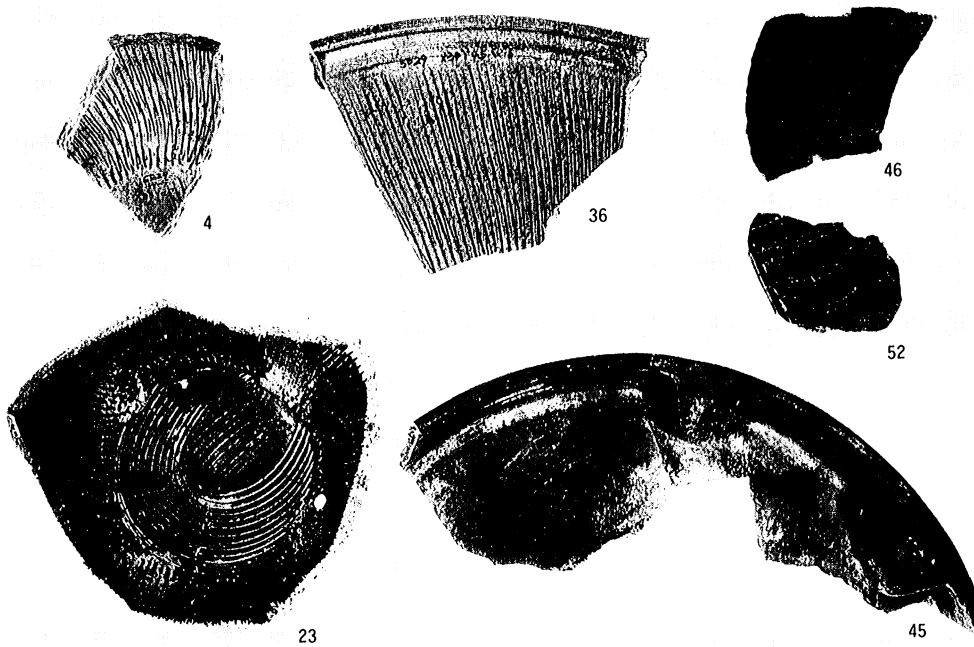
13
(M−2)



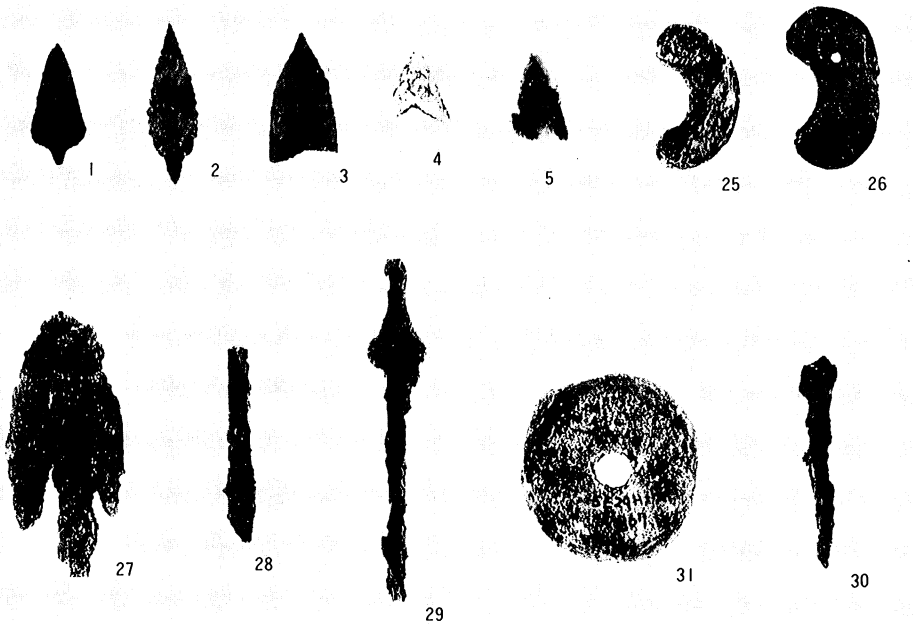
III



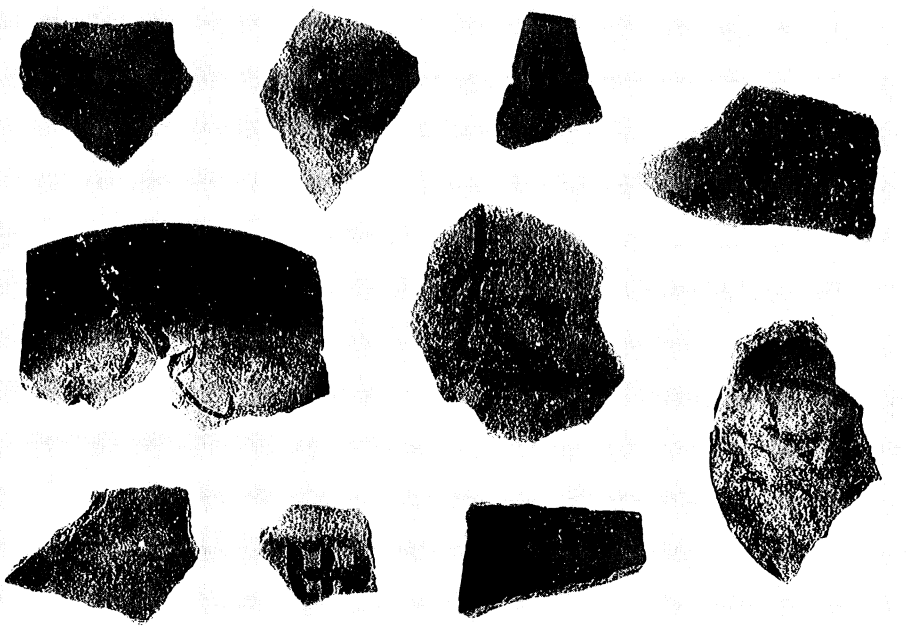
1．近世陶磁器類



2．近世陶磁器類



1．石器、特殊遺物



2．墨書土器

抄　　録

フリガナ	ジダグリサンイセキ
書名	地田栗Ⅲ遺跡
副書名	前橋市市道２４６号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	狩野吉弘　新井真典
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒３７１　群馬県前橋市上泉町６６４－４
発行年月日	西暦１９９４年３月２５日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
地田栗Ⅲ（ジダグリサン）	前橋市西大室町（マエバシシニシオオムロマチ）	10201	5E29	36°22′36″	139°11′18″	19930510 19931008	5,600㎡	市道246号 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物
地田栗Ⅲ遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代	住居址　23軒	土師器・須恵器
		古墳時代	古墳　3基	埴輪
		近世	溝址　16条	陶磁器
		近世	井戸址　4基	陶磁器

地田栗Ⅲ遺跡

1994年３月20日　印刷
1994年３月25日　発行

編集・発行　前橋市文化財発掘調査団
前橋市上泉町664-4
ＴＥＬ．0272-31-9531
印　　刷　上毎印刷工業株式会社
前橋市天川大島町305番地